

仮面少年★クウガ

快傑あかマント

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『未確認生命体事件』。

十四年前、日本中を震撼させた大事件。

大勢の人の未来……、大勢の人の笑顔……、大勢の人の大切な物を奪い取っていった、そんな事件。

でも、止まない雨がないように

拭えない涙がないように

ある時、そんな事件にも終わりが訪れた。

大勢の名も無い《英雄》達の手によって。

確かに、《未確認生命体》は、いなくなった。

でも、世界から悲しい事、理不尽な事、いろんな嫌な事がすべて無くなったわけじゃなかった。

それでも……いや、だからかな。

この世界を『優しい』し『きれい』なんだと思えるんだ。

この世界は、いなくなってしまった人達や、涙を流した人達からの『大切な贈り物』なんだ。きつと……

そんな『大切な贈り物』を、オレも護りたいんだ。

そしていつか、オレも誰かに贈りたいと思う……

だから、見ていてほしいんだ。

キミに

キミ達に

オレの

オレ達の

《変身》!!!

目次

1 : 桜色の少女★どっちでもイイ少年

1

2 : 忍び寄る蜘蛛★黒い凶獣

12

3 : 壊す者★護る者

24

4 : 変身★炎の如き戦士

37

5 : 黒い夢★赤い夢

62

6 : 取り戻せた日常★ずれ始める日常

92

e x 1 : 繰り返す少女★光の戦士

122

e x 2 : A G I T Ω ★豹群

138

e x 3 : 捜査開始★鋼鉄の騎士団

e x 4 : 蜂蜜色の少女★鋼鉄の三銃士

192

e x 5 : ぎこちない3人と1人★歪な劇

場

にごせ★サンじゅう口

245

220

1 : 桜色の少女★どっちでもイイ少年

黄昏時。空は夕焼け色から紫色に変わり始め、穏やかな週末の夜が町に訪れようとしている。

「中沢君、ちよつと良いかな？」

「え？ あつ、はい？」

少年『中沢 元国なかざわ もとくに』は、保健委員の仕事を終え、昇降口の前で愛用の折り畳み自転車『ストライダくん』をちよつど組み立てたところで女性の声に呼び止められた。

「早乙女先生。オレに、なにか？」

声の主は、中沢の担任である『早乙女 和子さおとめ かずこ』だった。やや童顔な上、小柄な彼女は頼りない印象を持たせるが、授業前に自身の失恋話と恋愛観を披露する以外は、熱心で心優しい先生だった。

「ごめんね。帰ろうとしてる所に……」

「いえ。そんなそんな、全然ですよ。ハハハ」

早乙女先生は申し訳なきように、両手を合わせるが、中沢は人の良い笑みで答えた。

「実は、鹿目さんに、これを届けて欲しいんだけど……」

それは桜色の可愛らしい筆入れだった。丁寧な刺繍で『鹿目 まどかかなめ まどか』とアルファベットで書かれている。

鹿目まどかは、中沢のクラスメイトで女子の保健委員である。

今日も、二人で保健委員として保健の先生と早乙女先生の手伝いをしたばかりだった。

「私たちの都合で、暗くなるまで付き合わせたのに、急かして帰らせちゃったから……、悪い事しちやったなあ……私たちはこれから職員会議で、その……」

早乙女先生は本当に申し訳なきさうにうなだれた。

「ダメなら、来週、学校で返しても良いんだけど……」

「イイですよ。『コイツ』で走ってから帰ろうかと思っていたので、一石二鳥というか？
どっちでもイイというか？ 全然大丈夫です」

中沢は、親指だけ立てた握り拳『サムズアップ』で、早乙女先生の頼みに応じた。

他ならぬ早乙女先生の頼みを断れないのは勿論だが、何より二日間も持ち物が手元がない鹿目まどかが気の毒に思ったのだ。あの忘れ物をした時の感覚は、中沢自身、大の苦手だった。

「本当？ 助かるわあ。あ、いけない！ 会議！ じゃあお願いね、中沢君。今度ジュー

スでもオゴつちやうから！」

そうして、早乙女先生は中沢に筆入れを渡すと、パタパタと足早に職員室に戻っていった。

中沢は、先生をしばらく見送った後、筆入れをナツプザックへ大切にしまうと、ストライダ君に乗り、校門を出た。

しばらく走ると、いくつ目かの交差点で、自動車はまったく通っていないのに律儀に信号待ちをしている桜色の髪の少女の後ろ姿を見つけた。

鹿目まどかに違いない。

「おーい、鹿目さーん！」

中沢の呼びかけに少女は振り返った。

「中沢くん？ どうしたの、帰り道こっちじゃないよね？」

はたして少女は鹿目まどかだった。

中沢は、彼女を脅かさないように手前で自転車を停めて降りると、自転車を支えながら、器用にナツプザックから筆入れを取り出すと、

「これ！ 忘れ物。鹿目さんのだよね？」

と、まどかに手渡した。

「あつ……、うん。わたしのだ。そっか、わたし保健室に置いて来ちやつたんだ。中沢くん、ありがとう」

まどかは一つ頷き、微笑むと軽く頭を下げた。

「いやあ、そんなそんな。お礼なら早乙女先生にしてよ。オレなんか、頼まれるまで気が付かずに帰る所だっただしね。ハハハ」

中沢は困った様に笑った。これくらいの事でお礼を言われたら、照れくさいっただらな
い。

「えへへ。もちろん先生にもお礼は言うけど、持ってきてくれたのは、中沢くんだし。だから、ありがとうだよ」

まどかは、中沢につられる様に笑ってから、再び頭を下げた。

「そう……かな？　じゃあ、ゼンゼンお安い御用だったよ？」

「うん！」

なぜか菌切れの悪い中沢の返答にまどかは笑顔で頷いた。

そんな彼女を見て、中沢は

（鹿目さんは良い人だなあ。こういう人には幸せになつて欲しいなあ……）

と、思春期の少年としては、ややアレな事を思っていた。

そうこうしている内に、信号が赤から青へ変わった。郷愁を誘う優しいメロディが

流れる。

「あつ。じゃあ、中沢くん、また明……じゃなくて、来週だね。学校で……」

まどかは、小さく手を振って横断歩道渡り出した。

中沢は、胸が締め付けられる様な気分になった。怒りや苦しみ等のネガティブな感覚ではないのだが、中沢にはそれが何がナンだか解らなかつた。

それは、十中八九『恋』だろう。

中沢は実に、チヨロイイ奴だった。略してチヨロ沢だった。

「か、か、鹿目しゃん！ おく、おく、送って……行くよ!!」

チヨロ沢は、チヨロイはチヨロいなりに勇気を出して、まどかに声をかけた。

中沢とまどかは歩いていった。歩いているのは、二人だけで、時折、思い出した様に自動車や車道を通り過ぎていく。

二人の間に会話は無い。

中沢は、まどかの歩幅に合わせるのを少し苦労しながら、横目で彼女の横顔を伺う。

まどかは、ややうつむき加減で歩いている。なんとなく顔は赤く見えるのは、沈みゆく夕日のせいだろうか？ 何にしろ、メチャクチャ気まずかつた。

『ウイットなジョークで彼女に笑顔の花束をプレゼントして、楽しく家までエスコートさよ』

などという高等技術は、チョロ沢のチョロいボキャブラリーでできるはずがなかった。

（落ち着け……。考えろ、考えるんだ。このままじゃ、鹿目さんに『変な奴』だと思われるてしまう！）

もうすでに思われているのではないかと、という残酷な可能性を無視し、中沢は考えた。

（……それにしても……。改めてこうやって並んで見ると鹿目さんって小さいなあ……。腕も脚も細いし、髪なんてふわふわした感じで……。女の人ってこんな華奢な作りで大丈夫なのか？）

「吹けば飛びそうな……。」という比喩表現を思い出しつつ、中沢は再び彼女を観察する。

ふと、中沢は我に返った。

（……てえつ、オレは！ 女の人をジロジロ見て！ 何を考えてるんだ！ これじゃヘンタイだよ!!）

胸中で盛大に頭を抱える中沢。気を紛らわせるには数式を考えると良い、と聞いた事

が有る。

しかし中沢は、数学が苦手だった。そもそも数式とは何なのか憶えていなかった。仕方がないので、円周率でごまかす事にした。

(3. 1415926……3? 5だっけ? ……3. 1413……杉山先生え(数学担当)オレ、これからもっと頑張ります!)

チヨロ沢は諦めて、数学の授業をもっと真面目に受けようと決意した。その時、不意にまどかが立ち止った。

「? どうしたの、鹿目さん?」

「う、うん。あれ何……かな?」

中沢は彼女の指差す方向を仰いだ。

そこに『白い壁』があった。そう、『白い壁』が道を塞いでいた。

工事中なのだろうか? そんなはずがなかった。

そもそも、工事中だったとしても地面から電柱の天辺まで隙間なく塞ぐ必要など何処にも無いのだ。

「なん……だろうね?」

「クモの巣? クモの糸に見えるけど……?」

「うん、だね……」

まどかの意見に中沢も頷くが、これが蜘蛛の巣……蜘蛛の糸だとしたら何もかもが大き過ぎると思った。

中沢は愛車のスタンドを下ろすと、慎重に『白い壁』に近付く。

「中沢くん………！ 気を付けて……！」

「ああ、うん………」

心配そうなまどかの言葉に、中沢は手を『白い壁』を触る直前で引つ込めた。

制服のポケット、いつも入れているシャーペンを取出し、ペン先で触れてみた。

ねっとりとした気味の悪い感触がした。

すぐにやめようとしたが、接着剤が着いてしまったかのようにシャーペンはなかなか

取れない。

中沢はやつとの事で引きはがしたが、ペン先は、まだ糸を引いている。

「うん、回り道……。回り道した方が良さそうだね、コレ……。ハハハ……」

「う、うん……。えへへ……」

中沢はまどかに振り返り、不安な気持ちを苦笑いでごまかしながら、提案する。

まどかも同じような苦笑いでそれに応じた。

「？ ……！」

二人が道を引き帰そうと振り返ると、『ソレ』は唐突に、そこに存在していた。

街灯の逆光で輪郭のみしか分らないが、二メートル近い巨体が強靱な筋肉に鎧われているのが、輪郭からだけでも分る。

「な、なんですか？ アナタ、何か用ですか？」

中沢は、まどかを庇う様に前に出て声を張る。

声を張ることで恐怖を押さえ込もうとしているのだ。

『ソレ』は中沢の声を無視して、無言で驚くほど静かに歩み寄ってくる。

「……………なっ？」

「……………えっ？」

『ソレ』がやつと二人の視界に入った。

『ソレ』は、一言で言えば、《怪人》だった。そう半人半獣の《怪人》だったのだ。

《怪人》は、側頭部から四対の蜘蛛の足のような角を生やし、額には六つの黒いガラス玉のような目と、その下に爬虫類を思わせる琥珀色の双眸を持ち、強靱な顎に縁取られた牙が薄暗闇に鈍く光る。

古代ギリシャあるいは、古代ローマの戦士を思わせる具足と装身具に身を包み、《怪人》は確かな知性を感じさせる足取りで中沢たちに……………いや、まどかに向かつて近づいて来る。

《怪人》は右鎖骨あたりから、みぞおちに右掌を滑らせると、左手の伸ばされた人差し指

と中指で、右手の甲に、アラビア数字の3を描くように動かす。

「鹿目さん、逃げて！　このお！」

危険を感じた中沢は、まどかに叫び、無謀と思いつつも右拳に全体重と踏み込みの勢いに乗せて《怪人》の腹部に叩き付け、その歩みを止めた。

しかし、それだけだった。

《怪人》は首を傾げるように中沢を見ると、彼の襟首を引き千切るように掴み上げ、片手で軽々と脇へ放り捨てた。中沢は、塀まで転がった。

「中沢く……ああ!!」

まどかが、倒れ、呻く中沢に駆け寄ろうとしたその時、《怪人》の右手が彼女の白く細い首に掛った。

「……鹿目さんを……放……せえ……!!」

中沢は、声を上げ立ち上がろうとするが、声も力もうまく出ない。

まどかは、《怪人》によつて宙吊りにされ、呼吸もままならないのか、抵抗らしい抵抗もできない。『怪人』は頭上に白い光の輪を浮かべ、ゆつくりと口から極細の糸を空いている左手で引き出した。

(ママ……、パパ……、たつくん……、みんな……)

声も出せず、窒息が彼女の意識を刈り取ろうとしたその時である。

『ずいぶん楽しそうじゃねえか？ 俺も混ぜろよ。ええ、兄弟！ くははは！』
あたりに皮肉気で不敵な声が響いた。

2：忍び寄る蜘蛛★黒い凶獣

無数の黒い触手が、《怪人》の足元のアスファルトを砕き飛び出し、その身体を締め上げる。

まどかの首を絞めていた右腕にも二本、三本、と絡み着き、その握力を奪う。

《怪人》の手から まどかが解放された瞬間、落下する彼女の身体を、やはり黒い触手が受け止めた。

『さっさと立てよ！ 女に惚れられるチャアンスだぜ？ 中学生♪ くははは!!』

「か、鹿目さん！」

中沢は、目の前に現れた物に驚きつつも、触手からひったくるようにまどかを受け取った。

『しばらく食い止めてやつから、とつとと逃げな!!』

アスファルトを突き破り、背中から触手を生やし、巨大な尾を持った奇妙な黒い小動物が姿を現した。猫のようにも、兎のようにも見えるが、そのどちらでもない。

小動物は、青い瞳を獐猛に光らせ、皮肉気に歪めた口から牙をむき出しにして叫ぶ。

『無抵抗な雌ガキ一匹殺るだけより、楽しめるぜえ！ 俺はあ!! ええ兄弟!? くはは

はー!』

身体中の毛を逆立て、頭上の《怪人》を締め上げて小動物は狂ったように笑った。

「鹿目さん、大丈夫!? 走れる!」

中沢は、呼吸と正気を取戻し、咳き込むまどかを気遣いながらも、一刻も早くこの場から離れるべく、彼女を抱き上げるように立たせた。

「う、うん……。何とか……。大丈夫……」

「ごめん! でも今は逃げないと!!」

中沢はまどかに肩を貸し、できる限りの速さで逃げ出した。

『ようし……。ここから先は大人の時間だぜえ! 兄弟!!』

小動物は、二人が走り去るのを見るや、《怪人》を手近な街灯に頭から叩き付けた。

火花を飛ばしながら、街灯が爆ぜた。それと同時に小動物の触手がちぎれた。もちろん火花で焼き切れたわけではない。

触手から解放され、驚異的な体捌きで着地し、体制を立て直した《怪人》の手に何時の間にか握られた鈍色の爪が小動物の血液で、不気味に光る。

『やった! カッコイイー♪ そう来なきやなー! ようし!! 殺せえ、殺してみろお

!! くははは!!』

小動物は歓声を上げ、身体中から生えた触手の数を増やした。そして、無数の触手が

豪雨の如く『怪人』めがけ降り注いだ。

《怪人》は凶器の雨を物ともせず、駆ける。駆ける！

電光石火の反射神経と身体能力で、触手を切り飛ばし、躲し、小動物との間合いを一瞬で潰した。

『やるじゃねえか！ 兄弟！ くははガハア!!』

《怪人》の爪が距離を取ろうと、飛び退いた小動物の胴体を横に両断した。

『……なあんてなあ！ くはは♪ 悪りいんだけどよお、兄弟！ しばらくここらに埋まってくんねえか?』

胴体を二つに切り離されたにも関わらず、小動物はせせら笑いを浮かべた。

切り離された小動物の下半身は一瞬で崩れ、大量の触手に変化し素早い動きで再び《怪人》を二重三重……幾重にも拘束する。

怪人は拘束を引き千切らんともがくが、触手にはならず元の形を保っていた小動物の大きな尾が、槍の様にアスファルトへと突き刺さった。

その次の瞬間、尾は削岩機のごとく高速回転しアスファルトを砕き、刹那の内に地中へと姿を消した。

当然、怪人もまた尾に引きずられる形で、アスファルトの破片に埋まっていた。

『地底世界へ、ごおあんなーい！ つてかあ？ くははは。さあて……あのガキども何

処行つた？ あの野郎、トロそうな奴だったからな、その辺にハマつてねえだろうな？
くははは！』

小動物はせせら笑いを浮かべ、残された前足と、側頭部から垂れ下がる大きな耳のよ
うな器官を器用に使い
歩き出した。

一方、まどかと中沢は廃ビルの中に身を隠していた。あちこちの道が白い壁で塞が
れており、中沢一人なら、いざ知らず、まどかを連れた状態では隠れるしか道はなかつ
た。

二人が入ってきたドアは、壊れたベットやテレビをバリケードにして塞いでいた。

まどかは、廃タイヤに腰を下ろし、落ち着かない様子で携帯電話を操作しているのだ
が……。

「……やっぱり、ダメみたい……。どこかでブツけちやつたのかな……。？ 壊れちやつ
た。中沢君のは……。？」

「ごめん。オレ、ケータイ持ってなくてさ……。ジイちゃん、バアちゃんは『もしもの時
のために持つておけ！』って言ってたんだけどね。でも……。オレ、学費だけでも迷惑か
けてるからさあ。」

と話しながら、中沢はナツプザックの中身を広げ、ハサミやテープでなにかを作っている。

「失敗した。やっぱ年長者の言う事は聞かなきゃだね……この辺交番も公衆電話もないからなあ……。アナログ人間にはツライ世の中だよな？　そういえば鹿目さん、カバン置いて来ちゃったね……。逃げ切ったら、オレとつてくるよ。愛車のついでにさ！　あ、それよりケータイのが問題かな？　でも、今時のケータイのデータ復旧ってスゴイらしくて、かなり戻るらしいよ」

中沢は苦笑いしたり、眉を寄せたり、と饒舌に話ながらも、手を止めず何かを作り続けている。

「中沢くんはスゴイね……」

「んん？　ナニが？」

唐突に、まどかが呟く。

しかし、中沢は訳が解らず首を傾げる事しかできない。

「えと、その……ほら、すつごく落ち着いてるつて言うか？」

「そう……かな？　多分だけど、驚き過ぎてバカになってるだけじゃないかなあ？　一周してっ！」

首をひねりながら少しおどけた調子で、まどかに笑いかける中沢。

「一周って……？　なるほど、そっか。えへへ」

「うん。まあ多分だけだね。ハハハ」

血の気を失い表情の抜け落ちていた　まどかの顔に少しだけ笑顔が戻った。

「ところで中沢くん、さつきから何を作っているの？」

まどかは中沢との会話で緊張がほぐれたのか、彼の手元を覗き込む様にして尋ねた。

「何って……弓だけ。弓矢だよ。ほら」

ボロ自転車のタイヤの枠やチューブなどでデッチ上げられた弓と矢を、中沢は少しばかり自慢気に、まどかに掲げて見せる。

「ホントは、こんなの遊び以外で使わない方がイイんだろうけどさ、無いよりはイイと思ってる……」

中沢の笑顔が一瞬もるが、それを振り払う様に努めて明るい調子で彼は続ける。

「それよりどうかな？　上手いモンでしょ？　オレ中学に入るまでこんな物ばかり作って遊んでたんだよね。木の上に基地造ったり、枝から木刀削り出したりしてさ！　石槍作った時なんか家の壁に穴開けちやって、ジイちゃんのゲンコツ食らった時は、石槍は家の中で振り回す物じゃないなって、学習したよ！」

中沢の無邪気な笑顔に、まどかは苦笑いで答えた。

「ごめん。バカ過ぎてつまらないかな？　ハハハ。」

「えっ？　ちがうよ！　そんな事思っていないよ！」

照れたように頭を掻き、謝る中沢を、まどかは慌ててフオローした。

「ハハハ、イイって。バカなのは本当だしね。それより、鹿目さんはオレが家まで送るからさ。約束する。バカでも約束は守るよ！」

「うん……」

中沢は、笑顔とサムズアップをまどかに送り、まどかも笑顔で頷き、それに答えた。

「ところで……、中沢くんは、……えと……あの『怪獣』？　あれ何だと思う？　どうしてわたしを……」

すこし晴れかけたまどかの顔に再び影が差す。

「多分だけど……、アレ『グロンギ』なんじゃないかな？」

「ぐろ……？　なに？」

中沢は推測を口にするが、まどかには聞きなれない単語であつたらしく首を傾げた。

「『グロンギ』だよ。それとも『未確認生命体』って言った方が分りやすいかな？　ほら、年末の特別番組とかで観た事ない？」

「なんとなく……。パパとママは、そういうの観ないようにしてるみたいだし、ワタシもあんまり……」

「そっか、そうだよね……」

中沢の捕捉に、まどかは曖昧にだが頷き、中沢もどこか曖昧に納得し頷く。

「でも……えと、《4号》？　つて人が、皆やつつけたつて……」

「うん。そうらしいね。きつと生き残りがいたんだ……」

『うーん、残念！　不正解だ。ハワイ旅行は無しだな、くはは！』

突如、二人の間に第三者の声が響いた。

「だ、誰だ！」

中沢は、まどかを後ろ手に庇い、弓に矢をつがえ声の方向に構えた。

『おおくココかあ？　化け物に正拳突きかました鉄砲玉の新居はく？　イイ感じの部屋じゃねえかあ？　退廃的で埃っぽいいし、陽当たりも悪そうだあ。もろ俺好み♪　くははは！』

壁の亀裂から突如、黒い液体が染み出し、小動物の形を取ると、ケタケタと身体を揺すって笑った。

「あなたは……!?!」

闇が溶け出したような黒い毛並、側頭部から生えた大きな耳（？）、異様にギラついた青い瞳に、中沢は見覚えがあった。

『よう、さつきぶりだなあ。それより、そんな素敵なモノ向けんなよ。迂闊にも好きになつちまいそうだあ！　くははは！』

「あつ！ すみません！」

小動物は、気さくに耳(?)を掲げて、中沢に笑い掛けた。

「な、中沢くん。この人(?)はいったい……?」

まどかは、突然の闖入者に困惑した表情で中沢の制服の裾を控えめに引き、尋ねた。

「大丈夫。さつき、鹿目さんを助けてくれたのは、この人(?)なんだ。味方だよ！」

中沢は笑顔で頷いたが、まどかが聞きたいのは、『洋画の吹き替えのように喋る不思議な生物』の正体であつたのだが、ひとまず、それは置いておき、

「ありがとうございます。危ないトコロを……」

と、お礼を言う事にした。

『ぐうう！ なんなんだ、その曇りのない瞳は!! 俺をそんな眼で見るとはねえ、こん

ガキヤア!!』

小動物は、突然黒い顔を真っ赤にして、怒り出した。

「ひっ！ ぐ、ごめんなさい！」

まどかは思わず、謝ってしまった。

『はっ！ 悪い悪い。怯えらるか気味悪がられるのが、「常」だった物でよ……。取り乱しちまつたぜ。しっかし、お前らよお……、よく他人から、「お人良し」って言われんだろ……?』

小動物は、呆れ顔で、耳(?)で頭を搔いた。

「え?、そう……ですね。どちらかと言えば……。」

「わたしも時々……。」

小動物の言葉に二人は頷く。

中沢は、彼は何故そのような事がわかったのだろうか?人間にはない第六感のような物があるのかも……と思った。

ちようどその時、中沢の後ろにいたまどかが、前に出て意を決したように、小動物に問いかけた。

「あの……えと……」

『ん? そうだな……』『サンじゅう口』でも呼んでくれや。くははー!』

「さんじゅうろ……? サンじゅう口さん……ですね。わたしは鹿目まどかって言います。」

『「円か」の「要」……ねえ。良い名前じゃねえか。くははー!』

サンじゅう口は自己紹介するまどかを見て、なにが可笑しいのか、「ぬたり……」と口の端を吊り上げた。

「あ、ありがとうございます? えと、あの……それで、サンじゅう口さんはあの「怪獣」が何なのかご存じなんですか?」

『まあ、それなりにはな……。奴らは、『使徒』『御使い』『ティアンズウ』『アゲロス』『マラーク』、土地や時代によつて、色々だな。まあ、好きなように呼べよ。』

サンじゅう口は、まどかの質問に適当な調子で頷いた。

「それは、未確認生命体とは違うんですか？」

中沢が口を挟んだ。

『「壊す者」 つてくりなら、違わねえな。だが、グロンギ共が「狩られる側」とするなら、奴らは「狩る側」だな。なかなか見ものだけ、あの連中の対戦カードはよ！ くはは！』

サンじゅう口は、面白い映画の話でもする調子で説明する。

「でも、グロンギなんて十四年も前に……。なんで今更？、そもそも、そのマラーク？
がなんで鹿目さんを……。？」

『死んだぜ、『4号』以外はな。それから、俺の言い方が悪かった。奴らが狙うのは、グロンギみたいな分りやすい化け物だけじゃねえんだよ。』

中沢の疑問に、サンじゅう口は冗談にでも応じるような調子で説明する。

『姉ちゃんみてえな「特殊な因子」を、持った人間も狩るんだよ。才能と言ってもイイかあ？ 殴り付けたのに、兄ちゃんの事はシカトだったろ？』

「……………因子……………？ でも、なんでいきなり……………？」

中沢は捻っていた首を、さらに捻った。

『知らねえよ。アミダかなにかで、テキトーに決めてんじやねえのか？ くははは♪』

中沢の様子を見ていたサンじゅうロウは、面白そうに笑った。

『あるいは……。』

サンじゅうロウは笑うのを止め、

『真っ先に狙わなきやならねえ“何か”が、これから現れんのかもな……。』

無表情な青い眼でまどかを見つめた。

3：壊す者★護る者

無表情だったサンじゅう口の顔が何かを感じ取り、獰猛に歪む。

『ちっ！ あの兄弟、なかなかやるじゃねえか！ 今頃、ブラジルのサンバカーニバルに参加してやがる計算だったのによお！ クソが！ やっぱこの『ナリ』じゃあ、足止めが関の山かよお!!』

サンじゅう口は、楽しそうに、だが悔しそうにまくし立てる。

「どうしたんです?!」

「まさか、さっきの奴が……?!」

明らかに、様子のおかしいサンじゅう口にまどかと中沢は驚いた。

そして、中沢は先ほどのマラークの姿を思い出し、息を飲む。

『オイオイ兄ちゃん、そう慌てんなって。狙いはそっちの姉ちゃんなんだ。さつさと帰ってファミコンでも始めたらどうだい?』

サンじゅう口は、中沢をせせら笑うように言った。

「えっ……?」

中沢は、まどかの不安に揺れる瞳と目が合った。

「そんな事……そんな事できるはずがないだろ!!」

中沢は、思わず怒鳴り、サンじゅう口を睨み付けた。

『ほほう♪じゃあ、どうすんだ？ そのハンドメイド弓矢で戦うか？ 頑張りや殺れん

じゃね？ さっきの空手殺法よりや可能性あるぜえ♪くははは!』

サンじゅう口は「そのジョーク最高!!」といった調子で、楽しそうに耳（つばいもの？）で床を叩いて嘲笑う。

「くっ……!」

中沢は反論する事が出来なかつた。

そんな中沢を見たサンじゅう口は、溜息を一つ吐くと嘲笑を苦笑に変えて続ける。

『くはは……。じゃあ、そーだなあ……。ここは正攻法で、助けを呼ぶのはどうだ？ 《G

—3・UNIT》とかいう警察の特殊部隊とかどうよ？ 中々イイ動きする連中だぜ。

もともと対グロンギ用らしいが、イイ線いくんじゃね？ それとも俺の“心当たり”を

教えてやろうか？ その夢と希望で戦う“心当たり”が、引き受けるか、勝てるかどうか、

か、までは知らねえけどな』

サンじゅう口は子供のワガママを煙に撒くような口調で、中沢の肩を気安く叩いた。

『二人で、警察署までオリンピック目指す勢いで走りや、間に合うかもな！ 挑戦してみ

ればあ？ くはは!』

中沢は、そんなサンじゅう口を、無視して考える。確かに、後者の方が、現実的に思える。

しかし、それは隣にいる少女鹿目まどかを見捨てるのと変わらないようにも思える。中沢はどうしたら良いのか分らなくなった。

「中沢くん……。いいよ、ありがと。わたし、大丈夫だから……」

不意に、まどかが中沢に淡く微笑んだ。

「わたし、こう見えて、かくれんぼ得意なんだ……。だから、その……。中沢くんの事信じてるから。待つてるから。だから、早く迎えに来てね……」

中沢は少しの間、呆気にとられたが、

「何言い出すんだよ、鹿目さん!? 駄目だよ! そんな事!!」

と、すぐに叫んでいた。

「でも! このままじゃ中沢くんだって……!」

「それでも……。男のオレが、女の人を盾にするような真似できないよ!!」

中沢は、言い募るまどかを真っ直ぐに見つめ、諭すように言った。

『カッケー!! 熱血漢だなあ。それとも、女の前だから、イイ恰好しようつてののか? くははは!』

中沢は、サンじゅう口の冷やかしを無視し、彼に向き直る。

「サンじゅう口さん、あなたが助けを呼んで来てくれませんか？ それなら……」

『ほおう、名案だな。だが、上半身だけの今の俺には無理だな。ほれ♪』

サンじゅう口は、中沢の提案に、首を横に振りつつ、後ろを向く。

サンじゅう口の身体が黒いのと、暗がりになっていたため、今まで分らなかつたが彼の胸から下、下半身は存在していなかった。赤黒い断面はあるが、一滴の血も流れていない。

「そ……そんな身体になつてまで、オレたちの事を……！ すみません！ 嫌味な人だなんて思つて……」

『お、お、おう。気にすんな！ そのうち生えてくんだからよ！ あれだ、そう、ドンマイ！ つうか、いきなり謝んな、ビビるじゃねえか！』

サンじゅう口は、突然、頭を下げた中沢に驚いたのか、しどろもどろになった。

「サンじゅう口さん、鹿目さんをお願い出来ませんか？ 奴は……マラークは、オレが引き付けます」

中沢は、サンじゅう口に深々と頭を下げる。

「中沢くん！ ダメだよ！ おかしいよ！ そんなの!!」

まどかは、中沢の決意の言葉に驚き、普段の彼女から想像できない大きさの声で、それを否定する。

そんな二人を無表情で見つめながら、サンじゅう口は口を開いた。

『なあ、兄ちゃん。もし今ここに、マラークと互角に戦える“武器”があつたら、どうする?』

こんな声も出せるのかと思うような静かな声だった。彼は青い瞳で中沢を見つめている。

「ある……んですか?」

『ああ有るぜ。だが、人間にとつちや“猛毒”かも、だぜ?』

サンじゅう口は、皮肉気に笑い、中沢の質問に頷いた。そして、彼の手のような耳を、中沢の目の前に掲げた。その手(耳)には、濃緑色の拳大の石が握られていた。

『コイツは、4号やグロンギ共の力の源だ。《アマダム》《賢者の石》《王者の靈石》。まあ、呼び方は、なんでも良いか。コイツはオレが作った模造品だし……。まあ、ともかくコイツを使えば、マラーク共とやつと同じステージに立てるってわけだ。』

薄暗がりにも関わらず、《アマダム》の放つ荘厳な輝きにまどかと中沢は言葉も出ない。

『……同時にコイツを使えば、怪物どもの仲間入りってわけだ……。だがそれでも、飽くまで互角に戦えるってだけだ。コイツは、便利な必勝アイテムなんかじゃねえ。それに奴に勝つたとしても、次のマラークのお出ました。兄ちゃんが死ぬか、マラーク共を殺し尽すまで狙われる。』

酷薄な笑みを浮かべ、サンじゅう口は続ける。

『首尾よく生き残れたとして、お前は、お前でいられる自信はあるか？ 行き着く先は、奴らと同じ《壊す者》かもしれないぜ？ くははは……』

「使い方を……、教えて下さい」

中沢は、蒼白だが決意した表情で頷いた。

「中沢くん！ そんなの絶対おかしいよ！」

まどかは目じりに涙をため、中沢を引き止めようと、彼の右腕にしがみ付いた。

しかし、中沢は彼女の腕を壊れ物を扱うように優しく解いた。

「おかしくはない……かな？ 普通だよ。鹿目さんもオレも助かるなら、どっちでもイ

けど……」

中沢はまどかに振り向く事なく続け、

「もし、鹿目さんに万が一の事があって、オレだけ助かったら……。多分、オレは普通でいられない。もう普通に笑えない。普通でいたいんだよ、オレ。だから……」

その言葉を聞いたサンじゅう口の青い眼に狂喜が宿る。

『覚悟完了！ つてか?! イイぜ、やるよコレ。その代り、お前の死合い、リングサイド

で観戦させろよな!!』

サンじゅう口は、狂喜の笑みを浮かべ、《アマダム》を中沢の腹部に押し当てた。

「ぐ、ううー！」

腹部に熱さを感じ、中沢は呻いたが、一瞬後にはそれはなくなり、そこには《アマダム》を納めた楕円形の装飾のされたベルト《アークル》が装着されていた。

『いいか？ コイツに取説もチュートリアルも存在しねえし必要ねえ！ 必要なのは、ただ“望む事”。純粹に望むんだよ。例えば「奴より強くなりてえ！」「奴より速く動きてえ！」「奴をブチ殺してえ！」もしくは「彼女を絶対に護りたい……」とかなあ。そうすりや《アマダム》は応えてくれる。どーだい、簡単だろ？ くはは……。さあ！ こつからは男の時間だ！ いくぜ兄弟!!』

サンじゅう口は叫び、耳で巨大な拳を作りバリケードにしていたガラクタを一撃粉碎すると、耳で駆け道路に飛び出した。

中沢は、サンじゅう口に続いて通路に出るも立ち止った。

「鹿目さんは、ここで待って……。終わったら送るよ。約束する……」

「中沢くん……」

中沢は、不安なまどかを見ず、眩く。

「……それから、止めてくれて、ありがとう。でも……オレ、勝つよ……」

「中沢くん……」

まどかの呼びかけを無視して、中沢は駆け出した。

「おかしい……よ。そんなの絶対おかしいよ……い！」

まどかは、無理やりにも止めようとしなかった自分と、簡単に命を投げ出すような選択をする中沢に、悔しき、悲しみ、怒り、様々な物が無い交ぜになった感情を抱いた。だが、彼女はそれらの感情を整理しきれず、ただその場に座り込み、涙を流す事しかできなかつた。

廃屋の廊下を二人は走っていた。額から提灯アンコウのようなランプを出し辺りを照らし、先導しているサンじゅうロが、不意に中沢に話し掛けた。

『くははは……。しつかし、兄ちゃんも外さねえなあ、台本でもあるんスかあ？ まつ、

男はカツコつけてナンボだしな♪』

そんな冷やかに中沢はなにも答えず、静かに切り出した。

「サンじゅうロさん、あなたがダメだと思ったら、その……」

『オイオ〜イ！ 男がやる前から、死んだ後のこと気にするもんじゃねえぜ！ それから、『さん』はいらねえ。兄弟に敬称なんざ付けられたくねえ。中沢……：そーいやお前、名前聞いてねえよな？』

「あつ、すみません。中沢 元国です。」

そう言えば、なんだかんだで、まどかしか名乗っていなかつた。中沢は、遅めの自己

紹介をした。

『中沢……元国ねえ。意味はありそうなんだが……、悪りい、なんも思い付かん！ 中途半端な名前だな！ まっ、男の価値は名前じゃねえよ！ くはは♪』

非常に大きなお世話だった。全国のナカザワさんやモトクニさんに、謝ってもらいたかった。

そうこうしている内に、建物の外に出た。辺りは既に、夜の闇と静寂に覆われている。仄かな月明りと、星明りだけが、万物に輪郭と表情を与えていた。

『さて……。やつこさんも準備万端♪ 殺る気満々♪ のようだぜ！ 子供相手に、年甲斐も無くハリキリやがってよお、ご苦労なこつた！ くははは!!』

歓声を上げたサンじゅう口の視線の先に、奴はいた。

瓦礫や廃材、様々な物が置かれた広場の中心の巨大な影だけが、仄暗い闇の中にも拘らず異様な存在感を持って静かにたたずんでいる。

始まりの蜘蛛にして、

待伏せ追い詰める漁人

蜘蛛のマラーク《アラーネア・ピскарートル》

である。

中沢は一步前に立つと、声を張りアラーネアに向かって叫ぶ。

「鹿目さんは、優しい人だ！ 危険な事なんてしないし、あなた達に危害を加える事だつて、絶対にしない。何が目的なんだ!？」 なぜ鹿目さんを!？」

アラーネアは、中沢の言葉に答えず、彼の腹部のアークルを見つめ、

『……KUGA……?』

と、唸るように言った。

中沢に殴られた時も、まどかの首に手を掛けた時でさえ、感情を表さなかつたアラーネアが忌々しそうにサンじゅう口を睨み付けた。

『なんだなんだ? その目は?! ワンサイドゲームじゃつまらねえだろうが! 無傷で済まそうなんて、ケチくせー事考えてたのかよ? 見損なわせんなよお、兄弟!! くははは!!』

あたかも、本当の兄弟と話すような気安さで、サンじゅう口は言った。

そして、中沢に視線を移し、

『オイ、元国! いいか、奴らは分け隔てがない。で、同時に傲慢なんだ。あの姉ちゃんか、どんな奴かなんて知つたこつちやねえのさ。覚悟を決めねえと、「壊される」ぜえ!』
「くそ……!」

サンじゅう口の冷たい忠告に、中沢は悔しげに拳を握つた。

一方、アラーネアはこれから奪う命への手向けなのか、右鎖骨からみぞおちに右掌を

滑らせ、その甲に数字の3……いや、《神の紋章》を描く。そして、彼は頭上に光の輪を出現させると同時に、憐憫と憤怒を刹那の内に冷徹な殺意に変えて、ゆつくりと中沢に迫る。

「うっ……!」

『オイ、ボサつとすんな!殺されるぞ!!』

中沢は、圧倒的で純粹な殺意に気圧され、サンじゅう口の声も耳に入らず、身動き一つできない。

そんな時、不意に右腕に、鹿目まどかの小さく細い手の温もりがよみがえった。

震える手で必死に自分を止めようとした彼女。

自分の他愛もない話に、苦笑する彼女。

交差点で、自分の呼びかけに、桜色の髪を揺らし振り向いた彼女。

教室で友人達と笑いあう、楽しそうな彼女。

そんな中、いち早く自分に気が付き、笑顔で朝の挨拶をくれた彼女。

今、ここで目の前の『脅威』を止めなければ、そんな優しい彼女がいなくなる。

「そんな事……そんな事! ダメに決まってるだろ!!」

中沢が吠える。中沢の想いに応えるように、ベルトの『アマダム』が強く光を放つ。

中沢は、帰り道、まどかを守る為に拳をふるった瞬間を再現するように、アラアーネア目がけ全力で突き出した。

不意打ち気味の拳は、アラアーネアの腹部に命中する。先程と同じように、アラアーネアの歩みが止まる。

しかし、先程とは違いアラアーネアは、二歩、三歩とタタラを踏み、後退した。

見れば、中沢の右腕が象牙色の手甲に覆われている。中沢は驚愕するが、今は些末事と無視する。中沢は間髪入れず、アラアーネアの右胸板に左正拳、左足に右下段回し蹴り、蹴り足を軸足に入れ替え、その勢いを利用して左胸板に左肘を突き立て、左肘を戻す勢いで、右中段突きを右わき腹に見舞う。

中沢が、攻撃を繰り返すごとに『アマダム』は彼の身体を、腕を、脚を、耳を、眼を、細胞の一つ一つを戦闘用に作り変えていく。

中沢が、アラアーネアの背後を捕る形で、身体を入れ替え、構え直した時には、彼の身体全体が変化を遂げていた。

金色の冠のような短い一本角、顔の大半を占める橙色の昆虫を思わせる二つの複眼、象牙色の甲冑をまとった胴体、同じく象牙色の手甲に覆われた左右前腕、黒いボディースーツ着込んだように黒い皮膜に覆われた手足。

その姿、かつて《未確認生命体事件》を解決に導いた英雄の一人、《未確認生命体 第4号》に酷似していた。

4：変身★炎の如き戦士

地響きのような獣の咆哮と、硬い物が砕け散る大きな破砕音に驚き、鹿目まどかは顔を上げた。

戦いが始まった。始まってしまったのだ。

まどかは、慌てて立ち上がる。立ち上がるが、そこから何をすれば良いのか分らない。自分に何ができるのかも分らない。

中沢のように『怪物』に素手で挑むような勇氣も、技術もない。そして、中沢のように、武器を作って扱う知識もない。

(わたしには、何もない……)

まどかは、自身の無力さに再び膝を着いてしまいそうになる。

しかし、その時である。

自分を護ってくれた少年の、勇ましい気迫の声が彼女の耳にも届いた。

こちらに目を向けず、けれど優しい言葉をかけてから走り去る彼。

いささか乱暴に掴んだ自分の手を、優しい手付きで扱い解いてくれた彼。常に自分の前にいて、庇う様にたっていてくれた彼。

元氣付けてくれていのか、いつもより饒舌に話し笑い掛けてくれた彼。

薄暗く不安な帰り道、たどたどしくだが、はつきりと送ると言ってくれた彼。

わざわざ自転車を走らせて、忘れた筆入れを届けてくれた彼。

いつも、早乙女先生の答えに窮する質問に、困ったように……けれど律儀に答えを返す彼。

朝、教室で挨拶をすると、いつもおどろいた様な顔をして照れくさそうに挨拶に応えてくれる彼。

「中沢くん……わたし、だけ……。わたしだけ隠れてるなんて出来ない……。したくない！」

中沢の置いて行った弓矢を掴み取り立ち上がるまどか。弱々しい泣き顔は、凜とした決意の表情に替わっていた。

まどかは、初めて自分の意志で手にした「何かを傷つける為の道具」すなわち「武器」は、見た目以上に、実際の重さ以上に「重い……」と感じた。

重さと恐怖に震える自身のひ弱で臆病な足を叱咤し、まどかは中沢の下へと駆け出し

た。

建物から広場に出たまどかの目に異形同士の激しく争う様子が目に飛び込んできた。一体は先ほどの蜘蛛のマラーク《アラ―ネア・ピスカートル》、もう一体は、カプトムシのような怪人だった。まどかは、短い丸みを帯びた角と象牙色の身体から、その幼虫あるいはサナギを連想した。

『ようー！ 姉ちゃん。お前も観戦かあ？ 俺より前に出んなよ。危ねえ危ねえだぜ！』

こんなコンディションじゃ、助けてやんのも一苦労だかな。くははは♪』

放置され錆びた鉄材の上から、サンじゅう口が声をかけてきた。休日にくつろぐかのように上半身しかない身体で、寝そべりニヤニヤとほくそ笑んでいる。

『元国のヤツも、なかなかどうしてあのナリのまま、良く粘ってやがるが……、旗色が悪くなってきたな……。あのヤロ、この期に及んで、まだ躊躇ってやがんな。……ホント、イヤツだよ。くははは！』

サンじゅう口は、苦笑するしかないといった調子で言った。

その言葉に、まどかは耳を疑った。

「!!.. じゃあ、アレが……中沢くん……?!」

あの象牙色の怪人が中沢の変わり果てた姿だというのだろうか。まどかは、目の前が

暗くなるのを感じた。

野太い咆哮を上げ、瓦礫を拳で粉碎し、鉄骨を一蹴りで跳ね飛ばす、そんな攻撃を受けても尚立ち上がり、相手に挑みかかる姿は、自分を殺そうとしたアラーネアと何も違わない『怪物』に見える。

まどかは、象牙色の怪人から、中沢の面影を必死に探そうとするが、上手くいかない……。何もかもが……

そう何もかもが、彼とは違いすぎる。

その時、象牙色の怪人は繰り出した左正拳をアラーネアに易々と受け止められ、右顎を跳ね上げるような拳打を強かにくらった怪人は尻餅を突く様に転倒した。

一瞬、そんな象牙色の怪人の橙色の複眼と、まどかの桜色の瞳が重なった。

それは、本当に綺麗で、優しい色をしていた……

象牙色の怪人は、まどかを見た瞬間、おどろいたように息を飲んだ。だが「そんな暇などない……」とでも言うように敵との間合いを取る為、素早い動きで転がり、一瞬で飛び起きる。

『お前の相手は……オレだ!!』

腰を落とし、構え直した象牙色の怪人は叫び、爆発的な踏み込みで、アラーネア目がけて右正拳を放つ。

しかし、アラーネアはそれ以上の素早さで、彼の手首を掴み、捻り上げる。

象牙色の怪人は、軸足を入れ換え左鉤突きで追撃をかけるが、そちらも右腕と同じく、捻り上げられた。

拘束から逃れようともがく象牙色の怪人。しかし、アラーネアは、唐突にその両腕を解放すると、虚を突かれた象牙色の怪人の両脇腹に、膝蹴りを容赦なく突き刺した。

象牙色の怪人は、崩れるように膝を突いた。とつさに右手で身体を支え、倒れるのを防いだ。

しかし、そんな象牙色の怪人の無防備になった背中にアラーネアの二つの剛腕が鉄槌のごとく振り下ろされた。

象牙色の怪人は、顔面から地面に墜落し、傷んだコンクリートを砕いて浅くめり込んだ。

常人なら、何度絶命するかわからないほどの衝撃だろう。しかし、アラーネアの攻撃は、それで終わらなかつた。あろう事か倒れ伏す象牙色の怪人の頭を、あたかもサッカーボールのように、全力で蹴り上げた。

象牙色の怪人は、冗談のように空中で一回転し、頭から錆びたドラム缶の列に突っ込

み、騒音を轟かせた。

『チイツ!!』

「な、中沢くん!!」

それを見たサンじゅう口は忌々しげに舌打ちした。そして、まどかは思わず中沢のもとへ駆け出した。

まどかは、土煙が立ち込め、散乱するドラム缶の中にいるはずの中沢の姿を必死で探す。幸いな事にすぐに中沢を見つける事ができた。

「うう……、つう……!」

あの象牙色の怪人の姿ではなく、土埃に汚れているが、まどかもよく知る姿の中沢が力なく倒れ、呻いていた。

「中沢くん!!」

まどかは、慌てて駆け寄った。

「中沢くん、しっかりして……!」

「か、鹿目、さん……!? に……逃げ……て!」

まどかが振り返ると、そこには、アラ―ネアが獲物に止めを刺さんと、静かに、二人に歩み寄ってきている姿があつた。

まどかは必死に中沢を抱き起そうとするが、上手くいかない。中沢は、そんなまどか

に、切れ切れだが必死に逃げるように訴えている。

「わたしは、そんな事しない！ 出来ない！ 中沢くんと……同じだよ！」

まどかは、今にも泣き出してしまいそうな顔で、微笑み中沢を強く抱き寄せた。

自分のひ弱な身体など、アラアーネアにとっては、紙切れ同然と理解しながらも、少しでも中沢の負担を減らそうと決意し、瞳を閉じた。

襲ってくるはずの衝撃と痛みが一向に来ない事を不思議に思い、まどかは、恐る恐る瞼を開け、アラアーネアを仰いだ。

『テメエ等、俺の事忘れてたろお！ まあ、とにかく選手交代だあ！ 元国！ くははは！！』

「サンじゅうロさん！」

サンじゅうロは狂喜の笑みを浮かべ、巨大な二つの耳でアラアーネアの両腕を締め上げた上に、有刺鉄線のように棘だらけにした前足を伸ばし、胴体に食い込ませていた。

『《後ろ足》の野郎がやあつと来やがったからなあ。我ながらノロマだぜえ……くはは！』

まっ、こつから先は、モノホンの《化け物》同士の戦いつてヤツよ!!』

アラアーネアの足元のコンクリートが砕け、巨大な黒い尾が、アラアーネアの左足に絡み付いた。

『元国い！ お前は、ホント中途半端なヤロウだなあ!! やっぱ、お前にゃ《化け物》は

無理だぜ!! くははは!!』

サンじゅう口は、友人のつまらない失敗を苦笑しながらも、手助けするような気安いい口調で、まくし立てた。

『まどかあ! 元国つれて逃げろお!! 腹の石も後で取り出してやつから、安心しろ! この兄弟をグチャグチャに磨り潰して、食い殺した後でなあ!! くは、くはは、くははは!!! 兄弟、テメエは今夜の俺のデイナーだあ!!』

サンじゅう口は、まどかに頼もしい言葉をかけながらも、鼻面にしわを寄せ、牙をむき出しにし、狂喜の笑いを上げる。

「中沢くん……、立って! 逃げよう……!」

まどかは、恐怖心を必死に抑え、中沢を抱き起そうと奮闘する。

「か、鹿目さん、ごめん……。オレ……。やっぱり中途半端で……。あんな……にカッコつけた……。くせに。心のどこか……。で、『なんでオレが』……。て、おも、思ってたんだ……。」

中沢はまどかの手を弱々しく握り、苦しそうに呻いた。

「そんなの……。そんな事、普通だよ……。中沢くんは立派だった。カッコ良かったよ……!」

中沢の手を優しく握り返し、まどかは微笑む。

その時、何か爆ぜたような気味の悪い湿った音と、サンじゅう口のくぐもった笑いが鼓膜を震わせた。

『グウー！ グハツ！ ぐはははははあ！ やるっ……じゃねえかあ！ ぐぞおお!!』

突如、アラーネアの身体に纏わり着いていたサンじゅう口の耳、前脚、尻尾、が細切れになり、彼の足下に散らばった。

「サンじゅう口さん!!」

まどかは、あまりの光景に悲鳴じみた声を上げた。

『まだ！ まだあ!! だっしやあらああ!!』

サンじゅう口は、血を流しながらも、アラーネアに牙を立てんと、飛びかかった。しかし、彼はまどかの目の前で、アラーネアによつて、頭から真つ二つに引き裂かれた。

『ヂグジヨ……オ!!』

『はやぐ……!! 逃げろよお!!』

サンじゅう口は、二つに別れた口でまどか達に罵声を浴びせながら、アラーネアに投げ捨てられた。

アラーネアの口から両手の五指の先に極細の糸が、サンじゅう口の血に濡れ光り、伸びているのが見えた。

アラーネアは、糸とサンじゅう口の体液を払い落とすと、尻尾を失い体勢を崩した彼

の下半身を無造作に踏み潰し、まどかと中沢にゆっくりと迫る。

まどかは、アラ―ネアの進路上に中沢を護るように立ちはだかり、おぼつかない手付きで弓に矢をつがえ構えた。

(せめて……せめて、中沢くんだけでも！)

という一心で、弓を引き絞るまどか。

しかし、そんなまどかの背後で、中沢が力を振り絞り立ち上がった。

そして、中沢はふら付きながらも、まどかを庇う様に彼女の前に立った。

「あ……りがとう、鹿目さん……。キミを助けられるなら……。オ……オレは！ 《化け物》でも……。《グロンギ》で……。も！ どっち、でも……。なんでもイイ!! 中途半端でも……戦う！ キミを護る!!」

中沢の氣勢が上がる。それと共に彼の腹部に《アークル》が出現する。

《アマダム》が燃え上がる様に赤く……。赤く赤く輝く。

「だから……。だから、見ていてほしいいんだ……。オレの……。オレの!!」

中沢は、左掌を《アークル》に添えると、右拳を腰溜めに大きく引く。

右拳を手刀に換え、引く事で溜め込んだ力を解放する様に左前方に素早く突き出す。

そして、決意の言葉を全力で叫んだ。

「《変身》!!!」

《アマダム》の力強い真つ赤な光が、辺りを包んだ。

光に怯んだアラアーネアの右顔面に、赤い光の中から放たれた黒鉄色の手甲に覆われた中沢の拳が突き刺さった。

「セツエエエ……!」

体勢をわずかに崩した怪人の隙を逃さず、中沢は身体の痛みを無視し、ベルトから伝わる「力」に任せて拳と脚を奮う。

今、痛みに負け、恐怖に負けて留まれば、もう動けない。もう戦えない。もう、彼女を……まどかを護れない。

中沢の拳に、蹴りに、さらなる力が宿る。

「……エイイツ!!」

中沢の想いに応えるように、彼が攻撃を繰り出す度に《アマダム》は彼の身体を、腕を、脚を、眼を、耳を、細胞の一つ一つを戦闘用の「ソレ」に、さらに強く……強く強く作り変えて行く。

『……ツヤアアアア!!!』

アラアーネアの腹部に、中沢の黒鉄色の両拳による渾身の諸手突きが、深々と突き刺さ

る。

アラーネアは身体を、くの字に曲げて地面と平行に吹き飛ばされる。

そして、古びて劣化した土管にトドメを刺す形で、受け身も取れず、肩甲骨が異様に迫り出した背中を盛大に地面に叩き付けた。

まどかの目の前に、《戦士》が力強く拳を固め立っている。

《戦士》は、何物にも染まる事のない「黒」の内に「輝き」を宿した黒鉄色の甲冑でその身を包み、

両手首両足首には、燃え盛る炎の様に赤い宝石が填める込まれた具足が輝く。

顎から鼻先、鼻先から額を貫く様に、金色の一本角が天を突き貫く。

「中沢くん……」

まどかの不安げな声が、戦士の背中に掛る。

戦士が振り向いた。まどかの桜色の瞳と、戦士の炎が灯ったような赤い複眼が重なる。戦士は、まどかに向けて、力強く頷き返した。

「気を……付けて……!」

まどかの言葉に、戦士は再び頷き、戦いの場に向かい駆けた。

『KUGA……! KUGA……! KUGAAA!!!』

アラーネアは怒りを顕わに、土管の破片を踏み砕き、咆哮を上げた。

アラ―ネアは頭上に、光の輪を出現させ、その光の内から自身の武器《狂乱の角手》を取出し、構えた。

『《クウガ》？　そうか、《クウガ》か！　お前の相手は、鹿目さんじゃない。他の誰でもない！　オレだ……《クウガ》だ！』

中沢……いや、クウガは、脚を肩幅程度に開き、腰を落として構える。そして、構えただけである事を理解した。

先程までの、自分とは「まるで違う……」と。

アラ―ネアの武器による左右の鉤突きの連携を、相手の右側面に踏み込むことで躲す。

アラ―ネアが、身体を切り換える前に、クウガの腰の入った中段突きが、そのガラ空きの脇腹に食い込む。

クウガは、すかさずバックステップで、アラ―ネアとの間合いを取り、構え直す。

クウガの理解が確信に変わる。先程までのサイズの合わない服を、無理やり着ているような感覚が完全に消えている。アラ―ネアの攻撃に対応できる。とつさに反応できるだけだった先程とは、やはり違う。拳の手応えも十分……あと必要な物は……。

『あとは、オレの……、オレの勇気だけだ!!』

クウガは無手で、アラーネアは鋭い鉤爪を構え、無言で対峙する。

じりじり……と二体は円を描くように互いの出方を伺う。

どこかで瓦礫が崩れたのか、小石が跳ねた様な小さな音が二体の間に響く。

その刹那、アラーネアの足下が砕け爆ぜた。

アラーネアは、その驚異的な身体能力と鉤爪で、クウガを引き裂かんと殺到する。

それを迎え討たんと、クウガは一步前へ踏み込む。

アラーネアの一撃一撃必殺必倒の攻撃が、クウガに迫る。

クウガは、その一撃一撃を、拳打は拳打で、蹴足は蹴足で、的確に迎撃していく。

その時、アラーネアの両手首を、クウガの左右前腕が円を描く様に打ち払った。

アラーネアの両腕が大きく開き、胴がガラ空きになってしまう。

追撃を避けるべく、バックステップで瞬時に飛び退がるアラーネア。

しかし、その一瞬よりも速くアラーネアの鳩尾を、クウガの前蹴りが捉えた。

バックステップと前蹴りの勢いが重なり、放たれた蹴りの威力以上の力で、アラーネ

アは大きく吹き飛ばされる。

アラーネアは、タタラを五歩、六歩と踏むが、なんとか転倒を避けた。

だが、クウガは、そんなアラーネアに体勢を立て直す暇を与えない。全体重を乗せた

体当たり気味の肘打ちをアラーネアに見舞う。

アラーネアは、今度は受け身も取れず、背中を強かに地面に打ち付け、転倒した。クウガは深追いせず、アラーネアの取り落とした鉤爪を、左右後方に蹴り払い、再び構え、アラーネアに向き直る。

アラーネアは、ゆっくりと立ち上がりながら、クウガの後方に転がった鉤爪に視線を走らせる。が、すぐにまつすぐ、クウガだけを見据え、構えた。鉤爪を回収する事を諦めたらしい。

アラーネアは、左右の五指を自身の口に当てると、両手を開手にして、ゆっくりと構える。

わずかな月明かりが、アラーネアの新たな武器の存在をクウガに教える。

極細の糸が、左右の五指の間で、橋を作るように光っていた。

アラーネアが、一気にクウガとの間合いを潰し、両腕を振るう。彼の素早く巧みな腕捌きによって、鋭い風切音が連続して響き渡る。

不可視の斬撃が、周囲の瓦礫を、鉄骨を、地面を、切り刻んでいく。クウガはそれを必死に躲す。躲し続ける。

しかし、アラーネアの不可視の殺意が、ついにクウガの右腕を捕らえた。

アラーネアは、クウガの右腕を基点にし、その胴体までも糸で絡め捕った。

彼の強靱な糸をもつてしても、クウガの黒鉄色の甲冑は、傷つける事はできなかった。しかし、その動きを完全に封じ込めた。

身動きの取れないクウガを、アラーネアは糸を巧みに操り、引き寄せる。

アラーネアは、文字通り、獲物を捕らえた蜘蛛のようにクウガの首筋に凶悪な牙を突き立てると、大きく口を開けた。

噴出した体液が、クウガの仮面を濡らした。

アラーネアは苦痛の呻きを上げ、クウガを突き飛ばした。クウガの金色の角が、アラーネアの口から抜ける。

クウガの首筋を食い千切らんと大きく開け、無防備となったアラーネアの口に、クウガはとつさに、剣のように鋭い角を、突き入れたのだ。

クウガの武器もまた、両の拳だけではない。

両手で押さえているにも関わらず、アラーネアの口からはおびただしい体液が流れ出ている。

アラーネアの拘束から逃れたクウガは、身体に巻き付いた糸を力任せに引き千切り、首を振って角に付着したアラーネアの体液を振り落した。

クウガが、地面を踏み砕かんばかりに、力強く腰を落とし、気迫の声を上げる。

『ハアアアアアアアッ!!!』

クウガは、迷い、雑念を打ち払うべく氣勢を高めていく。

目の前の敵、マラークは確かに《怪物》そのものだ。しかし、クウガはアラーネアと殴り合い、組み合った事で、彼らもまた《生き物》なのだと感じた。傷付けば、痛みが苦しむのだ……、自分達と同じようである。

だが、今ここで、この《脅威》を見過ごせば、心優しい少女の“笑顔”がそして、少女に縁のある大勢の人達の“笑顔”が、永遠に失われる。それは、クウガ……いや、中沢自身の“笑顔”も例外ではない。それが、そんな事が、この《脅威》を倒さない限り、その後も延々と続くのだ。絶対に、認める訳にはいかない。

クウガの赤い複眼に、闘志の炎が灯る。それと同時にその右足に、やはり真っ赤な炎が宿った。

『セイツツ!!!』

炎の宿った右足で、踏み切り、アラーネア目がけて全力で突っ込む。

クウガの必中の間合い。地面を踏み砕く勢いで左足を力強く踏み込み、右足太腿を抱え込むように振り上げると、右足底部に全体重、右足の力、踏み込みの勢い、軸足の捻り、腰の捻り、こめられる全ての力を込めて、アラーネアの肋骨の内側に突き入れた。

『ツイイヤアアアア!!』

更に右足足底部に、軸足を百八十度回転させた勢いを加え、アラアーネアの肺腑を挟み込む様に蹴り上げた。

クウガ渾身の蹴りによつて、アラアーネアの巨体は螺旋を描いて飛び、鞠の様に二転三転して地面を転がった。

クウガは油断無く構え直し、倒れ伏したアラアーネアを見据えた。

ふらふら……と覚束ない足取りで立ち上がるアラアーネア。そのみぞおちには、奇妙な文字のような物が、焼け付いたように明々と光っている。

『GU……AA……Aa……aa……』

アラアーネアは、大きく損壊した口から声にならない呻きを漏らしながら、文字を掻き巻くようにみぞおちを両手で押さえ、まどかに向かつて近づいてきた。

『お前の相手は、オレだと言っている……!』

桜色の少女の前に黒鉄色の戦士が立ち、破壊する蜘蛛の行く手を阻む。

アラアーネアはクウガを忌々しそうに睨み付けながら、膝を突き、前のめりに倒れ伏し、頭上に光の輪が出現し、先程、武器を取り出した時よりも強く大きく光り輝きだした。

次の瞬間、怪人 アラアーネア・ピスカートの身体は、轟音と爆炎を上げ、爆発四散した。

クウガは、とっさにまどかを屈ませ、自身の身体を盾にするように彼女に覆いかぶさった。

しばらくして、クウガは慎重に顔を上げ、アラーネアの伏していた場所……爆心地を仰いだ。

そこにはアラーネアの姿はなく、黒く焦げ砕けたコンクリート、そして、わずかに火と黒煙がくすぶっているだけだった。

『やった……のか……?』

クウガは、まどかを庇いながらも、ゆっくりと油断なく立ち上がった。

その時である。

『くははは……、やるじゃねえか?元国い♪』

『お前の勝ちだ! 見事なKO勝ちって奴よお! くはは♪』

『ナイスファイト……。くはは、イイ死合いだっただぜえ……』

三方向から、サンじゅう口のくぐもった声が聞こえてきた。

見れば、ずるずる……と、切り刻まれた身体を寄せ集めるように引きずってうごめく三人(?) サンじゅう口が、左右二人(?) して、少しばかりニヒルな笑みを浮かべている。

「ひっ！ ええっ！ サンじゅう口さん!!」

『うわああっ！ サンじゅう口!! い、生きてたの!!?』

あまりの光景に、クウガとまどかは抱き付き合い、そろって飛び上がった。

『生きてたの? ……たあ、ご挨拶じゃねえか? 今の世の中、こんな程度でくたばって

たら命がいくつ有っても足りやしねえぜ! 舐めんじゃねえぞ! くははは!!』

『ところでよ……俺の左の前脚の付け根……知らねえ? 見つかんねえんだよお……

!』

『バカヤロ! そんなモン、テキトーにくつつつけとけ! 余裕がある時 “調節” すりや

あいいんだよ!!』

『俺は意外と几帳面なんだよ! 知ってんだろがあ?! コノヤロー!!』

『一々騒ぐんじゃねえ、バカ共があ……。傷に響くぜえ……。』

『テメコノヤロ! 下半身の分際で、お高く止まってんじゃねえ!!』

伝法な口調の右側、愚痴っぽい左側、口が無いせいかな? やや無口な後脚、三人(?)

のサンじゅう口の口論を目の当たりにし、クウガとまどかは、もう……何を追及し、ど

う理解すれば良いのか解らず、顔を見合わせる事しか出来なかった。

顔を見合わせ……二人は、ようやく自分達が“ぴったり”と抱き合っているという事

実に、ようやく気が付いた。

『ひゃあうわああ!! ぐー… ぐー… ごめんなさい!!!』

すつとんきような声を上げ飛び上がって、クウガはまどかから離れた。

それと同時に《クウガ》の姿に波紋が立つ様に揺らぎ、元の『中沢 元国』の姿に戻った。

「ご、ごめんね? 中沢くん。あの……その……えと、サンじゅう口さん。サンじゅう口さん達(?)に、ビックリしちゃって。えへへ……」

「いやあ、こつちこそ……。う、うん、そうだよ。アレは驚くよね。ハハハ……」

まどかと中沢は、照れ隠しにお互い苦笑し合った。

目を合わせられない二人は、示し合わせたように赤らめた頬を掻いていた。

不意に、中沢がわざとらしく咳払いをして、まどかに顔を向けた。

「と、ところで……か、か、鹿目さん! おま、おま、お待たせ……! お、お、お送って行くよ……!」

再び、チョロ沢は、チョロいはチョロいなりに、勇気を振り絞り、まどかに、ひきつった笑顔とたどたどしい言葉、そして、とびきりの『サムズアップ』を送った。

「……うん、じゃ、お願いします。えへへ……」

まどかは、チョロ沢の勇気に、とびきりの笑顔と控えめな『サムズアップ』を返し、ぺこり……と律儀に頭を下げた。

「ご、めん……、ちよつと……その前に……うん、そお十分……いや、五……ふ……
だけ……休、ま、せて……」

中沢の目と頭が、ゆらゆらと揺れる。そして、もつれるように前のめりで、まどかに倒れ込んできた。

「えっ!?! ひやつ!! 中沢くん!?!」

まどかは、とつさに中沢を抱き止めるが、尻餅を突きそうになる。しかし、サンじゅう口の大きな尻尾が、彼女を優しく受け止めた。

『眠っただけだ、安心しな。はじめての『変身』だったからな……。悪りいそのまま少し休ませてやってくれや。くはは……。』

サンじゅう口の下半身は、文字通り背中で語り、まどかを地面に下ろし座らせた。

サンじゅう口の言葉と中沢の静かな寝息を耳にして、一息つくように安心するまどか。そして彼女は、かつて自分もつと幼かった頃、父や母にして貰い、そして今は、自分が年の離れた幼い弟にするように、眠る中沢をやさしく抱き寄せた。

「ありがとう、中沢くん……。おやすみなさい……。」

まどかは、中沢に優しく語りかけ、自分もしばらく心と体を休ませる事にした。

少女は、少年の呼吸と体温を感じながら、静かに瞳を閉じた。

『たくっ！ いまいち締まらねえヤロオだな！ やっぱ《化け物》向きじゃねえなあ！
くははは!!』

『だな。しっかし、なんかムカつくぜ……。俺のが断然重傷だろうが？ 元国のヤロ
……。』

『くは！ なんだよ左の！ テメエ、ガキのイチャつき合いにヤツカミかよ？ ダセ！
っか、キモ！ くははは!』

『なんだとお、右のお！ 俺がキモいって事は、テメエもキモいって事だぞ!!』

『たくっ……。テメエら、いい加減にしろ……。自分同士で揉め事なんざ、虚しいにも程が
あるぜ……。』

『テメエ、コラ！ 下半身のくせに、上から目線で物を言うんじゃねえ！ 転がすぞ!!』
『だいたい……。テメエ、口も無えのにどっから声出してんだよ!』

少年少女の触れ合いを見ていたサンじゅう口達は、『左足の付け根論争』も冷めやらぬ
内に『キモい、キモくない論争』並びに『どこで喋ってんの？ 論争』を始めてた。

『まっ、何にしろ……。《人間》の元国がいれば、退屈せずに済みそうだろ……。?』
『ああ、《白饅頭》共のイヤらしい能面ヅラもカチ割ってやれそうだぜ……。』

『だな！ 《白饅頭》を喰い散らかすのも、飽きてきたしなあ。そろそろ、ピリツとした
辛味が欲しかったトコだ!』

後脚のサンじゆう口が、機転を利かせ、話題の軌道修正に成功する。

『マラーク共も、やつとこさつとこ出張つて来やがったし！ 見逃せねえぜ!! くははは』

『くははは』

『くははは』

こうして、桜色の少女の《運命》に、黒鉄色の戦士という《爆薬》と、黒い凶獣という《導火線》が加わった。

その《凶悪過ぎる爆弾》が、少女の《運命》を切り開く《救い》となるのか？ それとも、少女の《運命》を根底から破壊する《脅威》となるのか？

それは

《神》にも……

《悪魔》にも……

解らない……

5：黒い夢★赤い夢

鹿目 まどかは、夢を見ていた。

それは、ひどく現実味のある夢……

悪夢だった。

肌を切り裂く様な冷たい風

砕けて足場の悪いアスファルトの感触

水中に没したかの様な濁った耳障りなまな静けさ

空間全体に充滿したザラついた空気の肌触り

物の輪郭のみを奇妙に浮き彫りにする、仄暗いが仄明るい空

不気味な色合いの雲にと共に重力を無視して空に浮かぶ、砕けた瓦礫と折れた摩天楼

逆さまで回って踊る巨大で不気味な歯車人形

まどかは、それら目の当たりにする物すべてに、不可思議な現実感を覚えていた。

ならば、何故……

彼女は、目の前の光景が

「これは夢……」

と、気付けたのであろうか。

それは、彼女の目の前にもう一人、鹿目 まどかがいるからだ。

夢の中のまどかは、周りの光景や雰囲気と全く不釣り合いな桜色の可愛らしい少しだけ丈の短いドレスを着て、可愛い花のつぼみのついた杖を握っている。

こんなに、可愛らしいドレスを着ているのに、夢の中のまどかは地面に蹲って涙を流している。

泣きながら、瞬きもせずに一点を見つめている。

そう、不思議で奇妙で不気味な光景にも眼もくれず、ある一点を見つめている。

彼女の桜色の瞳の先には、四体の異形の戦士が並び立っていた。

神々しい白い聖衣を身に纏い、

大弓を携えた猛禽の戦士。

雄々しい黄銅の鎧兜を身に纏い、
長剣を携えた獅子の戦士。

妖しげな蒼黒い法衣を身に纏い、
斧槍を携えた勇魚の戦士。

そして、それら三体の戦士に取り囲まれる形で、漆黒の戦士が幽鬼の様に佇んでいる。
そう……

戦士は漆黒だった。

拳も、腕も、脚も、身体も、纏う闘気も、

そして、その瞳も……

何かもが闇の様に漆黒だった。

天を突く様に立つ金色で四叉の額の一本角と、身体中を走る金色の装飾が、その闇の色を更に際立たせている。

まさに、《天使》と《悪魔》の対決の構図だった。

先に動き出したのは、三体の天使達。

天使達は、

烈風を纏い

砂塵を率い

濁流を操り

神速の絶技をもって、三方向から《悪魔》を滅却せんと殺到する。

瞬きすら許さない刹那の内に勝敗が決まった。

《悪魔》の勝利で……である。

猛禽の戦士は、漆黒の連弩で翼と身体を撃ち抜かれ……

獅子の戦士は、漆黒の大剣で長剣ごと肩を斬り割られ……

勇魚の戦士は、漆黒の矛で深々と胸板を刺し貫かれ……

天使達は、頭上に光の輪を強く激しく輝かせ轟音と共に、三つの巨大な火柱を打ち建てて爆発四散した。

悪魔は、天使達に勝利したにも関わらず、なんの感慨も無いかの如く武器を無造作に手に持ち……やはり、ただ幽鬼の様に佇んでいる。

悪魔は、酷く緩慢な動作で、仄暗くて仄明るい空を仰いだ。

不気味で巨大な歯車人形を、しばし見つめる。

すると、悪魔は、羽虫でも掃うかの様に片手で無造作に虚空を撫でた。

唐突に、空が漆黒に染まる。

光を発さず、逆に辺りを闇に染める漆黒の炎が、歯車人形を包み込む。

歯車人形は、瞬く間に闇に焼かれて崩れ、奇妙に甲高い哀しげな嗤い声を上げながら消滅した。

歯車人形が焼け崩れる様を、ただ見上げていた悪魔は、闇色の瞳を まどかに向けた。まどかは、そして夢の中のまどかも、その深い闇の色から眼を逸らせない。身動き一つ出来ない。

悪魔は、酷く緩慢にも見える歩みで、まどかに近づいて来る。

ついに悪魔は、まどかの目の前に静かに立った。

悪魔の漆黒の腕が、夢の中の彼女の白く細い首に、そつと……添えられた。まるで、労わる様な優しい仕草……

そして、夢の中の まどかもまた、悪魔の手を労わる様に触れ……

『な……く……ん……』

何事かをつぶやき

静かに涙を流した……

と、そこで、まどかは夢から醒めた。

「夢……？ ……夢オチ？」

まどかは、まだはつきりしない頭を突つ伏す様に、もたれていたベットから、ゆつくりと上げた。

「こっちは夢じゃなかった……。よかった……」

ベットの上で眠る彼の顔を見て安堵する まどか。

ふと、あんな恐ろしい体験をして……そして、何より、させてしまったにも関わらず、彼の顔を見るなり「よかった」などと口走る自身の能天気さに、思わず苦笑してしまう。「中沢くん……」

ベットの上の中沢は、昨夜寝かせた時のまま、静かに寝息を立てている。

まどかは、彼の寝息に昨夜と同じように安心感を抱いた。

まどかを護り《マラーク》を撃破した中沢は、その後すぐ気を失う様に眠ってしまった。

全く目覚める気配の無い中沢に、さすがの まどかも心配になり、彼を自宅に運ぶ事にした。

中沢を家に送り届ける事も考えたが、彼の家の方角は知っていても場所までは知らない まどかはそうするしかなかった。

そう思い行動に出たのは良いが、如何せん まどかは小柄で非力な少女である。

いかに中沢の体格が十人並みのと言えども、文字通り「軽々と……」とは行かなかった。

見かねたサンじゅう口が、怪我を圧して大きな耳(?)と尻尾で、二人まとめ持ち

上げて運んでくれたのだが……

……屋根から屋根へ、電柱から電柱へ、電線から電線へ、飛び回るのは、なかなか貴重な体験だった。

ただし、二度としたいとは思わないが。

そのあと、サンじゅう口は、『血がたりねえ、そこいらで残飯でもあさつてくるぜえ！』と言って何処かに行ってしまった。

なんだかんだで、彼にはちゃんと御礼の一つも出来ていない。

食事くらい「うちで食べていってくればイイのに……」と思いかけた。まどかだったが、家中の食べ物という食べ物を喰い尽し、食器やテーブルをも齧る。無駄に黒いヘンなナンカ〴〵のいる光景が、何故かハッキリと脳裏に浮かび「これでよかったんだ……」と思ひ直し一人頷いた。

それにしても……と、まどかは振り返る。

昨夜は、何とも密度の濃い夜だった。あの様な悪夢も見ようという物である。

……もつとも、内容はほとんど、まどかには思い出せ無かった。

しかし、恐ろしい……本当に恐ろしい夢だった事だけは、よく憶えている……。

中沢と《マラーク》との戦いは、もちろんの事、中沢を……男子のクラスメイトを自宅に連れ帰ったという事も、また『一大事』だった。

その上、気を失っているのだから、まどかを心配して待っていた両親を、さらに驚かせた。母『詢子（じゅんこ）』は何故か少し楽しそうだったが……。

両親にウソをつくのは気が引けたが、「怖い人達にカラまれた所を中沢くんが助けてくれた……」と説明し、まどかは、心配をかけた事を両親に謝った。

そして、その後も、なんだかんだで大変だった。

母 詢子が、中沢の家族に連絡し、土埃まみれの中沢を父『知久（ともひさ）』が着替えさせ、客間のベットをすぐに用意して、彼を寝かせた。

その上、まどかは食事もとらず中沢に付き添うと言って、さらに両親を困らせてしまった。

最後は、中沢の側で食事をとるという形で落ち着いたのだが……

こんな風に、両親にワガママを言って困らせたのは、どれくらいぶりだろうか？

少なくとも、弟の『タツヤ』が生まれて『おねえちゃん』になつてからは、ワガママらしいワガママは初めてだろうと、まどかは苦笑するしかない。

まどかは苦笑を優しい微笑に換えて、自分に久しぶりのワガママを言わせた張本人の顔を覗き込む。

まどかの親友『美樹（みき） さやか』曰く「コレと言う特徴が無いのが特徴……」と評した中沢の顔。

まどかには、さやかの言う『コレと言う特徴』が、どういう特徴なのかは解らないが、中沢の顔は親しみやすい「優しい顔……」だとは思う。

確かに、さやかの幼なじみ『上条 恭介（かみじょう きょうすけ）』の顔立ちは目鼻立ちも整っていて中性的な『美少年』だ。まどかも、「きれいな顔……」だと思う。

けれども……

そう「もやもや……」した感じはしなかった。

しかし今この時、中沢の顔を見つめていると、その「もやもや……」を頭の奥と胸の奥に感じる。

昨日までは、この「もやもや……」は感じなかったのだが……

「中沢くん……」

なんとなく、意味も無く彼の名前を呼んでみる。

そして、やはり意味も無く彼の髪の毛を、ぎこちない手付きで撫でてみる まどか。

（なんか……、好き？ ……かも？ この、てぎわり）

自分の髪の毛と違って、やや硬い感触がする中沢の髪の毛。

（なんか、その……男のヒトってカンジがする……）

まどかの、喜びとも悲しみともつかない「もやもや……」が、胸の奥で次第に強くなる。

と、その時

「まどか？ 起きているかい？」

控えめなノックの音と共に気遣わしげな父 知久の声が、ドアの向こうから聞こえてきた。

「うわあっひゃい?!」

まどかは驚き、すつとんきような声を上げ、腰を下ろしていた丸椅子から滑り落ちそうになった。

「どうしたんだい?! 転んだの……?! なんか面白い声が……」

ドアの向こうから心配そうな知久の声。

「え、えつと……ウトウトしてて！ パパの声にビックリしちゃっただけだよ！ うん

！ えへへ……」

べつに悪い事も疾しい事もしていないはずなのに、何故か言い訳して笑って誤魔化してしまう まどか。

「それは、すまなかったね……。入っても良いかい？」

「う、うん、どうぞ……」

音を立てない様に静かにドアを開け、優しい言葉を まどかにかけてながら知久は客間に入ってきた。

「おはよう、まどか。いつもより少し早いけど、朝ご飯もう食べられるよ？」

しばしの沈黙。

「……なんで、そんなスミッコにいるんだい？」

知久は、何故かスパイクシヨンの主人公さながらに、背中を部屋の壁に貼り付けている愛娘を、困惑半分、心配半分の、なかなか複雑な顔で見つめる。

「え、えと……。なんて言うか、なんとなく……。？ かな？ そ、それと、おはよう。えへへ……」

本当に「なんとなく……」なのである。

そう、何故か、なんとなく急に中沢の隣にいるのを知久に見られてしまうのが、恥ずかしくなってしまったのである。

「ああ、うん、おはよう。まどか」

まどかの曖昧な答えに、内心で首を傾げながらも微笑み返す知久。

そして、知久は視線を愛娘から、彼女の恩人に移す。

「彼……中沢君は、まだ目を覚まさないんだね……。昨日の夜みたいに、ここで食べるかい？ 運ぶけど？」

「う、うん。そう……そうしようかな……」

知久の笑顔に、まどかは救われた様な気持ちになる。

「でも、その前に顔を洗つてくると良いよ。なかなか面白いヘアスタイルになってしまつているからね」

微笑を微苦笑に換えた知久は、まどかの寝癖頭を見ながら洗面所の方を指差す。

「……ええ？ ええ!!? なんで!!? すわつたまま寝ちやつたから?!」

慌てて寝癖頭を押さえつける まどか。

しかし、あまり効果は無い。やはり、最低でもヘアブラシと鏡は必要だ。

「ははは、多分そうなんじゃないかなあ。直しておいでよ。その間、中沢君には僕が着ているから」

「ん……、でも……」

知久の『サムズアップ』と優しい提案。

しかし、まどかは躊躇う様に、まだ目を覚まさない中沢を見つめる。

「心配なのは解るけど、そのままじゃ、中沢君に笑われてしまうよ?」

「う、うん……。じ、じゃあ、おねがい……。ううくん、なおるかなあ? これ……」

まどかは知久の笑顔に背中を押され、ぱたぱた……と足早に洗面所に向かった。

知久は、まどかの背中が見えなくなるまで見送ると、その優しげな瞳を中沢に向けた。

「中沢 元国……君……か。ふむ……」

優しい眼差しなのは確かだが、その奥には困惑、猜疑、不安、などが入り混じり複雑な光が宿っている。

知久は、少し大袈裟な動作で腕を組み、何事かを考えながら、娘の恩人を見つめていた。

敵だ。

敵が来る。

大勢の敵が来る。

獅子や豹、牡牛のような哺乳類

鷹や鷲、鳥のような鳥類

甲虫や蠅、蟻のような昆虫

蛇や蜥蜴、亀のような爬虫類

他にも、魚類、甲殻類、節足動物、軟体動物

様々な動物の特徴と屈強な戦士の身体をもった、半身半獣の《怪人》達が来る。

神秘的なほどに不気味な彼らは

牙を剥き

爪を立て

翼を拡げ

多種多様な凶器を掲げて迫ってくる。

人々の日常を

人々の大切な物を

破壊しようと迫ってくる。

中沢は戦った。自分の身体が『別の何か』に変わっていく事を、必死に無視して無我夢中で戦い続けた。

自分が自分でなくなる事よりも、自分が『好きになった』物が無くなってしまう事の方が怖かった。怖くてたまらなかつた。

中沢は、炎のように燃え上がる拳と蹴足で……

流水のような変幻自在の棍で……

大地すら斬り割る大剣で……

必殺必倒の弩弓で……

次々と『怪人』を打ち倒していく。

やがて中沢は、何時間、何日、何か月戦っているのかわらなくなっていた。そして、何のために戦っているのかも……。

とても大切な事だったという事だけは憶えている。

思い出さなくてはという気持ち動く。

だが、今は戦わなくては。

やがて中沢は、力が欲しいと望むようになった。

どうしようもない理不尽をどうにかできる力を。

何かを失う悲しみや淋しさから守る力を。

……何を、誰を守るためになのかはどうしても思い出せない。

いつの間にか、辺りは血で染まり、真っ赤になっている。それが自分の物なのか、『怪人』の物なのかは分らなかった。

とにかく

力だ……

力

チカラ

血カラ……！

中沢の目の前を突如、黒い影が走り抜けた。

中沢は、電光石火の反応で影を大剣で横なぎに斬った。

『グハアアツ!! やられたあゝ!! ってかあ? くははは! 兄弟に身体を二等分にされるのは、数え始めて二百と七回目だぜえ!』

『ずいぶん張り切ってるなあ? 何か嫌な事でもあったか? くははは……』

中沢の目の前には、無残に切り裂かれた黒い獣……サンじゅう口が、皮肉気にほくそ笑みながら転がっている。

『戦いなんざ、そう思いつめてやるモンじゃねえぜ!』

『そんな調子じゃあ、自分の護りたいモンまでぶっ壊しちゃまうぞ?』

まるで、からかいつつ友人の無茶を諷める様な気安い調子のサンじゅう口。

その時、中沢は背後に何かの気配を感じた。

刹那の内に大剣を棍に換え、驚異的な瞬発力で間合いを潰し、渾身の力で棍を気配に向かって突き入れた。

《怪人》とは全く比べ物にならない柔らかな夢い手応え。

花が咲く様に、赤黒くに染まる桜色の瞳と髪、白い肌……

『ホラ………な』

『くははは………』

中沢は、サンじゅう口の無表情の濁いた笑い声を、虚ろに聞きながら力無く倒れ込む彼女を抱き止めた。

壊れてしまった彼女の身体は、羽根の様に……儂く軽かった。

『カナメ………』

腕の中で、彼女の身体は徐々に暖かさを失って行く様が、中沢の鋭敏になった五感が否応なしに捉え教える。

『……さん?』

『張り切りすぎんなよお? 兄弟……。危ねえ危ねえだぜえ?』

『くははは………』

サンじゅう口の、憐れむ様な優しい嘲笑。

そこで、ようやく中沢は悪夢から抜け出せた。

「ゆ………? め………? なんて………夢………夢を?! 嫌な夢を………?!」

緩慢な動きで身体を起こす。

かけ布団が、異様に重く感じる。

やっとの思いで起き上がった中沢は、頭を抱える様に額の汗をぬぐう。

肉体の方は何時もより快調なほどだが、精神の方は今までに無い程に最低最悪だった。

「おはよう、中沢君。少しいなされていた……、大丈夫かい？」

優しげな言葉と共に、中沢の目の前に水の入ったグラスが現れた。

「え？ その……、大丈夫です？ ええと……あ、おはようございます？」

思わずグラスを受け取った中沢は、見知らぬ青年の爽やかな笑顔と言葉に、困惑しつつも律儀に挨拶を返す。

そして、彼は、ある重大な事に気が付いた。

「え……？ あれ？ オレの部屋じゃない!? と、どうかオレの家でもない!? てっどナタ!? あ！ すいません！ オレじゃなかった、ボク中沢デス？」

そう、ここは中沢の部屋でも、もちろん家でもなかった。

まず、中沢の部屋は、こんなに小洒落た感じで小奇麗ではない。

襖（ふすま）に欄間（らんま）障子に畳はどこに？

すべて揃える前に絶版になり中途半端になってしまった分冊百科は？

何よりも、一人っ子の中沢には、この様な『爽やかで優しそうなお兄さん』はいない。これは一体、どのような事態なのであろうか？

「昨日の夜は、ウチのまどかを護ってくれたそうだね？　中沢君……。ははは、いや、ありがとうじゃ足りない……。でも、本当に、ありがとう」

深々と頭を下げ、中沢に何度も感謝の言葉を口にする青年。

年上の男性に何度も頭を下げられる事に違和感を感じ、困惑する中沢だったが、はたと気が付いた。

（ウチのまどか……。？　あ、そうか！　ココは鹿目さんの家で、この人は鹿目さんの『お兄さん』なんだ。うん、そういえば、目元とか似ている気がするぞ！）

決して灰色とは言えない脳細胞を駆使し、中沢は胸中で一人納得し頷く。

「いえ、そんなそんな……。その、なんて言うか、男？として当然というか？　オレ……。じゃなくて、ボクが勝手に暴れて勝手に倒れただけというか？　結果的に、鹿目さんが……。まどかさんを助けた、いえ、彼女が勝手に助かったというか？　だから、その、ボクは別に何も……。はい……」

そう、今の中沢の……。ある種の冷静さを取り戻した彼の感覚としては、まさにそうだった。

自分が『不愉快になりたくない』から『勝手に暴れて勝手に倒れた』だけ……
たまたま、その時の中沢の『不愉快』が、『彼女の涙』あるいは『彼女の危難』だった。
だから、『敵』を……

突き詰めれば、それだけ事なのだ。

『中沢の戦い』……すなわち『殺し合い』を演じた理由を、彼女に転嫁することなど中沢には出来ない。するつもりも無い。

「ははは、それでも……いや、だからこそ……かな？ やっぱり、ありがとうだよ？ 中沢君」

爽やかな微笑で、もう一度頭を下げる青年。

（鹿目さんと同じコト言ってる……。 やっぱり、兄妹だなあ、イイ人だ……。）
中沢は、青年の謙虚で心優しい態度に、恐縮するしかない。そして、思わず目頭が熱くなる。

中沢はチヨロロイイ奴だった。略してチヨロ沢だった。

「じゃあ、その……ぜんぜん大丈夫でした。ヨユーでした！ラクショーでした！」

中沢は様々な複雑な感情を、ひとまずは誤魔化して、ビシリ……と『サムズアップ』と笑顔を青年に向けた。

「ははは。そっか、楽勝かあ……頼もしいな」

中沢に負けない『サムズアップ』と笑顔で応える青年。

と、その時、不意に部屋のドアが開いた。

「やっつと、なおったよう。ごめんね？ お待たせ、パ……う？」

桜色の髪の少女が、『お兄さん』に話しかけながら部屋に入ってきた。中沢と少女の瞳が重なる。

「中沢くん……目、覚めたんだ……。あのまま目を覚まさなかったら、どうしよう……つて、怖かったんだ……。良かった……」

少女は、まるで生き別れの肉親と再会を果たした様に、僅かに目じりを涙で濡らし微笑む。

「ホントに……、良かった……」

心から、嬉しそうに泣き微笑む。

「鹿目……さん？」

見覚えのある泣き笑いの顔の少女に名前を呼ばれた中沢は、彼女がようやく『鹿目まどか』であると気が付いた。

まどかは、見慣れた制服姿では無く私服姿で、リボンでツーンテイルに結い上げている桜色の髪を下ろした姿だった。

チヨロ沢は、そんな、いつもと違う まどかに胸の奥と頭の芯の辺りを刺激された。そう、いわゆる『めろめろ♡』にされたのだ。

(う……む、胸がくるし……、さっきの夢の所為……?)

内心で首を捻る中沢。原因と思われる事に想いを巡らした瞬間、悪夢……赤く染まり力無く倒れ伏す まどかの姿が再び脳裏を過ぎった。

先ほどまでの、心地良いと言っても良かった胸と頭の刺激が、たちまち苦痛に姿を代える。

普段はベットではなく布団で寝る中沢は、思わぬ段差に転げ落ちる様にベットを降りると、まどかに急いで駆け寄る。

「鹿目さん……! 怪我は?! 痛いトコとか違和感はない?! キミに何かあったらって……オレ!」

驚いて困惑顔の まどかを余所に、中沢はまくし立てる様に問い詰める。

「オレ……オレ、キミに何もしてないよね……?」

思わず出した両手のひらを、彼女の小さく華奢な両肩に触れるか触れないかの所で、中沢は慌てて引き戻して消え入りそうな声で続ける。

「オレ……オレは、あのまま……化け物の……ままで、キミの事を……」

中沢は、行き場を無くした両手のひらを見つめて強く握り込む。

悪夢の中の まどかの身体の脆く儚い感触が甦る。

赤が深く大きくなる毎に、冷たくなって行く彼女の身体。

まるで、実際に触れたかの様に、はつきりと思い出せる悍ましい感覚。

今にも自ら握り潰してしまいかねない程、硬く固められた中沢の拳。

震える中沢の拳を、白くしなやかな手が優しく包んだ。

中沢の手よりも一回り小さな手

柔らかい手

暖かい手

まどかの手

「大丈夫だよ。中沢くん……、わたしは大丈夫だから……」

「鹿目さん……」

まどかは、中沢を真っ直ぐ見つめ返し、優しく微笑む。

「わたしは……ほら、ゲンキゲンキ！ 中沢くんのおかげ！ ね？」

まどかは両腕でチカラこぶを作るマネをして、中沢に少しおどけて見せる。

「ごめん、鹿目さん。ありがとう……！」

中沢は自分の袖に顔を埋める様にして、濡れかけた目じりを隠して拭う。

「良かったね、まどか……。良かったね、中沢君……」

まどかと中沢のやり取りを見守っていた『お兄さん』は、まどか、中沢の順に優しく微笑みかける。

「二人とも、つもる話もあるだろうけど、朝ご飯を食べながらにしないかい？ お腹空いているでしょう？」

まどかも中沢君も

「え？ 言われてみれば……。はい、恥ずかしながら空いています。ハハハ……」

『お兄さん』の問いかけで、中沢は自分が空腹である事に気が付いた。顔を赤らめて苦笑するしかない。

「なら、遠慮はいらないよ。中沢君」

「ええと、その……」

中沢は、どう答えた物か……と、思わずまどかの顔に視線を送る。

まどかは、そんな彼に優しく微笑み返し頷いた。

「あく……で、では、お言葉に甘えさせていただきます！ 鹿目さんの『お兄さん』！」

中沢は、思い切って『お兄さん』とまどかの厚意に甘える事にした。

深々と頭を下げる中沢。

しかし、まどかと『お兄さん』から、しばらく経っても何の反応も無い事を不思議に

思い、首を捻りつつ顔を上げ、二人の様子をうかがう。

まどかと『お兄さん』は、一つ眼と眼を合わせると、遠慮がちにだが仲良く笑いだした。

中沢には捻っている首を、さらに捻る事しかできない。ワケが解らなかつた。

「えと、中沢くん……。こちらは、鹿目 知久さん。わたしの『パパ』です」

「え……?」

「申し遅れたね、まどかの『父』の知久です。よろしくね、中沢 元国君」

と、まどかの紹介と、『お兄さん』改め知久の自己紹介。

『ばば』と『ちち』の、二つの言葉の意味が理解できず、中沢はしばし首を傾げる。

『教皇 (P a p a : パーパ)』だろうか？

(スゴいなあ、この若さで教皇様か……。コンクラーベは大変だつて聞いたけど……)

それにしても、鹿目さんはキリシタンだったのかあ……)

それでは、『ちち』はどうだろうか？

ここは、素直に『父』……『父親』だろうか？

『父』……?」

『パパ』……?」

「あつ……。なつ?! 『お父さん?!』」

「うん、その通り僕が。まどかの『お父さん』さ。改めてよろしくね、中沢君」

『鹿目さんのお兄さん』あらため『鹿目さんのお父さん』は何処か得意気に微笑み、呆然とする中沢に『サムズアップ』を送った。

「そういえば、おはようがまだだったね中沢くん？ おはよう、中沢くん。それから、我が家へようこそ中沢くん！」

まどかの花咲く様に柔らかな笑顔に、再び中沢は胸の奥と頭の芯を刺激されたのは、言うまでもない。

目的不明、正体不明の謎の怪人《マラーク》

黒い獣からもたらされた《チカラ》……霊石《アマダム》

少年の『少女を護りたい』という幼いが純粋な思いは、《アマダム》を、力をもたらすベルト《アークル》に換えた。

かつての英雄《第4号》と同質のチカラを使い、少年は怪人の魔手から少女を護ったのだ。

しかし、天は、そんな少年に、更なる試練を与えた。

その試練とは

ある朝、目を覚ますと「あ、なんか、気になるかも……」と、思い始めたばかりの少女の家に何故か『お泊り』していて、ご両親に『御挨拶』した後、御食事を御一緒する事になった……なつてしまっていた。もう、色々な段階を飛ばし……いや、むしろ『ワーブ』してである。

という、恐ろしく壮絶な物だった。

チョロいボキヤブラリーしか持たないチョロい中沢

略して、チョロ沢に、この状況で何が出来るというのか……

というか、どうしろというのか……

既に、『お父さん』を『お兄さん』と間違えるポ力をやらかしているチョロ沢

そんな、彼が桜色の少女と彼女の御家族の前で、更なる大ポ力をやらかさないで済むのか……

そして、『ヘンなヤツ』と思われないで済むのか……

もしかしたら、もう思われているかもね……

それは

《神》も……

《悪魔》も……

知ったこつちやない……

というか……

聞かれたって困る……

のである……

6：取り戻せた日常★ずれ始める日常

週の始まり月曜日。

どんなに人生に悩んでいても

どんなに人生を楽しんでいても

誰にも平等に訪れる、憂鬱だけど爽やかな月曜日。

そして、そんな月曜日は、

先週金曜日に同級生の少女に“本人は解っていないけれど《恋》っぽい物”をして

“《変身ヒーロー》のような者”に変身して

“《怪人》としか表現できない者”を倒し

次の日 土曜日には、件の少女と“《ふたり》でお出かけ……すなわち《デート》かもよ”を人生で初めてして、

祖父母に厳命され、人生で初めて《携帯電話》に触れた少年のところにも当然やって来た。

いつもより、かなり早く目が覚めてしまった『中沢 元国なかざわ もとくに』は、いつもより、かなり早く家を出て

いつもより、かなり早く学校にたどり着き

いつもより、かなり早く教室に着いてしまったのだった。

「おはよ……う」

当然ながら、教室には誰もいなかった。

眼に優しい淡い朝の光と爽やかな空気に満ちた教室に、中沢の空振りの挨拶が、虚しく響く。

なんとなく、ある席に視線を移す中沢。

そこは、彼女の席。あの夜、自分が戦う理由にしてしまった少女『鹿目 まどか』の席だ。め まどか』の席だ。

いつもそこで、彼女は授業をうけて、友人達と笑い合っている席だ。

確かめるまでもなく、今はまだ彼女の姿は無い。

「まだ7時半にもなっていないし……当たり前だよ。アハハハ」

ふと中沢は、今まで特に意識しなかった「あたりまえのコト」を、なぜ改めて意識して考えているのか胸中で首を捻りつつ一人さびしく呟き、空席ばかりの教室で律儀に自

分の席に「ぼつん……」と腰を下ろした。

早速、中沢は制服のポケットから携帯電話を取り出した。

そして続いて、ナツプサククから分厚い携帯電話の取扱説明書を取り出す。

この、中沢の人生初の携帯電話は、まどかの携帯を修理に出すのに同行し、ついでに彼女に見繕って貰った物だった。

中沢本人としては、携帯は出来れば持ちたくなかったし、そもそも全ての機能を使いこなす自信もなかった。

しかし、祖父母から「持ちなさい……」と厳命されてしまったのだから仕方がない。物凄く心配させた上に、ワガママを言う度胸などチヨ口沢に有るはずもなかった。

しかし今、中沢には心強い味方がいるのだ。

そう、この携帯を選ぶのも協力してくれた鹿目 まどか その人である。

中沢が携帯電話の機種を選ぶ際、「教えてあげやすいから、わたしと同じのとかどうか……?」という助言の下、彼女の物と色違いの携帯を選んだのだ。

女性というか……まどかと「お揃い」である事を嬉しく思うべきか？ 恥ずかしく思うべきか？ 中沢には分らなかつたが、心強い味方である事は確かだ。

しかし、彼女に「おんぶにだっこ」という情けない真似はできないし、したくない。

謎のカタカナ言葉が躍る文章と格闘する事数分という所で、教室の扉が開いた。

「あれ？ やあ、中沢じゃないか？ 今日はずいぶん早いんだね？」

「上条か。おはよう」

扉を開けたのは、クラスメイトの『上条 恭介かみじょう きょうすけ』だった。

恭介は、ここ見滝原中学校だけに止まらず、見滝原市全体で、『天才少年ウ』アイオリニスト』と知られ、将来を嘱望された有名人だった。

しかし恭介は、その才能や功績を鼻にかけない人柄からなのか、いたって平々凡々な中沢とも不思議と気が合った。

音楽と言えば

CDを購入し

プレイヤーに入れ

再生し

聴いて

毎回、決まって

「いい歌だあ……うん、買って良かった。あ、またケースの袋もらうの忘れた……」

と、何の捻りも無い感想を言う事しかできない上、リコーダーはもちろんの事、鍵盤ハーモニカすらままならない中沢は、同じ年ながら恭介を心から尊敬していた。

「おはよう、中沢。それにしても早いね？ 先を越されたかあ……悔しいなあ。ハハハ」
恭介は自分の席にカバンを置くと、屈託の無いさわやかな微笑みを浮かべ中沢の席の横に立った。

「いつも早いな。上条は」

「誰もいない教室だと、何となく、音符が心に沁み込む易い……楽譜が憶え易い気がするんだ。ハハハ」

どこか照れくさそうにセピア色の髪を、さらり……と掻き上げる恭介。

そして、中沢の手元の携帯電話に気が付いた。

「あれ？ ケータイ？ ついに買ったんだね。『なんだか通信が傍受されそうで怖いし。そもそも電話自体、架けるのも架けられるのも苦手だ』って言ったのに……。どういう心境の変化だい？」

「いやあ、なんていうか。うん……まあ、いろいろ思うところがあったんだ。使いこなす自信ないけどな……」

他愛のない気安い軽口を交わし合う中沢と恭介。

「ハハハ……。でも、なんだか嬉しいよ。なんとなく行き詰った時、気兼ねなく話せる相手って……ボクには、さやか くらいしかいなかったからさ……」

微笑を困った様な苦笑に換えた恭介は、さやか……彼の幼なじみである『美樹 さや

かみき さやか』の席を見つめて呟く。

「うれしいコト言ってくれるなあ……。でも、その言い方じゃ美樹さんじゃイヤみたいじゃないか？ ファン第一号は大切にしないとダメだ」

つられて苦笑する中沢だったが、親友の『友を軽んじる様な発言』をたしなめる。

「そういうわけじゃ……。無いんだけど。なんて言うかな……。その、ほら、男同士の方が話しやすい話題や悩みあって有るじゃないか？ さやか とは話しやすいけど、やっぱり彼女は女の子だからさ……」

「うーん、なるほど……。そうだよな。ごめん、余計なコトだった」

お互いにバツが悪そうに笑い合う恭介と中沢。

「いや、でも他ならぬキミが、さやかの為に言ってくれたコトだ。謝るならボクの方さ……」

恭介は笑みを消し、真剣な眼差しと口調で中沢に頭を下げた。

「それで、その、物は相談なんだけど……。改めて、ケータイの番号とアドレス交換してくれないか？」

頼むよ中沢」

再び爽やかな微笑み、制服のポケットから自身の携帯電話を取り出して見せる。

「ああ、もちろんだ」

「赤外線通信で出来るよ……」

「……赤外線？ レーザーかい？ ああいや……ええと、待つてくれ。……これ？ 天気予報が出てきた？」

中沢は取扱説明書を、しばしめくり携帯電話を操作する。

しかし、中沢の顔と頭の上は疑問符で埋め尽くされ、全く要領を得ない。

「ああ中沢……、ボクがやろう。ハハハ……」

「う、うん。その、なんかごめん……」

「まあ、慣れだよ。こういう物はさ」

バツが悪そうに苦笑し合う中沢と恭介。

恭介は、中沢の携帯電話を受け取り操作し始める。

「これで良し……と。はい、返すよ。中沢」

「あ、ああ……」

（中沢にとつては）未知のテクノロジーを、苦も無く操作した友人から携帯電話を受け取った中沢は、思わず彼を尊敬の眼差しで見詰てしまう。

「スゴいな。ええと……ちゃんと、上条の名前が映つてるぞ。ほらー！」

「別にスゴくは……あ いや、『町工場の底力』という観点から考えれば、とてつもなくスゴイ事なのかもしれないね。ハハハ」

無邪気に液晶画面を見せる中沢に苦笑しかけた恭介だったが、視点を換えて真面目に考察する彼もまたイイ奴だった。

と、そこで、ある事に気が付いた。

中沢の携帯電話のアドレス欄に、どちらかと言えば馴染みのある人物の名前が有った。

「まどか……？」

恐らくは、さやかかの親友 鹿目 まどかのことであろう。

だが、アドレス交換の操作すらままならない上、中途半端に恥ずかしがり屋の中沢が何故、同級生の少女のアドレスを登録しているのだろうか。

恭介には見当もつかなかった。

「もしかして、鹿目さんのことかい？」

素朴かつ率直な疑問を、中沢にぶつける。

「あー……いや、これは その……なんて言うか……。鹿目さんがケータイを修理に出すコトになって！ ついでに機種を選んでもらったみたいな？ ハハ、ハハハ……」

珍しく取り繕う様な物言いの中沢に、流石の天才少年ヴァイオリニスト 上条 恭介も首を傾げずにはいられない。

そもそも、その言い訳（？）では

『なぜ、中沢が鹿目 まどかの携帯電話が壊れた事を知っている』
なおかつ

『なぜ、二人一緒にケータイショップに行った』

のだろうか？ という理由の説明になっていない。

(ん……？ これは、つまり “そういうコト” なのか？ でも、まあ中沢はスゴクイイ奴だし。ぜんぜん不思議なコトじゃない？ のかもしれない？ たぶん？)

しかし、もし “そういうコト” だったとしても、他人のプライバシーをネホリハホリ聞く趣味の無い恭介は、これ以上の追及は控える事にした。

……のだが

「とりあえず、おめでどう。……かな？ 中沢」

友人として、彼の状況を最低限、把握する為に “カマ” をかけてみる事にした。

「ありがとう……って、なにが？ ケータイのコト？」

しらを切っている風でもない中沢。

そもそも、彼が嘘を吐くのが恐ろしくへたくソなのは知っていた。

(なんだ、ちがうのか……)

「いや、ボクの勘違いだったみたいだ。忘れてくれ、ハハハ」

そんな、ぶぎつちよな友人に、恭介は苦笑するしか無かった。

気の置けない男同士の、他愛のない話。

中沢は「帰ってきた……」と実感し、恭介は「なんか楽しい……」と曖昧に思う。

どこか退屈に感じるが、彼らにとっては大切な時間だ。

「それで？　今はどんな曲を弾いてるんだ？　前に聴かせてくれたのは……確か……も？　も、モンテスキューだったけ？」

「モンテスキュー……たぶん、モーツアルトのことじゃないかな？　それじゃフランスの社会思想家になっちゃうからね？　まあ今も、モーツアルトがお気に入りかな。それから、さやかのリクエストで最近の歌謡曲も、いろいろつまみ食い中ってカンジかな。ハハハ」

当初の目的である「譜面を覚える」はサボってしまった恭介だったが、友人と「こういう感じ」も悪くないと、心からそう思う。

そうこうしている内に、教室にクラスメイト達が一人、また一人と集まり始めた。

皆、口々に朝のあいさつや軽口の交わしあい、各々の席で鞆を置き一時限目の準備をしたり、もうひとねむりをしたりと、思い思いの日常が静かだった教室を一気に賑やかな物にした。

恭介との会話が途切れたふとした瞬間、何気なく彷徨させた中沢の瞳が、あの綺麗な桜色の瞳と重なった。

鹿目　まどかに間違いなかった。

中沢の思考と身体が、一気に緊張で硬くなってしまう。

当の　まどかも、何処かぎこちない笑顔で教室に入る。

ぎこちない笑顔のままクラスメイト達と挨拶を交わしながら、やはりぎこちない足取りで中沢と恭介に歩み寄ってくる。

「鹿目さん、おはよう」

「おは……おはよう、上条くん」

爽やかな恭介の挨拶にも、ぎこちない表情のまま応える　まどか。

何故か中沢は、彼女から視線を逸らして顔を赤くしたり青くしたりと忙しい。

「えっ……とっ!」

一方、まどかは覚悟を決めた様に頷くと、勢いを付けて中沢に向き直り、彼の顔を真っ直ぐに見つめて口を開く。

「お、おはよう、中沢くん……。え、へへ……」

「や、やあ鹿目さん。おは、おはよ……。う。ハ、ハハハ……」

顔を上げた中沢。

そして彼を見つめる まどか。

二人の瞳が真つ直ぐに重なる……

ということは無く。

視線が重なりそうになると慌てて右に左に、上に下にと、示し合わせたかの様に息びつたりと同じ方向に顔を逸らし合いながら挨拶を交わす まどか中沢。

「えと……その。じゃ、じゃあ……」

「え……？ あ、うん。じゃあ……」

二人そろって硬くぎこちない動きで手を振ると、まどかは逃げる様にそそくさと自分の席へ行ってしまった。

そんな彼女の背中を気遣わしげに見送る中沢。

まどかが席に着き前を向いたと同時に、慌てて視線を前に戻した中沢は、ぐったり……と重々しい溜め息を吐いた。

(これは、なんというか……なかなか重症らしいなあ)

一方、友人のじれったいが初々しい反応に、恭介は何やら微笑ましい気分になった。が、すぐに音楽家としての瞳が光る。

(しかし、これが「恋」をするってことなのか……？なるほど勉強になるなあ。あの曲は、もつとこの感じを表現するべきだったのか……)

そんな事を考えている恭介の背後に誰かが立った。

そして、そつと恭介の肩を叩いた。

このリズムで自分の肩を叩くのは、彼女しかない。

恭介は振り返る前に口を開いた。

「さやか、おはよう」

はたして、振り向いた恭介の視線の先に、クラスメイトで幼なじみの『美樹 さやか みき さやか』の

少し戸惑ったような顔が有った。

「……おはよつ、キョースケ。それにしても、相変わらず……後ろに目がついてんじやないの？ つてカンジだね。しびれるよ！」

さやかは、気を取り直して弾けるような笑顔で恭介の挨拶に応える。

「ハハハ、そうでも無いよ。まあ、でも、さやか だったら多分100パーセントわかると思うけどね」

「へ!? え!?! そ、そう?! それは、なんてーか……、あははは……!」

爽やかに微笑む恭介。

そんな彼の、そこはかとなく恥ずかしいセリフに照れた さやかは、努めて豪快に笑って誤魔化した。

「と、ところでき。まどかの様子が朝からなんかヘンなだけど……。キョースケなんか知らない？」

仕切り直す為に咳払い一つした さやかは、何処か落ち着かない様子で座っている親友を指差しつつ恭介に尋ねた。

「さやかでも解らないならボクじゃ見当もつかないよ……。」

まどかに向けられた さやかの人差し指を、優しくひっこめさせると微笑で彼女の質問に答える。

「あ、でも、いくら心配だからってムリヤリ聞き出す様なのはダメだからね？ 親しき仲にも礼儀ありだよ」

が、すぐに真剣な面持ちで、真つ直ぐ過ぎて時として思慮を欠いた行動をとる所の有る幼なじみを嗜める。

「わ、わかっているって。ここらの準備中ってヤツ？ それくらいは待つよ。ワタシ、まどかの親友だしね！ っつつもりなだけど……。」

「なんだけど……？」

さやかは友達思いの真剣な顔で頷くが、何事かを言いよどみ、眉をしかめて首を捻る。

つられて恭介も首を捻る。

「うん……。物憂げな表情でため息をついたり、切なそうに儂く微笑んだり……。かと思えば……。顔を赤くして嬉しそうに微笑んだりして……。そんな、カワイイまどかを朝から魅せ付けられる美樹 さやかちゃんの理性は脆くも陥落寸前ですよ！ 今、ワタシは、あのコの全てに興奮してしまふ自信が有る……。！ まどか、末恐ろしいコ……。流石はワタシの嫁！」

あたかも、悲劇の主人公を演じる舞台役者の様に頭を抱えて、大きくかぶりを振るい嘆く さやか。

「さやか、なに言つてんの？ ワケが解らないよ？ とうか、女の子が教室で興奮とか言わないでよ」

恭介は、真剣な顔で可笑しな冗談ばかり言う幼なじみに苦笑いをするしかなかった。

一方、中沢は一連の幼なじみ同士の余人には侵し難いやり取りに気まずい気持ちになつて言葉と口調を選ぶ。と同時に、なぜ女性とはいえ友人相手に緊張しているのか、自分でも解らなかつた。

「ええと……。美樹さん、おは……。おはよう」

考えた上で、なんの捻りも面白みも無い普通の挨拶になつてしまつた事に、中沢は自分のチョロい語彙に軽く絶望の様な物を覚えていた。

「おはよっす。中沢」

そんな中沢の本当にどうでもいい絶望感など知る由も無く、気さくな笑顔で挨拶を返す さやかだったが……

「……まさか中沢、アンタじゃないでしょうね？」

その笑顔をたちどころに厳しい眼差しに換えると、中沢を睨み続ける。

「え？ な、な、なにが？」

「先週の金曜、アンタとあのコ保健委員の仕事だったよね……？」

ギクリ……と、中沢の只でさえぎこちない笑顔と思考が、さらに強張った。

「アンタ……、あのコとなんかあった？ もしくは、なんかした？」

「な、な、なん、なんか……って?!」

素知らぬ顔で「なんにも無かったよ？」と、はぐらかせば良い物を、つつい先を促してしまふ嘘をつけない中沢は、チョロい良い奴だった。略してチョロ沢だった。

「なんていうか……例えば、アンタがあのコの三角定規盗んだとか……？」

細い指で頬を撫でつつ首をひねる さやか。

「もしくは、リコーダー……？ 盗んだとか？」

「な……ん？ ぬ、盗まないよお……」

ホツとしたら良いのか？

そういう事をするヤツだと思われている事を悲しむべきか？

中沢には判断出来なかつたが、彼女が昨夜の「戦い」の件を感じとつたわけでは無いらしい事は理解できた。

そして、さやかは さやかなりに、親友である まどかの事を心配している事も、ちゃんと理解でき嬉しくなつた。

とその時、クラスメイトがまた一人、教室に入つて来た。

「みなさん、おはようございます」

恭しく優しい声の挨拶と共に現れたのは、まどかとさやかの親友『志築 仁美しづきひとみ』であつた。

やや引つ込み思案な まどか

何事も即行動の さやか

思慮深く慎重な 仁美

……と、実にちぐはぐ、実にでこぼこ、な印象を受ける彼女達だが不思議と上手く帳尻が合っている……。

そんな、かけがえのない親友同士なのである。

「やあ、志築さん。おはよう。さやかがゴメンね？」

「おはよう、志築さん」

ねぎらう様な口調で、仁美の挨拶に応える恭介と中沢。

「中沢君、おはようございます。上条君も、その……おはようございます……」

中沢に微笑み返し、何故か恭介にははにかんだ笑顔に向けて、再び二人に挨拶をする仁美。

しかし、そんな彼女の優しい笑顔は、親友 美樹 さやかに向けられた時には、少しばかり頬を膨らませた、見事な怒り顔に換わっていた。

「さやかさんも……まどかさんも……酷いですわ。お二人して私を置いて、どんどん行ってすまうんですもの……」

仁美が、本当に怒っているという雰囲気を出そうとしているのは明らかだが、持つて生まれた優しい顔立ちはどうにもならず、むしろ可愛らしくなっているだけだった。

「あ、あー……うんうん、ごめんごめん。ほら、まどかが心配だったからさ。あははは……」

「そうでしたわ。それで、まどかさんのご様子は……」

さやかは、思わず笑い出してしまうような衝動を、何とか苦笑いに止めて、今朝から様子のおかしいもう一人の親友の話題にすり替えた。

そして、意外なほどあっさり仁美は矛を納めて心配顔で教室を見回す。持つべき物は、まさに親友である。

「あんなカンジ……」

「まあ……やっぱり、なんだかソワソワ落ち着かないようですわ……」

さやかは視線を追ったその先で、まどかは落ち着きなく身体を揺らしている。

「やっぱり、どこか身体の具合が悪いのではないでしょうか？」

心配そうに形の良い眉を曲げて、仁美はつぶやき首を捻る。

「うーん……。もし、そうだとしたら、まどかパパ……知久おじさんが見過ごすはず無いと思うんだけどなあ」

かつて小学四年生の晩秋、皆勤賞を狙ってバリバリの発熱状態で両親をも欺き、登校を強行しようとし、まどかの父 知久に発熱状態を看破され皆勤賞の野望を脆くも打ち砕かれた過去を、思い出しつつ首を捻る さやか。

友達思いの二人に恭介は、心から感心しつつ考える。

もちろん、まどかを心配していないわけでは無い恭介だったが、さやか達が必要以上に根掘り葉掘り追及をして、せっかくの観察対象……もとい、友人の「恋」が潰えてしまふのは忍びない。

「特に……顔色が悪いようには見えないし、大丈夫なんじゃないかな。女性同士じゃないと解らないコトもあるだろうから、見ていてあげて欲しいんだ。さやかに志築さん。いざとなったらボクか、もう一人の保健委員に言つてよ。なんでもするからさ。な？」

中沢」

「え？ あ！ ああ、もちろんだ」

真剣の面持ちで頷く中沢。そんな彼に、罪悪感を覚える恭介。

それらを、やり過ごす為に恭介は話題を逸らす様に口を開く。

「そういえば志築さん。ビデオ観てくれたかな？」

つい先日、何年か前のヴァイオリンの発表会の記録映像を仁美に貸した事を思い出した。

彼女の知る以前の恭介の演奏を聞いてみたい、との事だった。

せっかく、彼女が自分のヴァイオリンに関心を持つてくれた事を、誤魔化すのに利用する様で気が引けるがこの際、仕方がない。

「はい、もちろんですわ。とても素敵で、それになんだか可愛かったですわ。上条君……」

頬を少し朱に染めて微笑む仁美。

「ハハハ、思ったより恥ずかしいね？ 昔の演奏を観てもらうのって……」

彼女の好感触に、恭介は嬉しそうに照れくさそうに微笑み返す。

「なに仁美？ みずくさいなあ。ワタシに言ってくれば、ブルーレイで貸したのに、で、いつの演奏だったの？」

「す、すみません。ちょうど、上条君とお話ししている時に、そういう話題になったので……。それで、二年ほど前の市民ホールでの発表会の時の映像を。さやかさんは、やはり会場で？」

実に寂しそうな顔を作って仁美の肩を叩く さやかに、仁美はバツが悪そうに説明する。

「もちー！ 天才ヴァイオリニスト 上条 恭介 後援会会長の美樹 さやかちゃんが聴きに行かないワケ無いじゃない！」

しかし、当のさやかは特に気にしていない様だった。

「それにしても、あの時の恭介ときたら、真ん中あたりで『どちった』くせして、あたかも『そーゆーアレンジですけど。なにか？』みたいに立て直してたけど。観てるこつちが、寿命が縮んだよ。まったく……」

さやかは、子どものやんちゃを見る様な眼差しで苦笑して恭介の肩を肘で小突く。

「あれ、さやかにもバレてた？ あの時は、我ながら上手く誤魔化せたと思ってたんだけどなあ……。うーん、さやかも誤魔化せないようなら、ボクも全然まだまだってことだね。あはははは」

「うんうん。まだまだ、ゼンゼン！ ゼンゼン！ あはは……って、おい！ それって、どうゆー意味?！」

気兼ねの無い心を許し合った笑顔で、言葉を交わし合う さやかと恭介。

二人のやり取りを見て清々しい気分になる中沢だったが、ふと目にした仁美の微笑みに僅かな陰りを感じた。

「違つてたらごめん……。志築さん、もしかして……。なんていうか……。その……。元氣ない？ というか気分とか悪い？」

「え……。？ いいえ、べつに……。そう見えますか？」

気のせいだったのだろうか。中沢には、さやかと恭介のやり取りを見る仁美の顔が、どこか苦しそうにみえたのだが……

「うーん、別に……。ワタシには、いつもの仁美に見えるけど？ ねえ、キョースケ？」

「ん……。うん。特に顔色が悪いワケじゃないみたいだしね」

仁美本人に続いて、さやかと恭介も首を傾げる。

「……。なんともないんなら別にいいんだ。ごめん、志築さん」

「いいえ。お気遣い嬉しく思いますわ」

バツが悪そうに頭をかく中沢に、仁美は柔らかく微笑み返し首を横に振ると、彼の思いやりに感謝した。

「い、いやあ……。あははは」

急に中沢は、照れくさくなつてしまい視線を仁美から逸らす。

と、その逸らした視線の先で扉が開き、クラス担任である早乙女 和子教師が教室に現れた。

「わ、せんせー来た。早乙女せんせー、おはようございませーす」

「おはよう美樹さん。みんなも、おはよう。さあ皆さん席に着いて……」

早乙女先生は、穏やかではあるものの何時もと違い、何やら真剣で深刻な面持ちであつた。

そんな何時もと違う彼女に、挨拶をした さやかは勿論の事、まどかと中沢、クラスメイト一同は内心で首を思わず捻つた。

しばらく、ばたばた……がやがや……と、にぎやかだった教室は生徒達が席に着き終わり前を向くと、いまだ真剣な面持ちの早乙女先生に、皆一様に押し黙る。

沈黙が、朝の教室を包む。

「おはようございませーす！」

クラスメイト達の元気な声が重なる。

「おはようございませーす」

笑顔で返す早乙女先生。

しかし、そんな笑顔もすぐに真剣な顔に戻ってしまう。
少年少女たちの声で破られた沈黙も、再び戻ってくる。

「皆さん、大切なお話があります。よく聞いてください。今朝早く警察の方から連絡がありました……」

再びやって来た沈黙を破ったのは、吐き出す様に紡がれた弱々しい早乙女先生の言葉だった。

「三日前……金曜日の夜遅くの事です。この見滝原市内で《未確認生命体》による物と思われる事件が起きました」

さして大声だったわけでは無いはずの早乙女先生の声が、妙に響いて聞こえた。
ざわり……と、再び教室がにわかに騒がしくなる。

「そう言えば……G3ユニットのトラックが、いっぱい止まっていた気がする……」

「あれは違うよ。あれはG3マイルドって言って、正確にはG3ユニットじゃなくて……」

「確かに、お巡りさんが妙にたくさん立ってた……」

「やだ……こわいよ……」

生徒達は、口々に不安げな言葉を囁きあっている。

「それで、皆には本当に悪いんだけど……。今日から当分は、放課後のクラブ活動は自粛……お休みして貰わなくちゃいけないようになったの」

早乙女先生は、本当に申し訳なきような顔で生徒達の顔を見回した。

「えー!? マジっすか?!」

「ああ、もう、ただでさえ……弱いのに」

「朝練……する?」

「うーん……俺は無理」

「やったー! 早く帰れるよ! みつ屋であんみつ食べよー!」

「アンタ、また太るよ?」

「内職の数……増やしてもらわなくちゃ」

悲喜こもごも声が生徒達の間から上がる。

ほとんどの生徒の関心は「未確認の脅威」よりも放課後の「自分達の時間」に移ってしまっただけだ。

早乙女先生は、軽く手を叩き生徒達の注目を再び促す。

「放課後は、家が近くの人同士で集まって集団下校をしてみよう事になりました。家が近所の人がない人、委員会や、その他の用事で帰れない人は、先生たちでお家まで送ります。送迎バスだけどね……」

苦笑しつつ一息つくと続ける。

「はい、それじゃあ、何か質問は有りますか？」

優しい眼差しで、生徒達の顔を一人一人見つめる早乙女先生。

生徒達は、ぱらぱら……と遠慮がちに手を上げ、集団下校やクラブ活動自粛の期間を尋ねたり、未確認生命体による被害を尋ねるが

「まだまだ、先生達も解らない事だらけなの……。でも大丈夫、大人の人達が頑張ってくれています。きっと、すぐに安心してクラブを楽しめるようになるわ」

と曖昧だが、心からの優しい笑顔で頷いている。まるで自分に言い聞かせる様な、そんな色の表情が見え隠れしている。

一方、生徒達の反応は十人十色だった。しかし、やはり何処か《未確認生命体》への恐怖感皆一様に、やや希薄な様だった。

彼らの生まれる前、あるいは生まれたばかりの頃の出来事だ。

無理もない事かもしれない

まどかと中沢の二人以外は……である。

いつもとさほど変わらない日常
暖かな日差し

爽やかな風

しかし、その裏側に

じつとり……

と確かに、そして常に付き纏う

閉塞感と恐怖感は、実際に体感した者にしか理解出来ないだろう。

ふと、中沢は背中に視線を感じた。

振り返ってみると、怯えて揺れる桜色の瞳……まどかの瞳と眼が合った。

中沢は努めて明るく微笑み、まどかに『サムズアップ』を贈る。

彼の気遣いに、まどかの表情の強張りが緩み微笑み返すことができた。

「さあ、みんな。もうすぐ一時限目の時間です。準備してね」

早乙女先生は軽やかに手を叩きつつ、努めて優しい朗らかな笑顔でクラスを見回し言う。

「みんな……。不安や怖い想い、つらい想いは簡単には無くせないし、忘れるなんて出来ないだろうけどね……」

あたかも、過去を振り返るように瞳を閉じて、言葉を紡いでいく。

「でも、今はまだ……みんなは、ちゃんと勉強を頑張つて、立派で素敵な大人になる事を考えてね……」

彼女は、ひとつひとつの言葉を選び、確かめる様にゆっくりと続ける。

「その間の、怖い想いや痛い想いは、先生達……大人が引き受けるから。みんなを護るから。……つて、そう言う先生だつて、そんな立派な大人かは自信無いんだけどね。うふふ」

途中で気恥ずかしくなつてしまつたのか、はにかんで微笑む早乙女先生。

「あ、護ると言えばね……」

はたと、何かに思い至つた早乙女先生の眼鏡が、キラリ……と光る。

「先生の今の『彼氏』ね……。じつは、警察官……お巡りさんなの」

内緒話でもする様に声をひそめつつも、何処か得意気な顔だ。

恋する少女の様に頬を鮮やかな薔薇色に染めて、彼女は続ける。誰も聞いていないのに……

「彼つてば、まだ二十代で……先生の方が大分年上だから、ちよつと心配だつただけだよね……。彼つて、おしゃべりだけドストゴく紳士的で、お金持ちだからガツガツして無くて、先生つてばステキだなあつてカンジだね！ でもねでもね、彼つたら、プラモ

デルとかラジコンとか、おもちゃが大好きみたいで、ちよつと子供っぽくいんだけど……先生は、そんな所がカワイイなって思っちゃって、キユンってね。キユンってなちやうの……。でもね、彼つて背が高くてムキムキで逞しいの……。先生こまつちやう！ もおつ、どくしたらイイのおく！」

恥ずかしそうに両掌で顔を隠しながら、身体をくねらせる早乙女先生。

こまつちやう！ もおつ、どくしたらイイのおく！ は、生徒達のものセリフだった。

「さて、先生はどうしたらイイでしょう？ はい！ 中沢君!!」

「え?! な? いや……」

突然の質問に息を飲む中沢

「な、なんでもイイじゃないかと。先生が、その人にしてあげたいと思う事をしてあげれば……。親しき仲にも礼儀有りとは言いますけど……。な、なんて、アハハハ」

「なるほど、その通り！ 女子の皆さん。くれぐれも『しつこい女』にならない様、注意しましょう。男子の皆さんは、そんな『しつこさ』を包み込む『懐の深さ』を持ってくださいね。先生の『彼氏』みたいに……。うっふふっ♪」

その後、朝から生徒達に少しばかり生々しい話を聞かせた早乙女 和子(34)の『おのろけ』は、一時限目 国語の担当教員 梅松 逸男(56) 通称『鬼松先生』が教室に現れるまで続いたのだった。

とここまでは、
彼らの日常が様変わりする少し前の出来事……

e x 1 : 繰り返す少女★光の戦士

暁美 ほむらあけみ ほむらは、仄暗い闇に支配された無人の立体駐車場を駆けてた。

……いや、正確には《何か》から必死に逃げているのだ。

ほむらの細い左腕は赤黒く血に染まり、彼女の《武器》である円盾は砕けて半分ほどの大きさになってしまっている。

同じく赤黒く染まった左脚は、一步ごとに大腿部の傷口から赤い飛沫を上げ、ほむらから力を奪って行く。

傷の治りが、異常に遅い……

本来のほむら……魔法少女の治癒能力ならば、常人ならば即死しかねない重傷と言えども一瞬とはいかないまでも、すぐに癒す事の出来るはずだったのだ。

痛みだけでも鈍化させる事が出来たのは、不幸中の幸いだった。常人ならば身動き所

か、痛みだけでも気絶しかねない重傷だ。

油断だった。

そう、ほむらは、してはならない油断していたのだ。

その夜、ほむらは《グリーンシード》の確保と自身の戦闘技術向上を図る為《魔女》を狩りに出た。

“事前知識”によって、その夜の標的の魔女の結界は、すぐに見つかった。

ほむらの“記憶”が正しければ標的である《宝石の魔女》は、手強い相手だが……”

今の“ほむらならば一人でも倒せない相手では無い。

いや、倒せなければいけない相手……”

そう、相手が何者であれ、“今の”ほむらは歯牙にもかけず勝利しなければならぬ。

《宝石の魔女》の結界である、夥しい数の宝石が乱雑に埋め込まれた仄暗い迷宮を進むほむら。

薄暗闇の中で不思議にキラキラ……と、宝石が空虚に光る迷宮を進むにつれて、ほむらは違和感を感じ始めた。

静か過ぎる……

魔女を護り、結界に侵入した者を狩りたてる《使い魔》達が現れない。現れないどころか、気配すら感じることができない。

しばらくして、この結界の主が座しているであろう結界の中心部にたどり着いたほむらの瞳に、異様な光景が待ち構えていた。

それは、自身の築いた結界の中ならば“絶対者”であるはずの宝石の魔女が、悲痛な叫びを上げて逃げ惑っている光景。

確かに……魔女も、その配下の使い魔も、感情や知性を感じさせる仕草や行動をとる事が有るのは、ほむらは、何度も目の当たりにしていた。

しかし、そんな物は魔女にとっては“死後痙攣”に等しい虚ろな形骸。

使い魔にとっては、獲物に不快感と嫌悪感を与え判断力を奪う“武器”であり狡猾な罠である。

そう……、ほむらは思っていた。

しかしどうだろう、いま彼女の目の前で宝石の魔女は、自身よりも一回り、二回りも小さな《何か》に、ほぼ一方的に翻られ追い詰められ、脅えて呻き泣き叫ぶ。

《何か》を、一言で言い表すならば、人型の豹。

獐猛な豹の頭を持ち、屈強な戦士の身体を持つ《怪人》だった。

怪人の顔立ちは、確かに豹の様だった。

しかし、ずらり……と並んだ牙は大型爬虫類を思わせる強靱な顎に縁取られ、その表皮もやはり爬虫類の様に細かな鱗に覆われて、のつぺり……としており体毛一つ無い。

まさに《怪人》である。

古代スパルタの戦士を思わせる真っ赤な外套、簡素な革帯に具足が、強靱な筋肉に鍛えられた怪人の肉体を更に際立たせている。

宝石の魔女は、歪んだ銀細工の両手いっぱい抱えた宝石と、不恰好な金細工の身体に埋め込まれた宝石を、惜しげも無く怪人めがけ撃ち出した。

四方八方から宝石の弾雨が、怪人に殺到する。

しかし、その弾雨を見た目通りの獣の瞬発力で怪人は、そのことごとくを躲し、一瞬よりも速く魔女との間合いを潰した。

怪人の豪腕が、耳障りな轟音を響かせて宝石の魔女の身体を、不気味に歪んだ迷宮の壁に叩き付けた。

見れば、その壁には迷宮の不自然な歪みが生み出した木の洞の様な大穴が、虚ろに口を開けていた。

怪人は、頭上に眩い光の輪を浮かべ、その怪力で魔女を洞に押し込もうとしている。

しかし、明らかに洞は魔法の身体よりも小さい。

めり……めり……と、壁の物なのか魔法の物なのか、判別しかねる湿った不気味な軋みと魔法の悲鳴にならないくぐもった耳障りな声が、魔法少女としての優れたほむらの聴覚を、否応なしに揺さぶる。

魔法は、怪人の拘束から逃れ様と手足をバタつかせるが、自身よりも細いはずの腕はビクともしない。

そして、魔法の身体は徐々に洞に飲み込まれていく。

ごきり……という、いささか陳腐だが生々しい湿った音がした。

すると、必死に洞の縁を掴んでいた魔法の歪んだ右手と、取り残された両足が、だらり……と弛緩し垂れ下がった。

宝石の魔法は、身を隠し、護ってくれるはずの、彼女自身の結界で殺された。殺されてしまった。

それは、有ってはならない事だった。

“魔法が殺された”事が無い。

“魔法が魔法の力を伴わない攻撃で、ただ物理的に破壊されて殺された”事があ

る。

戦慄だった。

ほむらは、〃繰り返す〃事で、久しく忘れていた『未知への恐怖』を覚えた。

恐怖で、ほむらの思考が麻痺している僅かな内に、魔法の身体がインクが水に溶ける様にぼやけ霧散した。

洞から黒く濁った宝石《グリーンフシード》が零れ落ちた。

宝石の魔法の魂……醜い彼女の最後の醜い宝石だった。

怪人の太い腕がグリーンフシードに伸び拾いあげた。

しばし、それを見つめると突如、怪人は大口を開け石を放り込むなり飲み下した。

ごくくり……、そんな音が、ほむらには聞こえた気がした。

宝石の迷宮が揺らぎ始めた。徐々にピントがズレる様に崩れて朽ちていく。

辺りは、瞬く間に無人の立体駐車場へと戻った。

怪人の顔が、ほむらに向かって酷くゆっくりとその巨体ごと向き直った。

仄暗い闇の中で、怪人の薄緑色に光るガラス玉の様な目が、ほむらを真つ直ぐに見つめてゐる。

『……MAGIKA……』

獣の唸りの様な低い声が、牙の間から漏れる。

怪人は、再び頭上に眩い光の輪を浮かべると、右手の平を左鎖骨から鳩尾に滑らせる
と、その右手の甲に左人差し指と中指で数字の3を描く様に動かしした。

その瞬間、圧倒的で冷徹な殺意が、ほむらの全身に突き刺さった。

殺意に晒された一瞬の刹那、ほむらは冷静さを取り戻した。すぐさま左腕の円盾を操作しつづ、今この場で使用出来て、もつとも殺傷力の優れたカービン銃《M300》取り出す。

それは、何時だったか暴力組織のアジトから拝借した品々の一つで、骨董品の部類に入る猟銃だが発射される7.62mm弾の威力と命中精度は確かな恐るべき凶器だった。

ほむらは、自身で作りに出した自分だけが動ける“停滞した時間”の中で、しつかりと地を踏みしめ猟銃を構えると、怪人の顔面に標準を合わせ引き金に指をかける。

全弾を発砲するつもりで引き金を引こうとした瞬間、怪人の身体がさらに巨大化した。

いや、ただ怪人は驚異的な瞬発力を活かし一足で、ほむらとの間合いを詰めたただだった。

そう、ただそれだけ。

ただし、それは、ほむらだけが動き考える事を許された“停滞した時間の中で”である。

容赦なく振り下ろされた五つの鉤爪が、ほむらが咄嗟に身体の前に滑り込ませた猟銃を砕き、さらに彼女の左腕を円盾ごと切り裂き、そのまま左足大腿部を大きく穿った。

ほむらは、目の前を舞う赤い飛沫と体内を掻き回す苦痛を無視し、理路整然とした思考で刹那の内に砕けた円盾の裏から、衝撃攻撃手榴弾《Mk3A2》を取出し、左足を痛めつけるのも構わず後ろに飛び退いた。

そのまま、ほむらは轟音と爆風に身を任せ、暗闇に飛び込んで姿を隠した。

……そこまで思い出して、ほむらの身体を突然の衝撃が襲い、彼女を硬いコンクリートの地面に崩れ倒れた。

どうやら、ほんの僅かな段差に、動かない左足を引っ掛けてしまったらしかった。

(情けない……！)

今の自分はまさに、その一言に尽きる。と、ほむらは唇を噛みしめる。

“繰り返し”による“事前知識”と『魔法』という圧倒的と言つて良いアドバンテージに、ほむらは無意識の内に、他者を見下していたのだ。

自分と同じような『魔法』を使う魔女や魔法少女も存在するであろう可能性を全く考えていなかった。

そもそも、何度も“繰り返し”ている事自体が、自分自身の『弱さ』の何よりの証明だというのに……。

ほむらは、手近な壁に身体を叩き付けるようにして、もたれ掛りなんとか立ち上がった。

立ち上がったほむらは、何者かの視線に気が付き顔を上げた。

暗闇に青白く浮かぶ巨大な双眸と目が合った。

(新手!?)

と、ほむらは、砕けた円盾の裏から一番使い慣れた自動拳銃《ベレッタM92F》を取出し、身体を壁で支え右手一つで構えた。

それは、生物ではなかった。赤と金色の流線型の装甲を持ったオートバイだった。巨大な双眸に見えた物は、オートバイのヘッドライトだった。

ほむらは、最初駐車場の利用客かと思つた。しかし、すぐにそれを否定した。ここは、進んだ再開発で利便性が無くなり、人が寄り付かなくなつて久しい廃墟と言つて良い場

所なのだ。

その青白い光の上に、二つの赤い光が僅かに見える。

「! ……誰?!」

オートバイには、一人の『戦士』が跨っていた。

黄金の冠の様な二本角、顔の大半を占める赤い複眼、鈍い金色の甲冑と具足を身にまとった黒い皮膜に覆われた身体の異形の『戦士』だった。

『戦士』は、銃口を向けられているにも関わらず、悠然とオートバイから降り立った。ほむらは、拳銃の引き金に指を架け、『戦士』を注視する。

少なくとも、明確な敵意は感じられなかった。が、『戦士』から先程の怪人と同じ“何か”を感じた。

と、その時である。

ほむらのもたれ掛かる壁から、ぬう……と静かに唐突に鋭い刀のような突起が生えた。

その突起は、水面を行く鮫の背びれのように、ほむらの首目がけ真っ直ぐに走る。そして、彼女の首を挟み込むように同じ形の突起がもう一つ生えた。

(あ、ダメだ……)

酷く冷静な思考で、ほむらは自分の死を悟った。

コンクリートが砕ける音と、物凄い力と速さで身体を引き寄せられた衝撃で、ほむらは我に返った。

ほむらは、自分が社交ダンスのワンシーンのような形で誰かに抱きかかえられているのが気が付いた。重力に従って垂れ下がる自分の髪が少し重い。

目の前には、大きな赤い複眼に、龍の牙を連想させる装飾の仮面があった。

それは、『戦士』に他ならなかった。

『戦士』の右足は、ほむらを抱きかかえながらも真つ直ぐに壁に突き刺さっている。

『戦士』は、ほむらを両手でしっかりと抱き上げると、大きく飛び退いた。

『戦士』は、壊れ物を扱うような手付きで、ほむらを床に座らせると彼女に背を向け、その場で両脚を大きく開き腰を落とし両手で円を描くように拳を硬く握り緊める。

柔から剛へ、動から静へ、隙のない美しい構えだった。

『…………AGITΩ…………』

穴の開いた壁の向こう側、闇の中から怒りを孕んだ唸り声が響く。

すると突如、壁に幾筋もの切れ目が入る。切れ目は亀裂に変わり、壁の向こう側から

爆ぜ、粉々に砕けた。

完成した大穴から、先程の豹頭の怪人……

神なる輝きを纏う豹にして、

勇壮なる先陣、

豹のマラーク『パンテラス・ルテウス』

が姿を現した。

ルテウスは、両手に鎌のようなしなやかな反りを持つ短剣を握り、『戦士』に向き直る。すでに、ほむらには一瞥さえくれない。

『……AGITΩ……!』

ルテウスは、再び『戦士』に向かって忌々しげに唸り声を上げた。

(アギト……?)

『戦士』の事だろうか?そんなほむらの疑問を余所に、ルテウスは両手の短剣《渴望の双剣》の刃を左右で研ぎ澄ますように擦り合わせると、文字通り獲物を狙う獣のように低く構えた。

アギトは、低く落とされた腰の高さはそのままに摺り足で、ほむらから距離を取り離れて行く。

アギトに続くルテウス。やはり、ほむらには目もくれない。

屈辱的だった。

だが、好機だとも思った。

今は、まだ意地を張る場面ではない。ほむらは、こんな所で倒れる訳にはいかないのだ。

(彼女のために……)

ほむらは、唇を噛み、拳を強く握り緊めた。

アギトとルテウス。二体の異形の戦いの火蓋が切つて落とされた。

鋭い風切り音を伴い、無数の斬撃がアギトに迫る。

アギトは、それを悉く紙一重で躲す。

躲し続けていく。

ほむらの体格では、立っている事すらままならない刃風が逆巻いている事だろう。

そんな攻撃を躲し続けるアギトの体捌きもさる事ながら、その場に“足を止めて躲す

”という選択をする『胆力』には脱帽するしかない。

アギトは、ルテウスの攻撃と攻撃の僅かな隙を……隙とも言えない“一拍”を見逃さ

ず、火薬の炸裂のような踏み込みの音と共に腰の入った鋭い中段突きを、その腹部に叩き込んだ。

ルテウスは、体勢を崩して二歩三步とタタラを踏んだ。

怪人はアギトの追撃を警戒し、崩れた体勢のまま無理矢理後ろへ飛び退いた。

しかし、アギトは追撃を掛けず、その場で悠然と構え直した。

同じく体勢を立て直したルテウスは、両腕を大きく広げ、左右の短剣の切っ先をアギトに向け、巨大な「鋏」を作り出した。

次の瞬間、ルテウスの足下の地面が碎けて弾ぜた。

アギトの命を裁ち切らんと、禍々しい神速の刃が迫る。

次の瞬間、ほむらには、アギトの右蹴り足が四本に分裂し、ルテウスを吹き飛ばしたように見えた。

アギトの特殊能力なのだろうか？と、ほむらは考える。

しかし、魔法少女としての冷静な思考が、それをすぐに否定する。

それは四連撃だった。そう、四連続の蹴りだった。

純粹に速い。本当に速い。そして強く巧み。それだけの攻撃だった。

爪先と踵で、それぞれ左右の短剣を蹴り払い、そのまま蹴り足を前蹴りに変化させ、ルテウスの鼻頭を蹴り上げ、それによってガラ空きになった喉元に足刀蹴りを突き刺したのだ。

文字通り、目にも止まらぬ早業でだ。

短剣を取り落とし、再びタタラを踏まされたルテウスだったが、なんとか転倒を踏み止まる。

『GWAAAAA!!』

ルテウスの雄叫びが、駐車場全体を揺すり震わせる。

ルテウスは、今まさに獲物に爪を突き立てんと身を低くする野獣のように、牙を剥き身構えた。

その氣勢に應えるようにアギトの金色の二本角が、羽を広げるように扇状に三対……六本角に変化する。

それと同時に、彼の足下に、その六本角を模した金色の光の紋章が出現する。

光の紋章が、アギトの両脚に渦を巻くように吸い込まれて消える。

『ハアアアア……』

アギトは、右足を僅かに後ろに下げ、力を溜めるように腰を落とすと同時に、開手にした両手を刀を鞘に納めるような仕草で、右腰に添えた。

『アアアア……』

あたかも、居合切りの構えを思わせる静かな構えだった。

睨み合う二体の異形。

先に動いたのは、ルテウスの方だった。

電光石火の突進で……

十本の鉤爪で……

純粹な暴力で……

アギトに迫る。

迫る……。

迫る。

迫る！

しかし、アギトは動かない。微動だにしない。

一足一刀。

アギトの蹴りの間合いにルテウスが入った一瞬の刹那。

アギトは、ついに一撃必殺の一刀の鯉口を切った。

『トオウツ……アア!!』

e x 2 : A G I T Ω ★ 豹群

気合一閃。

ルテウスの首が、大きく跳ね上がった。

ルテウスは、その鉤爪をアギトに突き立てること無く、彼の脇をそのまま擦り抜け、駐車場の壁に向かって一直線に突進していく。

ルテウスは、頭上に強く激しく輝く光の輪を浮かべ、壁に激突した瞬間、爆発四散した。耳をつんぎく轟音が、薄闇に支配された駐車場を揺らし、ほむらは、思わず耳を塞いだ。

アギトは、六本角を元の二本角に戻し、大きく蹴り上げていた右足を悠然と下ろした。

ほむらは、ゆつたりとした足取りで歩み寄って来るアギトを見ながら、驚愕していた。

アギトが蹴りを放つ直前、地の奥底から湧き出し、彼が取り込んだ『光』。

あの光は、間違いなく魔法少女の力『魔力』と同じ物だった。いや……、自分達が搾り出す『魂の熱を奪う』ような寒々しい力ではない。

力強い暖かな『光』だった。

「アギト……、貴方は一体……?」

ほむらは、アギトを見上げ呟く。

その時、僅かな光によって伸びたアギトの影が突如動き出し、背後から槍を手に、彼に襲い掛かった。

「……危ない!」

ほむらが思わず叫ぶ。

アギトは、電光石火の反応で振り返り、手甲の丸みを利用し刃を滑らせ打ち払う。

それは、影ではなかった。

影のように、闇のように、黒い豹。

陰鬱なる黒を纏う豹にして、

神槍の遣い手、

黒豹のマラーク『パンテラス・トリステイス』

が、『貪欲の槍』を手に襲い掛かって来たのだ。

アギトは、トリステイスの槍を受け止めながらも、ほむらを一度振り返る。

そして、槍を無理矢理掴み上げ、怪人を彼女から力任せに遠ざける。

十分に、ほむらから距離を取ると、アギトは、梃子の原理を使い、トリステイスを槍

ごと投げ飛ばした。

しかし、トリステイスは巧みな体捌きで体勢を立て直し、アギトに槍を突き立てんと連続で繰り出した。

『突き』と『引き』の繰り返しの単純な攻撃だ。しかし、そのぶん付け入る隙の無い神速の絶技。

だが、アギトは、それ以上の絶技を以って、トリステイスの隙を作り出した。

繰り出された槍の穂先を蹴足で受け止める。

鈍い銀色の脛当てと、槍の刃が火花を散らす。

アギトは、素早い脚捌きでトリステイスの槍の動きを巧みに封じ、さらにソレを大きく蹴り上げた。

素早く後退しつつ、虚空へと跳ね上がってしまった槍を力任せに引き戻したトリステイスは、その切っ先を再びアギトに向け構え直した。

しかし、既にアギトは槍の間合いの遙か外にいた。

異形の力を持つてしても、容易く……いや、不用意には埋められない巧みな距離感だ。

アギトは、トリステイスから視線を外さず、ベルトの左腰の装飾を素早く叩く。

アギトの腹部の金色の光を宿したベルトの楕円形の装飾の宝石が、強く青い輝きを放つ。

すると、その青い輝きの中から両端に金色の殻物を持った青い「短棍」が出現した。アギトは、短棍を素早く右手で引く抜きと、引き抜かれた短棍の影から短棍をもう一本、左手でずらす様に出現させると、小気味良く一回転させ構える。まるで、マジシャンのようだ。

短棍を両手に構えたアギトの身体が、渦を巻く様に波打つ。

波が納まると、アギトの姿が左右非対称に変化していた。

鈍い金色だった胴鎧の胸板の装甲が青く変化し、左腕には球状の肩当てが特徴的な青い腕鎧が装着されている。

アギトは、左腕の腕鎧で身体を隠すように左の短棍を前に突き出し、右の短棍は身体で隠すように構える。

徒手空拳の先程とは違い、やや腰の位置が高く両脚を肩幅程度に開いたのみの簡素な構えだ。

じりじり……と、円を描く様に徐々に互いの間合いを詰めていくアギトとトリスティス。

ルテウスと対峙した際とは対照的な、静かな立ち上がりだった。

今度は、アギトが先制を切った。

左右の短棍を、トリステイスめがけ同時に振るう。

しかし、それは明らかに短棍の間合いでは無かった。

(……間合いを読み違えた……?)

ほむらは、さんざん超人的な体捌きを見せつけたアギトの唐突な悪手に戸惑った。

トリステイスもほむら同様、戸惑いに動きと思考を、ほんの一瞬遅らせた。

その刹那、青い旋風が二条の金色の軌跡を描き、トリステイスの槍と胸板を、ざっくり……と切り割った。

ばあつ……と、トリステイスの胸板から仄黒い体液が吹き出し不気味な花を咲かせた。

そして、やや甲高い音を立てて三つに断たれた槍の破片が転がる。

苦痛の唸りと体液を辺りに散らして、トリステイスは素早く後退する。

見れば、アギトが左右に持つ短棍が二倍ほどの長さに、そして両端の金色の殻物は鋭い刀身形の穂先に変化していた。

絡め手も「お手の物」というわけらしい。

左右二本の双頭の薙刀を軽々と片手で操り、アギトは再び左肩を前に、右の薙刀は巧

みに身体で隠しつつ、ゆっくりと左の薙刀の切っ先をトリステイスに向ける。

アギトが、再び先制を切った。

金色の軌跡がトリステイスに迫る。

薙刀の一撃を、槍の残骸で巧みに受け止めたトリステイスにだったが、アギトの攻撃は一撃では終わらない。

一撃が二連撃。

二連撃が四連撃。

四連撃が八連撃。

アギトの薙刀は、一閃ごとに速度と鋭さを増していく。

まさに、疾風怒濤。

四筋の金色の軌跡を描く青い竜巻が、トリステイスに容赦無く襲い掛かる。

トリステイスの穂先と僅かな柄しか残されていない槍だけでは、アギトの連続攻撃は捌き切れないのは明白だ。

すでに、トリステイスの身体には、無数の斬り傷が出来ている。

(もう勝負は着いた……)

ほむらが、そう思った瞬間である。

ひょうつ……と、鋭い風切り音が。ほむらの鼓膜を震わせるた。

一条の矢が、暗闇の中からアギトの眉間めがけ迫る。

アギトは、神速の薙刀捌きで矢を危なげなく切り払う。

トリスティスを右手の薙刀で牽制しつつ、アギトは矢が放たれたであろう方向に視線を走らせる。

その視線の先で、雪の様に青白い豹が、ぬるり……と、闇の中から溶け出る様に姿を現した。

清廉なる白を纏う豹にして、

静かなる射手、

雪豹のマラーク『パンテラス・アルビユス』

が、薄暗闇の中で青い外套を翻し、携えた大弓《傲慢の弓》に矢をつがえアギトめがけて引き絞る。

神速で放たれた矢は、吸い込まれる様にアギトの甲冑の隙間に迫る。

しかし、やはりアギトは危なげなく薙刀で矢を弾く。

だが、そんなアギトの死角からトリステイスが刃を振りかざし襲い掛かる。

その刃を素早い脚捌きで回避するアギトだったが、今度はアルビユスの矢がアギトの背後を襲う。

左手の薙刀を振るい、またも矢を弾くアギト。その矢を弾いた瞬間の身体が硬直した僅かな隙に、トリステイスが付け入る。

素早い場所取りと阿吽の連携で、アギトの死角と隙を作り出し攻め立てるトリステイスとアルビユス。

形勢逆転。アギトは、防戦一方に追い込まれた。

ほむらは、無言でベレッツタを構えた。

このまま逃げる事も考えたが、“彼ら”はここで倒しておくべきだ。

一瞬の思惟の後、アルビユスの顔面めがけ、素早く三回引き金を引いた。

魔力を、紙を丸め鋭く尖らせるイメージで練り上げ、ほむらの、込められるだけの力を込めた渾身の9mm弾が怪人へと走る。

しかし、ほむらの魔力はアルビユスの身体を覆う“何か”によって霧散し、弾丸は彼の目の前でびたり……と空中で冗談のように静止した。

ほむらは、驚愕する。が同時に反射的に再び三回発砲した。しかし、その弾丸もまた

同じようにアルビユスの身体の数cm手前で静止してしまう。

弾丸が砕け、水に溶けて消えるように霧散した。

一瞬動きを止めたアルビユスの闇の中で薄緑色に光る眼が、ほむらを一瞥する。が、すぐに視線をアギトへと戻し、再びトリステイスと共に攻め立て始めた。

(バカにして……！)

ほむらの麻痺して久しい心に怒りの炎が灯る。無視された事にはない。アルビユスの眼に、一瞬の刹那宿った「哀れみ」の色が気に入らなかった。

ほむらは、盾の裏からもう一つ武器を取り出した。

「少しの油断が命取りなる」今し方、彼らの仲間にも教えてもらったばかりの事だ。ならば、自分からも教えてやろう。

戦いの場では、誰もが誰かの《死神》になる可能性が有る事を。

そう、例えば「仲間同士」でも……

「友達同士」でも……

「親友同士」だって……

『弱い』と見下して「真正正銘の敵」を生かしたまま放置した事を後悔すると良い。

ほむらは、アルビユスの肩甲骨が異様に盛り上がった不気味な背中めがけて、再びべ

レツタを左手で発砲した。

重傷を負っているにも関わらず、弾丸は正確にアルビュスを捉えている。

しかし、やはり“何か”によって防がれてしまう。

アルビュスは、攻撃されているにも関わらず、もう彼女を一瞥すらしない。

(そうやって、そのまま余所を向いていなさい……)

ほむらは、右腕で構えた“本命”をアルビュスの無防備に晒された背中に容赦なく発砲した。

“本命”は、アルビュスには命中せず彼の足下で“発火”した。

ほむらの武器《21.5mm信号拳銃》から発射された火球……夜間用星弾が、何万カンデラもの強烈な光がアルビュスの視覚を一時的に奪い、その動きを封じた。

照明弾の熱と衝撃は、アルビュスの“何か”に阻まれ、その身体を傷付ける事は出来なかった。

しかし、光までは、そうはいかなかった。

アルビュスが、苦悶の呻きを上げた。

『ハアアアア……』

ほむらの作り出した逆転の好機を、見逃さないアギト。

『……ツトオアアア!!』

アギトの気迫と共に幾筋もの金色の閃光が青い旋風を伴い、トリステイスの闇の様に黒い身体を貫いた。

『……AGITΩ……!』

トリステイスが僅かに身動きした次の瞬間、彼の身体は思い出したかの様に夥しい体液を噴き出した。

『……AG、I……!!』

トリステイスは、頭上に激しく輝く光の輪を浮かべながら、アギトめがけて槍の残骸を全力で振りかぶる。

『……T、Ω……!!』

しかし、そのまま崩れ落ちる様に背中から地面に倒れ伏し、轟音と共に爆発四散した。

噴き上がる火柱を、一瞬見上げる ほむら。そして突然、耳元で響いた硬い音に我に帰った。

見れば、赤く汚れたベレッタが目の前に転がっていた。

左手の感覚が麻痺している。動かそうと思えば動かせるが、全くその感覚が伝わってこない。

ほむらは、その『不安』や『恐怖』を“些末事”と無視し、すぐさま信号拳銃を放り捨て、右手をベレッタに伸ばす。

ほむらの細い指先が僅かに触れた瞬間、ベレッタは青白い大きな脚に粉々に踏み砕かれた。

見上げると、妖しい薄緑色の双眸と目が合った。

パンテラス・アルビュスが、音も無く刀の様に鋭い大弓を掲げ、特に何の感慨もない表情で……いや、やはり何処か憐れむ様に、ほむらを見おろしている。

『……MAGIKA……』

既に、アルビュスの優しげですらある視線と殺意……刃は、ほむらを完全に捉えている。

力を込めずとも、彼が刃を首筋に滑らせれば“自分は死ぬ”。

ほむらは、アルビュスを睨む様に見つめ返した。

(……“みんな”は、“彼女”は、もつと苦しかったはず……怖かったはず……。私は、これくらい……こんなことくらい……！)

ほむらには、アルビュスが酷くゆっくりと刃を掲げた様に見えた。

ついに、アルビュスの殺意が彼女に振り下ろされ……

……なかつた。

甲高い金属音が響く。

ほむらの左右の視界の端を、アギトの短棍とアルビュスの弓が、からから……と転がり滑って行く。

「アギ、ト……！」

『……AGITΩ……！』

背を向け、右腕を振りぬい姿勢のまま背中を見せているアギトが、ゆつくりとアルビュスに向き直る。

ゆらゆら……と揺らき燃えるトリステイスの命の残り火を背に、アギトの複眼が赤く……火焰よりも赤く、赤く輝く。

左手に残った薙刀を、地面に突き立て放すアギト。

そんな、彼の胴鎧の色が青から金へ、左腕の腕鎧は消え、金色の左右対称の姿を取り戻した。

『何処を向いている……？ お前の相手は、その娘じゃないはずだ……』

若い男の声だった。……錆びが浮いた様に、泣き疲れた様に、枯れた低い声。

『違うはずだ……。俺のはずだろう？』

アギトは言いつつ、腰を低く落とし、両腕で大きく円を描く様にして両拳を、強く強く握り固める。

『……AGITΩ……!!』

低く唸り、アルビュスはアギトを真っ直ぐに睨み付け向き直る。

『そうだ！ 俺だ！ 《AGITΩ》だ!!』

『AGITΩ!!!』

アルビュスの咆哮。

青い外套を棚引かせ、アギトに突進する。

迎え討つアギト。鋭い踏み込みから左右の手刀の連携を、アルビュスめがけ放つ。

しかし、左右の斬撃は虚しく空を切る。

アギトの頭上を、アルビュスが宙返りで飛び越える。そして、巨体に似合わぬ驚異的な体捌きで、その背後を盗った。

アルビュスの両掌に虚空から矢が現れる。

それをアギトの首筋に突き立てんと繰り返し出す。

一瞬よりも……刹那よりも……さらに速く、アギトは振り返った。それと同時に、ア

ギトは身体を大きく沈み込こませる様に踏み込み、アルビユスに肉薄する。

アルビユスの矢尻が、アギトの仮面を掠め僅かに傷を付ける。

アギトの渾身の踏み込みによって威力の増した右正拳が、アルビユスの腹部に叩き込まれた。

『ハアアアアアッ!!』

アギトの攻撃が止まらない。連続で繰り出される拳が、次々にアルビユスの身体に突き刺さる。

最後に、アギトはさらに腰の入った正拳を叩き込んだ。

身体を、くの字に曲げ吹き飛ばされるアルビユス。

苦しそうに呻き、膝を突くアルビユスだったが、すぐに立ち上がりアギトを睨み付け弱みを見せない。

アギトの二本角が、再び翼を広げる様に六本角に変化する。

そして、浮かび上がる光の紋章。

雄々しい力強い金色の光を、アギトは両脚からその身に取り込む。

『ハアアッ……アアアア……』

ゆつくりと左脚を後方へ、力を溜める様に腰を低くしていく。

刀を鞘に納める様に、左腰に添えられた左開手に右開手を重ねる。

先程とは、左右逆の構えだ。

『トオウツ!!』

アギトがアルビュスに向かって駆けて飛ぶ。

その瞬間、彼を縛る重力が消失した。

金色の閃光が一直線に闇を切り裂て飛翔する。

『アアアアアアッ!!』

全身の力を、『光』……『魔力』を、込められる力という力を右蹴脚に込め、アギトはアルビュスの胸板で炸裂させた。

世界全体を揺さぶったのではないかと錯覚させる、轟音が低く響き渡る。

静かに降り立つアギト。

そして、アルビュスは、がりがり……と足下の地面を削り砕きながら、凄まじい勢いで立った姿勢のまま吹き飛ばされる。

苦痛の呻きを漏らしながらも、アルビュスはアギトを睨み付け、再び虚空から矢を出現させむしり取り構える。

しかし、当のアギトは、着地した姿勢のまま動かない。

『GAOOOO!!』

アルビュスは、力を振り絞るように吠え、アギトに突進する。

しかし、やはりアギトは動かない。アルビュスを見てすらいない。

ほむらが、思わず息を飲んだその時だった。アルビュスの頭上に激しく輝く光の輪が

出現し、怪人は前のめりに崩れ落ちた。

アギトは、アルビュスの命の炎が激しく燃え上がると同時に、残心をきるように炎に

背を向けた。

いささか“カツコつけ”が過ぎる。

ほむらは、思わず苦笑した。

しかし、ここまで徹底的に“カツコつけ”られたら本当に……

「カツコいい……」

そう思う他ない。初めて“彼女たち”を“彼女”を見た瞬間の純真な気持ちと、悲痛な過去という形以外で思いついたのは、久しぶりの事だった。

そんなに昔の事ではないのに……、本当に懐かしい……。

と、そこでほむらは、自分が酷く眠い事に気が付いた。気が付いてしまうと目蓋の重

さに耐えられない。

視界が、急激にぼやけて暗くなる。

がくり……と、ほむらは、身体の力が抜けるのを感じ、アギトが駆け寄って来るのを、はつきりとしめない視界で見つめながら瞳を閉じた。

人の気配を感じる。たぶん女性。自分とそう変わらない年頃の少女だ。

『気が付いたあ？ アナタの“穢れ”は、私が全部持つていくけど……怪我のほうはそうはいかないわ。自分で治してね。頼りない先輩でごめんなさいねえ』

重い目蓋をなんとか開けると、煌びやかな宝石をちりばめたペルシア風のローブを纏った少女が、こちらを見て、あっけらかんと笑っていた。

ハッキリ言つて、豪奢だが嫌味の無い美しい衣装と話し言葉が合っていない。

ほむらは、違和感を感じずにはいられなかった。

『あつと、もう行かないと。せつかく正気に戻ったんだけど……うん、よし！ バイバイ、後輩ちゃん♪ アナタは、なるべくゆっくり来るように！ あはは……』

少女は、無遠慮にほむらの頭を撫で回すと、最後に少しだけ淋しそうに笑つて、星屑のような光の粒に変わると溶けるように消えてしまった。

そこで、ほむらは目を覚ました。

跪いたアギトが、黒く染まったグリーンフィードを持ち、静かにほむらを見詰めていた。腕と足の傷には、白い包帯が巻かれている。アギトが、どこかから持つてきて応急処置をしてくれたのだろう。

「ここにもう一人、居たわよね……？　彼女は……う？」

と、ほむらは思わず言った。

『……もういない』

アギトは、手の平のグリーンフィードを一瞥してから、首を横に振った。

「……そう……」

ほむらは、魔女の事……自分たち魔法少女の事を「再認識」した。

それを嘖みしめる様に、彼女は瞳をもう一度閉じた。

アギトが立ち上がり自分から離れて行くのを感じた。

ほむらは、慌てて身体を起こし、彼の背中に疑問をぶつけた。

「アギト！……あなたは……なに？」

ほむらの声に歩みを止めたアギトは、しばしの思惟の後、首だけでほむらを見つめ

……

『味方……、味方だよ。キミの……、キミ達のな。通りすがりのね……』

錆びついた声で、彼女の質問に応えた。

そして、彼は右掌の中のグリーンフシードを強く握りしめた。
アギトは右腕を振るうと、星屑の様に無数の光の粒が闇色の空に小さな橋を一瞬作つて、夜風に溶けて消えた。

ほむらは、その光景に一瞬目を奪われ、名前も知らない「彼女」の冥福を祈った。
気が付くと、アギトは既に悠然とオートバイに跨っていた。

待ち構えていたかの様に、エンジンが唸りを上げる。

そして、しばしアギトは、ほむらを見つめた後、颯爽と車体を発進させた。

軽快なエンジン音と共に、アギトは夜の闇へと、その姿を消した。

こうして、繰り返す少女は光の戦士と出逢った。

戦士の《光》が、少女の道程を助ける《輝き》となるのか？

それとも、ただ惑わせるだけの《蜃気楼》となるのか？

それは

《神》にも……

《悪魔》にも……

解らない……

e x 3 : 捜査開始★鋼鉄の騎士団

中沢 元国が、まどかと彼女の家族と共に、完全にアウエーかつ土壇場でピッチに上がる万年控えの新人サッカー選手の様な心境で朝の食卓に付き、緊張で全く味覚が働かないコンディションでチョロいハチョロいなりに奮戦し、持ち前の不屈の粘りで、地味ながらも見事な

《Own☆Goal!!自殺点》

を決めまくっている……

ちようどそんな時、鹿目家の前を青と白のツートンカラーの四輪駆動車が安全運転で横切つて行く。

車体上部の赤色回転灯、フロントの桜の代紋、車体左右側面の『POLICE』の文字から、この四駆が一眼で警察車両だという事がわかる。

しかし、この四駆は一般的な警察車両とは少し様子が違うようだった。

車両の各部には、青い縁取りの中で桜の代紋を掲げるように高々と広げられた白い翼に『MDP SAUL』の白文字が重なったエンブレムが描かれている。

この車両は、

警視庁 未確認生命体対策班 (Squad・Against・Unidentified・Lifeforms)

通称『G3―Unitジースリー―ユニット』にあてがわれた車両であった。

そして、その内には五人の隊員が乗り込んでいる。

実直そうな顔付きの身体の大きな男性隊員がハンドルを握り、助手席では小柄な女性隊員がノートパソコンを忙しなく操作している。

後部座席には、やや寿司詰め状態で三人、男性隊員が仲良く(?)座っている。

やはり、三人とも窮屈なのか複雑な表情だ。

左の窓側に座る、いかにもキザなお坊ちゃんという雰囲気 of 隊員《ミドリ》警部補が、面倒くさそうに誰に聞くともし無しに呟く。

「爆発事故だった? それで? なんて俺たちなワケ? しかも土曜の朝に……ねむスギ……」

アクビを一つして、窓の向こうの景色を意味も無く眺めるミドリ。

そして、アクビをまた一つ。

「正確には、それなりの規模の爆発事件だ。場所は、何年も前に潰れた小さなシヨツピングセンター……今は廃材置き場だが……。つまり、廃墟だ。火の気どころか、爆発物の類は無い場所だ。誰かが『起こした』事で、まず間違い無い……」

右の窓側に座る、長身瘦躯の獵犬の様な鋭い眼差しの隊員《アオイ》巡査部長が抑揚の少ない声で、同僚の間違いを補足訂正する。

几帳面な性格の様だ。

「うーん……なるほど。やっぱり、また何処かの作業員かな？ それとも思想犯？ 俺、苦手なんだよなあ……。なんかスゲエやりツライんだよなあ……」

アオイとミドリに挟まれる形で、文字通り肩身の狭い想いをしている中途半端になつてしまった茶髪で、人の良さそうな隊員《アカギ》巡査部長が、眉を歪めて憂鬱そうに呟く。

「そういう連中が好きなのがあるものか。なににしろ、俺達の仕事は《敵》の排除だ。相手が未確認だろうが、テロリストだろうが関係ない……」

物騒な事を当然の事のように、抑揚の少ない声でアオイは吐き捨てる。

「なんで、そんな言い方するワケ？ 実に、イヤな奴だなあオマエは。そんな事より、もつと建設的な話をしようじゃないか？」

実に爽やかな口調で暴言を吐きつつ、アオイに笑い掛けるミドリ。

「俺の『友達』の話なんだけどき……、カワイイ系の顔の学校の先生の飲み屋でひっかけたワケ。絶対年下だと思ってたんだけど、実はそのコ、そいつより五歳も年上で、もう三十代でさあ……。騙された〜！ って感じなワケ。で、オマエらどう思う？ ソイツは、しばらく遊んでから適当にサヨナラすべきだと思ってるワケ……」

深刻そうに頭を抱えるミドリ。

しかし、眼は何処かニヤけている。

「正直、俺には、お前の『友達』とやらが、何をどう問題視しているのかが解らないのだが……。しかし、その『友達』とやらが、男として最底辺の人間だという事は解った」「そうだよなあ……。良い人で、キレイな人なら、少しくらい歳が離れててもイイじゃないか？ そいつゼータクな奴だなあ……。くそう、転んで膝とか擦り？ けろ……」

軽蔑の色を含んだ瞳で、同僚を横目で見やるアオイ。

実に不思議そうな顔をしてアオイの意見に頷いた後、本当に悔しそうに拳を握るアオキ。

と、その時、車両が丁寧なブレーキ操作で、ゆっくりと停車した。

「皆さん、着きました。現場です……」

運転手を務めていた男性隊員『白鳥沢 恵実しらとりざわ めぐみ』巡査が、体格にそぐわない小さな囁く様な声で告げた。

「さあ、みなさん！ お仕事ですよ！ 今日も張り切って行きましょう!!」

助手席の女性隊員『柳田 理科やなぎだ りか』警部が、ノートパソコンを小気味良い音と共に閉じると、一番に車両から飛び降りる。そして、小さな身体を元氣一杯に動かして愛すべき部下達に手を振る。

「なんで、リカちゃん……。あんなテンション高いワケ？ 朝っぱらから……」

「恐らくは……。体温が高いんだ。それに、子供は総じて血圧が高い」

やつとの事で、窮屈な車内から抜け出したアオイとミドリは、長身をダルそうに伸ばしつつ、ちっこい上司を眺めて軽口を叩き合う。

「オマエらな……。失礼じゃないか？ 確か柳田さんって、もう三十後……は……」

最後に降りてきたアカギが、苦笑気味に同僚たちを嗜める様とするが、突然の奇妙な圧迫感に押し黙る。

見れば、柳田警部が可愛らしく微笑み手招きしている。凄まじい圧迫感を発しながら手招きしている。

愛すべき部下であるはずのアカギを呼んでいる。

「つ……！ お、おいおい！ なにやっつてんだオマエらあ！ 無駄口叩いてるヒマ有ったら走れよ！ 事件は会議室で起る事もあるけど、今は現場で起きてるんだぞ!! 『時はかけなり』なんだよ!!」

アカギは慌てて制帽を被って手袋をはめると、先陣を切って事件現場に駆けていく。「それを言うなら、『時は金なり』だ……」

「それだと、ラベンダーと甘酸っぱい青春の香りして来そうなワケだが……」

「アカギ君は、いつも元気でヨロシイですね。私達も見習って、張り切っていきましょう！」

アカギに続き、「まだまだ」三十代前半の柳田警部、アオイ、ミドリ、白鳥沢巡査は、非常線テープの前に移動する。

隊員達は、現場を保全すべくテープの前に立ち眼を光らせる警官達と敬礼を交わすと、テープをくぐり廃材置き場に踏み込んだ。

「あ、ああ……。俺、昔ここに来た事ある。そうか、潰れちゃったのか……」

「そうなんですなあ……」

辺りを見回して寂しそうに呟くアカギ。そして、そんな彼に同調して柳田警部もまた、寂しそうに辺りを見回す。

「……気持ちわかるが、今は仕事に集中しろ」

「まったく、お二人さんはナイーブだなあ。また今度、デパートの屋上のソフトクリーム、ごちそうするからさ。お仕事がんばろうな？」

気付かっているのかいないのか、判断し難い抑揚の無い声のアオイ。そして、気付

かっているのかいないのか、判断し難いほど優しい口調で前髪をを掻き上げるミドリ。なんとなく緊張感に欠けた事件現場の雰囲気にとぐわらない会話を繰り広げる隊員達に、タヌキの置物を彷彿とさせる恰幅の良い壮年の男性が、のすのす……と近づいて来た。

背広に白手袋、彼もまた警官だ。

「おう、おまえら。よく来た、よく来た。訓練、訓練でキツイだろうに悪いなあ？」

警官は、気さくな敬礼をしつつアカギ達に笑う掛ける。

「スギさん！」

人懐っこい笑顔でアカギは、警官に駆け寄る。

「杉浦警部だ。馬鹿が……」

呆れたアオイのため息が一つ。

馬鹿呼ばわりされたアカギは、アオイに非難の眼を向けるが、柳田警部を始め同僚達が姿勢を正すのを見て自身も慌てて姿勢を正す。

『G3—Unit』第202小隊 見滝原出張所 柳田 理科、以下四名。只今到着しました！」

普段の間延びした子供のような声と喋り方は何処へやら？

柳田警部は凜とした表情と声で名乗り上げ、杉浦警部にお手本の様な敬礼を送る。そ

れに倣い、アカギ達も整列し敬礼する。

「ん。ご苦労……」

顔を引き締めた杉浦警部も、年季の入った敬礼で『G3—Unit』の敬礼に応える。
「……早速ですが、杉浦警部。どうして私達は、呼ばれたんですかあ？」

長くは保てないらしく、柳田警部は元に戻ってしまった声と喋り方で、杉浦警部に質問する。

「ああ、まあ……なんつうかな……」

杉浦警部は、何やら言いにくそうに無精髭を大きな手で撫でる。

「後で資料にして、お前等んとこに送っても良かったのだが……。だが、対策班の誰かに一度直接見てもらったほうがイイんじゃないかと思つてなあ」

やはり要領を得ない……

しかし、当の杉浦警部は、一人で納得して頷いている。

「なんか良くワカンナイけど、とにかくにも見せて貰いましょうよ？ その方が早いですよ柳田さん」

アカギは軽い調子で、柳田警部を促す。

「そですねえ。『百聞は一見にしかず』ですもんね！」

学生同士の様な二人の能天気なやり取りに、頭痛を覚えるアオイを余所に『G3—U

nit』は、問題の爆発地点へと案内された。

その道すがら、事件のあらましを聞く。

それは、こうだ……

昨夜19時30分ごろの事。

この近辺を寝床にするホームレスの男が、この廃材置き場の前に差し掛かった時、断続的に響く大きな破砕音と獣のような唸り声と咆哮を聞いたと言う。

恐ろしくなった男は、すぐにその場を逃げ出したのだが、そして、そのすぐ後に廃材置き場の上空に火柱が上がると共に物凄い爆発音が轟き、しばらく後に黒い四足動物の様な《何か》が、ピンク色の頭の子供らしき者を乗せて住宅地の方に飛び去った。

という事だった。

爆心地に近付くにつれ、異様な光景が、『G3-Unit』の眼に徐々に飛び込んでくる。

痛んでいるとはいえ硬いはずのアスファルトやコンクリートの地面を踏み砕いて、無数に口を開けた足跡。

コンクリートの瓦礫や錆びた鉄塊、分厚いコンクリートの壁に、無数に打ち込まれた拳と蹴りの跡。

見事に、くの字折れ曲がった鉄骨。しかも、一つや二つでは無い。綺麗に輪切りにされたドラム缶に鉄柱、コンクリートの柱。皆、切り口は信じられない位に滑らかだ。

凄まじい状況だった。

誰の眼から見ても、『普通の』爆発事件では無い事は明らかだった。

「アオイ！ ミドリ！ これって?!」

息を飲んだアカギは、同僚二人に慌てて振り返り叫ぶ。

「ああ、似ている………な」

「ハッ………あくあ、一番メンドくさいパターンかあ………?」

アオイは無表情でただ頷き、ミドリは苦笑いと共に憂鬱そうに朝の空を見上げた。

「やっぱり似ているだろう? その………」

杉浦警部は何事かを確信しつつも、縋る様に『G3—Unit』達の顔を見回す。

老獪なはずのベテラン刑事の瞳に、怯えとも焦りとも付かない複雑な色が見え隠れしている。

「未確認………生命体………?!」

柳田警部の少女の様にか細い声が、妙にその場に響いて聞こえた。

今『G3—Unit』達の目の前には、やはり、
“只の爆発事件の現場”では無い光景が有る。

映像資料や現場写真、詳細な報告書そして訓練用VRヴァーチャル・リアリティシミュレーションの中で嫌と言うほど見せられ感じ取った光景に、似ている……とてつもなく良く似ている。

十四年前、多く笑顔と尊い命を奪い取った

《未確認生命体事件》

において

《第4号》と《グロンギ》が戦いを繰り広げた後……

の状態にである。

『G3—Unit』の本来の任務である

“再来した《未確認生命体 グロンギ》と戦い、それを殲滅する”

という任務を果たすべき時が……来るべきではない時が、この瞬間ついに、来てしまったのかも知れなかった。

とにかく、何をどう判断するにしても、まずは『情報』が必要だ。

隊員達は実際に自分達の眼で、現場を見て回る事にした。

地味な事だが、こうした『情報』の地道な積み重ねが《神経断裂弾》《対未確認生命体用ガス弾》などの武器を人類にもたらし、《未確認生命体事件》を終結に導く一因になったのだ。

決して、たった一人の《英雄》の力だけが《未確認生命体》を退け、《みんなの笑顔》を護ったわけでは無い。

今ある平和は、あの戦いを戦った全ての者達……《英雄達》の掛け替えのない大切な贈り物なのだ。

今度は自分達も護る……

そんな思いで、隊員達は捜査にあたる。

アカギは、見事に切断された鉄骨やコンクリートの瓦礫の断面を注視する。

まるで研磨されたかの様に滑らかな切り口だった。

『G3』の専用兵装の一つであり、理論上では地上のありとあらゆる物質を切り裂く超高周波ブレード《GS-03 デストロイヤー》を持ってしても、ここまで見事な切り口には出来ないだろう。

これだけでも「敵」の恐るべき戦闘能力が窺い知れる。

つまり「敵」は、高周波ブレード以上の切れ味の武器を『G3』以上の速さで、あるいは複数同時に振るうという事なのだろうか？

やはり《未確認生命体》の仕業なのだろうか？

もしくは、ソレ以上の《何か》……

「くそっ……！ なんなんだ？ せつかくの平和だぞ？ 大人しくしててくれよ……」

蘇えるのは十四年前の記憶

あらゆる意味で無知で、あらゆる意味で無力な少年時代に目の当たりにした悪夢の記憶

賑わう地下商店街

妹の誕生日 笑い合う自分達家族

笑顔の妹 釣られて笑う自分

突然の轟音 身体を芯ごと揺さぶる轟音

響き渡る悲鳴 現れるのは猛牛の角と人の身体を持った悪魔

そして振り下ろされる豪腕 舞い散り咲き誇る赤黒い無惨な花々

妹を抱きかかえたまま吹き飛ばされる母 殴り潰される父

悪魔
無惨に潰れた父の下敷きになり倒れる自分 満足そうに自らの拳を撫でほくそ笑む

そして悪魔は拳をさらに赤黒く染めて屍と赤の海の中を行く その後を無感情に付き従う幽鬼の様な白い外套の男

徐々に温もりを無くしてゆく父の身体 視界の端でぴくりとも動かない母と妹 赤と痛みに染まり薄れてぼやける自分の感覚

立ち止り振り向く悪魔

自分に気が付いた

まだ生きている自分に　まだ生きていたい自分に

そのときこえた音と声　今でもはつきりと思い出せる命の恩人の足音と掛声

悪魔の物とは違う軽快な足音　雄々しく勇ましい掛声

煌めく金色の二本角

赤い炎の灯った複眼

さらに赤く燃える様な甲冑

現れた《英雄》

『ツオリヤアアア!!』

地下街を揺さ振る気迫の声

(落ち着け! もう「俺」は、あの頃の「オレ」じゃない……)

過去へ飛び恐怖で停止しかけた思考を、アカギは頭を振るって呼び覚ます。

(俺には仲間もいる……!)

アカギは過去の恐怖と不吉な予感振り払うため、同僚二人を仰ぎ見た。

アオイとミドリは、肩を並べ爆心地にいた。

痛んで碎けたアスファルトに、ぽっかり……と口を開けた歪なクレーターを二人は観察している。

「二種類の足跡が有って、爆発が有った……って事は、少なくとも一匹は確実に片付いてるってワケだ。やつぱ《4号》大先生のご活躍かあ? ハッハッハッ」

「かもな……。もつとも、倒した方が俺達の《味方》とは限らないし、まだ《未確認》と決まったわけじゃない」

「イヤな事言うヤツだな……」

顎をなでつつ、皮肉気な口調で笑うミドリと、無表情で跪きクレーターや踏み砕かれ出来た足跡を観察するアオイ。

「爆発の規模からすると、『ズ』か『メ』……かな？ まあ、許容範囲だな。『ゴ』じゃないのは不幸中の幸いだな？」と言つても、面倒なのは大差ないワケなんだけども……」
 軽い口調で不敵に笑うミドリ。

アオイはゆっくり立ち上がると、そんな同僚を冷めた瞳で一瞥すると

「幸い？ 何を馬鹿な……。『ゴ』よりも、大勢の人を手に掛けた『ズ』や『メ』もいる」と、同僚に対してか未確認に対してかは判然としないが、忌々しげに吐き捨てつつ立ち上がり続ける。

「個体の強さは問題じゃない、強かろうが弱かろうが、何もさせない。何かする前に……」
 “殺す”……それだけだ」

「ふっ……そうだったな。ワルいワルい、そう睨むなつて」
 怖い怖い……と、ミドリは肩を竦める。

しかし次の瞬間には、特に気にした様子も無く、気安く同僚と肩を組み笑う。

「まあ、せいぜい後悔させてやろうぜ？ 『やめときや良かった！』つてさ、俺達G3

—Unit”の手でもつて……」

「……ああ、そうだな。そうする事にしよう」

ふてぶてしい軽薄な笑みの裏に、嗜虐的で冷酷な色を浮かべたミドリは拳を握って胸を軽く叩く。

そして、アオイもまた冷徹な瞳の奥に、憤怒の炎を灯して同僚の言葉に頷いた。

「しっかし……。こんなに吹っ飛んじまったら、細胞サンプル一つ手に入れるのも一苦労だな？　これはもう鑑識課の皆様方に足を向けて寝れないな」

廃材置き場を見回してミドリは笑った。

細胞の一欠片でもサンプルが手に入れば《敵》の正体はもちろんの事、弱点、独自の習性や行動パターン、効果的な攻撃方法、などを割り出せる。

そうした、とるに足らない些細な情報でも、いざ必要になった時《既に知っている》と《何も知らない》では、全く違ってくるのである。

しかし、そうそう上手く事が運ばないのが、『世の常』らしかった……

「いくら探しても見つからない?!　なんでですか!？」

驚いたアカギは、思わず柳田の両肩を掴み詰め寄る。焦っているのか、ずいぶん両者の顔が近い事に気が付いていない。

「わ、解りませんよお……。建物の中に二人分の痕跡《消した跡》が見て取れたらしいんですから……。ここに誰かがいて、何かが有ったのは確かみたいなんですけど……」

心なしか頬が赤い柳田は、思春期の少女の様にしどろもどろに答えた。

「でも、《敵》の方は、まるで……その……”初めからいなかった”みたいに……」

顔を赤らめながらもアカギを見つめ返し、柳田は事実を伝える。

「死んだ後どうなるかは、あまり興味が無いな。《第43号》の様に深刻な被害が予想されるなら別だが……」

「イヤな言い方するヤツだな……。しかし、なるほど、まさに《未確認》ってワケね」

無表情で不穩かつ冷徹な事をためらい無く口走る同僚に、ミドリは顔を引き攣らせつつ、指先で顎を撫でながら呟く。

「いや……むしろ、今はまだ《Unknownアンノウン》とでも呼ぶべきだろう」

アオイの冷めた瞳と呟きに、不安を駆り立てられた隊員達は、しばらく沈黙する事しか出来なかった。

「ハッ……正体不明に目的不明、オマケに国籍不明で《アンノウン》ってワケ？ 上手い事言うじゃないの？ ハッハッハッ……いや、笑うほど面白くないし、笑い事じゃないんだけどな……」

重苦しくなり始めた沈黙を払拭するためか、からかう様な口調と表情でミドリはアオイと気安く肩を組む。

「目的不明……か、本当にそうかなあ？」

アカギは、《アンノウン》と《もう一体の何か》が踏み抜いたであろう地面を見回し首を捻る。

「何に気が付いた？」

特に驚くでも馬鹿にするでも無く、自然に同僚の言葉の先を促すアオイ。

「なんて言うかなあ、まあ『カン』なんだけどさ……」

しかし、こう言い出した時のアカギの『勘』は、侮れない物がある事は隊員達は理解していた。

踏み砕かれ出来た足跡をたどり歩くアカギは、立ち止りゆっくりと右足を抱え込む様に持ち上げ前に突き出す、次いで軸足の左足を九十度ひねり、右前蹴りを後ろ蹴りに変化させ、さらに蹴り込む。

その蹴り足の先には、クレーターが口を開けている。

アカギは、静かに足を下ろすと同僚達に向き直る。

「少なくとも、俺は……この蹴りを放った方の《奴》は、悪い奴じゃない。必死だった……ホントに、ただ一生懸命だったんだと思う」

不思議な説得力を持った真つ直ぐな眼差しだった。

「……いや、ホントもう、めちやくちや《カン》なんだけどさ。アハハハ……」

若干、逃げ腰なのはご愛嬌。

「なるほど……」

「なるほど、なるほど……」

アカギの言葉を各々が独自に受け止め頷き合う隊員達。

そして、ミドリが肩を竦めつつ笑いながら首を傾げる。

「わあい。『楽しいアカギくん☆ワ〜ルド』は、毎回……おつもしろいなあ。だがしかし、カツコよさげなのは結構なんだけど、だからなんなの？ って、既に薄汚れてしまった心の俺は思っちゃうワケ」

「確かに、情報が不足している現状では、そういう固定観念を持つ様な考え方は危険だな……」

「そうですねえ……。じゃあ、ひとまずアカギ君のお話は、忘れてコツチに置いておくコトにしましょうう……」

なかなか手厳しい意見が容赦無く飛び交っている。

しかし、それは彼らが仲間としてアカギを信頼し、気を許している証拠である。

……と、自分に言い聞かせて傷付きそうな心を必死に守るアカギ。

「まずは、そうだな……。この、目撃情報の『黒い四足動物』と『ピンク色の頭の子供』というのを調べよう。『動物』の方はともかく、『子供』の方は未確認生命体の人間体の可能性も有る」

手帳に記したメモを見ながらアオイは呟く。

「ピンクの頭つて……。素直に考えれば、そういう髪の色の子供が黒い犬かナンかに乗ってった……。つてカンジだよな？」

「おいおい、まんまかよ？」

首を傾げるアカギと、そんな彼に肩を竦め苦笑するミドリ。

「ピンク色の髪の毛ですかあ……。特に珍しい色じゃないですねえ……」

柳田警部は、人差し指で頬を撫でつつ小首を傾げる。

「確かに……」

彼女の意見に頷くアオイ。

そう、珍しくない。

ちなみに、アオイの出身地では主に中高年の女性を中心に、パープルにセルリアンブルー、シヨッキングピンク、極めつけはレインボー……。そんな人々が大勢いる。人工だが……

その上、ファッションは、豹柄、虎柄ときてゼブラ柄だ。最近のトレンドは、ピーコック……。孔雀柄らしい。

それはともかくとして、何はともあれ捜査開始だ。

柳田警部は珍しく深刻そうに眉を顰め頷く。

「ここは、やっぱり基本に従うしかありませんねえ……」

「なんですか？ 基本って？」

疑問顔のアカギの質問には答えず、柳田警部は、ゆつくりとした動作で胸ポケットから彼女には全く似合わないレンバンのサングラスを取出し架けると……

「昔から言うじやありませんかあ？ 捜査の基本は『足』ですよあ!! 情報は『足』で採つてくる物なんですよあ!!」

ひよい……と上げた膝小僧を、小気味良く叩いて高らかに吠えた。

「まあ……基本だよな。なんでだか、腑に落ちないんだけども……」

「あーあ、カツワイーよなあ！ 理科ちゃんはある。ハツハツハツ」

どこかげんなりした様子のアカギと、やけくそ気味に笑うミドリ。

刑事ドラマに憧れて警察官になった所が多分にある柳田警部に、振り回される事しばしばな『G3—Unit』であつた。

それはともかく、アカギとミドリ、柳田と白鳥沢そしてアオイ、と二手に分かれて現場周辺に聞き込みする事にした。

アカギとミドリは、爆発現場から一番近い商店街にやって来た。

中心部の駅ビルやショッピングモールなどに比べると、手狭で「レトロ」な印象を受ける昔ながらの商店街という感じだが、土曜日の午前中という事もあってか中々の賑わいだった。

「ああ……のどかだなあ。そこらへんの喫茶店で、ティーブレイクつてワケにはいかないのかあ？」

大きく伸びをして青空を眺めながら、ロクでもない事を口走るミドリ。

「良いわけ無いだろう！ なに言ってるんだよ、まったく……」

やる気に欠ける同僚に、アカギは怒れば良いのか呆ればいいのか解らず、肩を落とす事しか出来ない。

そんな、同僚は悪びれた様子も無くアカギの背後を指差し笑う。

「真面目だなあ、お前は。いちいちマジにとるなって。冗談なんだからさ！ とかなんとか言ってる間に『ピンクヘアーちゃん』発見だぞ？」

「うん？」

はたして、その指の先には……

淡い桜色の髪を赤いリボンで可愛らしく二つに結い上げた小学校高学年、あるいは中

学一年生くらいの少女が、一、二歳年上に見えなくもない少年と並んで歩いていた。

何故か、ジャージの少年に比べて、少女は「おめかし」している。

二人は、仲良く同じ携帯電話ショップの紙袋を提げている。

「うーん、なるほど、なるほど。ふたりで、ケータイ選んでペア契約つてワケかあ？ 羨ましいなあ？ 妬ましいなあ？ よし、邪魔しに行くかあ……。俺達も仕事なんだから仕方ないよなあ？ ハツハツハツ」

まるで新しい遊びを見つけた子供の様に、微笑み頷くミドリ。

「オ、オマエなあ……」

呆れるアカギだったが、若い二人の邪魔をするのは確かな事実だ。

それに、この目の前の「お調子者のええかつこしい」が、軽口や冗談を駆使し嫌悪感や罪悪感を『コメディ』化して誤魔化す癖が有るのを承知していた。

しかし……、である。

彼女イナイ暦《年齢ト同ジ》のアカギは、正直なところ、ちよつと羨ましかったりしたのだった。

「よかつたね中沢くん。制服、月曜日には間に合いそうで。わたしも汚しちゃった時は、『西洋洗濯舗 キクチ』なの！ いつも元通り、ピカピカにしてくれるんだよ」

「へえ、そつか。ありがとう鹿目さん。スゴく親切なクリーニング屋さんで助かったよ。でも、受付の人は、なんか怖そうな人だったけど……」

「イヌイさん？ いつもあんなカンジだけど、ホントは優しい人だよ。この前なんか、たつくんにかンディくれたし」

笑顔を交わし合い、他愛ない話に花を咲かせる少年と少女。

少年のほうが『ナカザワくん』で、少女が『カナメさん』という名前らしかった。

会話から察するに、『ナカザワくん』の学生服が汚れてしまい、『カナメさん』が行きつけのクリーニング店を紹介したようだ。実に、仲がよろしいようで結構なことである。

「やあや、御二人さん。俺達、ご覧の通りの“こつち”関係の怪しい者なんだけどさつ。ちよつと話、聞かせてもらつて良いかな？」

無遠慮にも二人を通せんぼする形で立ちはだかり、くるり……とターンを決めて制服と階級章を得意気に見せ付けるミドリ。

「オマエなあ……。怪しい者じゃないからな？ 俺達、見滝原署の者なんだけど……」

そして、やはり同僚に呆れさせられたアカギだったが、努めて明るい口調と笑顔で少年少女に話し掛け、しつかり警察手帳を開いて見せた。

「え、ええと……な、なんでしよう？」

『ナカザワくん』が、一步前に歩み出る。

若干、笑顔が引きつり声が裏返っているが、不安顔の『カナメさん』を庇うように立っている。

アカギとミドリは、頼もしいような、微笑ましいような気分になった。

「そんな緊張しないでくれよ。話を聞きたいだけなんだからさー！」

「は、はい……」

まるでクラスメイトの様な、実に気安い態度と笑顔のアカギ。

しかし、当の『ナカザワくん』は、なんとも居心地悪そうに曖昧に頷く。突然、警察官に話し掛けられたのだから無理も無いことだ……

アカギは、そんな『ナカザワくん』に苦笑するのみで特に気にせず切り出した。

「実は、昨日の夜遅くに、この近く……って言っても、けっこう距離が有るんだけど……昔ホームセンターだった所で事故か事件かは、まだ何とも言えないんだけど、何か爆発したみたいなんだ……」

アカギはペンと手帳を手に、高圧的にならない様に世間話でもする調子で少年と少女に事情を話す。

「というワケで、なんか知らない？ 『カナメさん』。何か見たとか、ヘンな音が聞こえたとか、どんな些細な事でも構わないからさっ。ハッハッハッ」

「え!? あ、えと、あのその……」

何でもない事の様なミドリの質問。

しかし、突然の事だからなのだろう、少女は口籠り桜色の瞳を左右に彷徨させたかと思ふと顔を上げ、何か決意した表情で口を開いた。

「ああ……えと、すみません! 昨日は学校の係の仕事で遅くなっちゃって……。だからその……そう、真つ直ぐ帰宅しましたので何も……そういうのは!」

警官達を真つ直ぐに見詰め返し、まくし立てる様に少女は言った。

「鹿目さん……!?!」

「それで、その……わたし、わたし達すぐに家に帰りました。だから、そっちの方には行つてなくて。中沢くんも……彼に家まで送ってもらったので! だから、その、つまり……ごめんさい!」

呆気にとられる少年を余所に少女は、アカギとミドリに勢い良く頭を下げた。

「いや、そんな謝らないでくれよ。君達が無事で、何かに巻き込まれたりしてないなら、それで良いんだからさ!」

「そうそう」

突然年端も行かぬ少女に頭を下げられ、流石にバツが悪そうな苦笑する警官二人。

「それにしても、『ナカザワくん』……俺は君を見くびってたよ。彼女、送ってあげたん

だ？ いいよ、いいよ。優しいじゃない？ そーゆるーひとつひとつの小さな優しさの積み重ねが『モテるコツ』だったりするワケよ……。ね？ 『カナメさん』」

「ごめん、お前ちよつとだまっててくんない？ えーと、なるほど……そうかあ、うん、ありがとう二人とも。参考になったよ」

アカギは、悪戯つぼくほくそ笑む同僚の脇腹を肘で小突いてから、努めて明るい笑顔と口調で『ナカザワくん』と『カナメさん』に頭を下げて手帳を閉じた。

「デートの邪魔して悪かったな。じゃあ、良い休日をな？ 『ナカザワくん』に『カナメさん』」

「デート?! ええ?! トっ?!」

「あ……!」

アカギの何気ない一言に『ナカザワくん』と『カナメさん』は、揃って固まった。どういふ訳か、二人仲良く顔が真っ赤だ。耳まで真っ赤だ。

「いったい、どうしたというのだろうか。」

「デートなんかじゃ! デートじゃありません!! あ?! いや、なんかじゃなくて!

これは、けっして鹿目さんとデートはしたくないというコトじゃなくて! ああ、な

……なに言ってるんだオレ?! そ、そういうコトじゃなくてですわね! だ、だいたい……

オレと鹿目さんとじゃ、つり合わないじゃないですかあ?! こんなにキレイでカワイイ

人とオレが……？ やだなあお巡りさん。アハハハ……」

顔を真つ赤に染め、一気にまくし立てる『ナカザワくん』。

必死な『ナカザワくん』は、隣で『カナメさん』が、自分の言葉で耳と首筋まで真つ赤に染めて恥ずかしそうに俯いているのには気が付いていない様だった。

(なんか……変なイイ奴だなあコイツ。マヌケだけど……)

(なんて……恐ろしい奴なんだコイツ。カッコつけて無いクセに、完全に口説き文句みたいになってるワケだが……)

アカギとミドリは、それぞれ異なる着眼点でだが揃って苦笑する。

「OK！ ちょっと、落ち着こうか『ナカザワくん』？ お互いフリーな年頃の男子と女子が二人で連れ立って歩いてたら……それは、立派な『デート☆』だ。そうさ！ 君は今、間違い無く『カナメさんとデート☆』の状態なんだぜ!!」

ミドリは、無責任かつ無遠慮に「自信を待て！」と『ナカザワくん』の肩を気安く叩くと、優しい兄貴的な笑顔と『サムズアップ』を残して颯爽と去って行った。

同僚のアカギを置き去りにして……

「ああ、あーと……。なてーか……その、ごめん二人とも。なんか余計なコト言っちゃまっ

たみたいで……」

バツが悪そうに頭をかきながら、少女に頭を下げるアカギ。

「い、いえ、アハハハ……」

「その、えへへ……」

同じくバツが悪そうに頭を下げ、赤い顔のまま苦笑する『ナカザワくん』と『カナメさん』。

「あーその……ご協力ありがとな。まあなんにしろ、ふたりとも仲良くな！ じゃあな！」

なんとなくアカギは、ふたりの『兄貴』になった気分で笑い掛け気安い敬礼をしようと調子者で無責任そのうえ薄情な同僚を追った。

笑顔で少女と別れたアカギだったが、どこか釈然としない物を感じていた。

「なん……なんだろうなあ？ あのふたり、なんか隠してるみたい感じるんだけど……」

アカギは、声を潜めていぶかしむように、ミドリに囁く。

しかし、当の同僚は、ひとつ肩を竦めただけでいやに爽やかなシタリ顔で、

「アレくらい年頃は、大人どころか親にも言えないコトを、色々まとめて胸に秘めてい

るモンなんだよ。若い二人の『ひみつ☆』に立ち入るなんて野暮だぜ？ お巡りさんとしてあったかい気持ちで見守ろうじゃないの……。お前もベッドや机の下に『夢（笑）』をいっぱい隠し持っていたろ？」

と言った。

「……？　なんだ、それ？　0点のテストとかか？」

確かにミドリの言う通り、人間だれしも一つや二つ秘密を秘めているだろうが、同僚の無駄に回りくどい例えに、アカギは、首を捻るばかりだった。

「ホント……、お前はイイ奴だよ。じゃ、レーテンデカ！　次行くぞ。捜査再開だ！」

「レーテン……？」

同僚の口から飛び出したおかしな単語に、アカギは再び首を捻ったが、はた……と気が付いた。

「あつ?!　いや、俺0点なんてとつた事ねえよ！　自慢じゃねえけど、〃0点だけ〃はとつてねえよ！　マジで!!」

必死さが、かえって言い訳じみた印象を与えるが、確かにアカギは、『赤の魔術師（笑）』であつて『零の魔将（笑）』ではなかった。

というか……

本当に、それは自慢にならなかった。

e x 4 : 蜂蜜色の少女★鋼鉄の三銃士

結局……あまり、有力な情報は手に入れる事は出来なかつたアカギとミドリ。

そして、それは別行動アオイ達も同様で……ただ既に手元に有る情報の上塗り……いや、堅固な物にしたと考えるべきだ。

捜査はもちろん、何事のも“速やか”は美德だが、“焦り”は禁物だ。

何より、“餅は餅屋”だ。情報収集は、杉浦警部たち捜査課に任せて……

アカギ達『G3—Unit』も、自分達の“餅”に取り掛かった。

その夜のこと……

テロリズムはもちろん、未確認生命体関連の事件の一番の対策は『予防』である。

徹底した注意喚起と危機意識を持つ事を呼び掛ける事も、また重要なのだ。

へマツチいっぽん！ 火事のもと〜！ 戸締り用〜心！ テロ用〜心！〜

へ油断一瞬っ！ ケガ一生お！ 飲んだら乗るなっ！ 乗るなら飲むなっ！〜

「皆様のご協力が、テロを……そして何より《未確認生命体》の凶行を防ぎます！　こちら、まいどお馴染みの『G3—Unit』！」

「たいへんお騒がせしております！　こちら、あなたの街の用心棒『G3—Unit』
でえ……ありますっ！」

Unitの移動基地である『Gトレラー』に搭載されたスピーカーから間の抜けた標語が、班長 柳田 理科警部の可愛らしい甲高い声で夜の街に響いている。

スピーカーからの声に、《G3》を装着し専用マシン《ガードチェイサー》に跨ったアオイがウンザリし始めたころ、『G3—Unit』は人の気配がすっかり消えたビジネス街に入った。

多くのビジネスマン達が、堂々と肩で風を切り足早に歩く道も、今はひっそりと静まりかえっている。

その時、先頭に行く《G3》を同じく装着し《改良型トライチェイサー2000A》に跨ったアカギが……

『女の子がいた!!』

と、突然G3の仮面ごしに叫び、バイクを急停車させた。

『何だど?』

『ナニいきなり言い出してんの?　いくらモテないからってオマエ……』

危なげなく各々の車両を停車させる後続メンバー。

だが、アカギの言葉に流石の『G3—Unit』も困惑するしかなかった。

何故なら、G3とGトレーラーそれぞれの各種センサー……動体探知、熱源探知そして音響探知も、それらしい反応は捉えていない。

それはともかく、アオイは純粹に疑問符を浮かべる一方で、ミドリは仮面で隠れて見えないが心から気の毒そうな眼差しと声で、彼女イナイ暦Ⅱ年齢の同僚を見つめている。

『ホントに見えたんだって！ たぶん、高校生くらいの女の子が！ 一人で歩いてたんだ！』

『こんな時間に？ しかもビジネス街でか？ 見間違いじゃ……』

『本当だ!!』

なおも、可哀想な子供に話し掛ける様な口調を止めようとしない同僚に、アカギは焦れた様に叫び返す。

『……柳田管理官』

しばし黙って同僚二人のやり取りを眺めていたアオイは、Gトレーラーに向けて通信を開き、自分達の指揮官に呼び掛ける。

「はーい、アオイくん。なんですかあ？」

トレーラーの助手席側のウインドが開け、ひよっこり……と顔を出し手を振る柳田警部。

『……我々で様子を見てくる。管轄外かもしれないが、本当に子供がこんな時間に出歩いているのなら、警察官として見過ごすべきではない……。しばらく、ここで待っていてくれないか?』

抑揚の少ない静かな声で切り出す。

そして、さらに続ける。

『それに、何らかの《ルール》の《ゲーム》……あるいは《そういう能力》で《ゲーム》を行っている《人間体》という可能性もありうる……』

そう、可能性だ。取るに足らぬ微々たる可能性……

しかし、その微々たる可能性を一つ一つ潰して零にする。そうして『安全』を確保するのが『G3—Unit』の重要な仕事の一つでもある。

「ん、うくん、そうですね……。解りましたあ。何か事件に巻き込まれているのかもしれない……。それが良いかもしれませんね、お願いしますう。気を付けてくださいいね? 私達もトレーラーの向きを変えたら、すぐに向かいますう」

柳田警部は、心配そうだったが笑顔で部下達を送り出す。

G3達は、すぐさま各々のマシンをUターンさせて来た道に戻る。

『あそこだ！ あの道だ！』

大きなビルとビルの上に、押し潰される様に小さな路地を指差すアカギ。

危なげなく三台のマシンが路地に滑り込む。

『ほら、いた！』

『ありや、ホントにいた』

得意気な声のアカギの視線の先に、確かに明るいクリーム色の学生服を着た高校生くらしい少女がいた。

少女は、突然のヘッドライトの強い光とマシンのエンジン轟音に驚いたのか、二つの綺麗な蜂蜜色のお下げ髪を揺らしてG3達に振り返った。

『巴』 マミともえ まみ』は、その夜も何時もの様に魔女を探して夜の街に出た。

今夜は何時も以上に緊張する。

自分を包む夜の暗闇の深さが怖い。

自分の視線の届かない曲がり角の暗闇の内に、自分を狙って得体の知れない “何か” がある気さえしてくる。

(ちいさな子じゃ……あるまいし)

このまま、家に逃げ帰りたい衝動が、マミの勇気と使命感のすぐ裏側で燻ぶっている。

あんな話を……

“友達”

としたからかもしれない。

今のママの、大切な唯一の“友達”……

彼とした話というのは、昨夜の“事件”の事だ。

それは、ママたち魔法少女のチカラに良く似た……しかし、何かが違う『強大なチカラ』のぶつかり合いだった。

その夜も魔女を倒したママが、急いで“事件”の現場に駆け付けた時には、既にチカラのぶつかり合いは終わっていて、そこは僅かに燦ぶる炎と砕けた地面や瓦礫が有るだけの廃墟だった。

その後しばらくして、警察や消防の緊急車両が続々と集結し始めた為、ママ自身はその場をくわしく調べる事は出来なかった。

その『強大なチカラ』その物は、百戦錬磨のベテラン魔法少女のママならばだが「引き出そうと思えば引き出せる……」であろう物だった。

しかし、それは

「瞬間的になら……」

という意味で、“事件の彼ら”の様に『常に発揮しながら戦う』という様な真似は、い

かにマミといえども、あつと言う間にスタミナ切れを起こして《グリーンシード》が……いや、恐らくは《命》の方が、いくつ有っても足りはしないだろう。

そして……なんだかんだで常に冷静沈着な“友達”が、ある種の焦りを見せた事がマミの不安を煽った。

『マミいいかい……？ 《彼ら》を……《怪人》を見たら、すぐに逃げるんだ。《彼ら》は、

頭は動物。身体は人間。人間を狙う際や能力を使う時、あるいは武器を取り出す際に、頭の上に強い光の輪を浮かべるから一眼で解るはずだよ』

『魔法より小さいからって、油断しちゃダメだよ。《彼ら》は神話の時代から存在し続け、大勢の魔法少女を手を掛けてきたんだ。どうして今頃になって……？』

『ぼくはキミを……ぼくはぼくの大切なキミたち魔法少女を、無益な戦いで失いたくないんだ……。そもそも、当然《彼ら》からはグリーンシードは獲れないからね。運良く勝てたとしても消耗するだけなんだ』

『じゃあ、ぼくは他のコの所に忠告しに行かなくちゃだから。まったく《彼ら》のせいで、身体がいくつ有っても足りないくらいだよ……。マミ、くれぐれも気を付けるんだよ』

“友達”は、来たばかりだというのに、有無を言わせない忠告と愚痴を残してマミの部屋を後にしてしまい、彼から詳しい情報を得る事は出来なかった。

彼の言う《彼ら》——《怪人》とは《未確認生命体》の事なのだろうか？

《未確認生命体》の事は、書籍や新聞、テレビのニュース映像でしか知らないママだったが、彼女の内では《怪人》といえは《未確認生命体》だった。

文章や写真からだけでも《未確認生命体》の恐ろしさは、魔法少女として戦い続けるママには理解できた。

(悔しいけど……)

自分では、彼らから勝ちを拾う事は難しいだろう。

《第4号》の様に警察や自衛隊の協力が得られるのなら、解らないが……

そんな事を考えていたママの視覚と聴覚が、三本の眩い光と軽快だがけたたましいエンジン音に晒された。

思索と思案の淵から、暗い夜のビジネス街に一気に引き戻された。

慌てて振り返ったママの蜂蜜色の瞳に、オートバイに跨った三つの異形の影が飛び込んできた。

暗闇で紅く光る昆虫の様な三対の無機質な複眼が、ママを見おろしている。

『驚かせてゴメンね！ 俺達、怪しいモンじゃないから！ 見た目はともかく……』

『見れば解ると思うが……、警察の人間だ』

『まっ多少、変わり種なワケだけどね。ハッハッハッ』

……最初の数瞬、マミはそれらを『ロボット』かと思った。

紅い複眼に青い甲羅、そして銀色の三本角……悪趣味な『昆虫人間型ロボット』

同じ色合いなのに、〃どら焼き好きの彼〃と違って愛嬌が全く無い、不気味な姿だった。

『えーと、俺たち怖くないよ……。なんて……アハハハ』

『まあ、無理ないか。見た目的には酷いもんな？ 今の俺ら。ハッハッハッ』

しかし、仕草や話し方で、〃彼ら〃が人間である事は、すぐに理解できた。

(確か……《G3》だったかな？ 困ったな……)

マミは、ようやく以前目にした報道番組で、〃彼ら〃を見た事を思い出した。

家事をこなしながらだった為、どういう趣旨の報道だったかは思い出せないのだが

……

『彼らの存在は違憲！ 存在そのものが悪！』

『国民の払った血税を、人殺しを養うのに使うなんて……吐き気がする！』

『軍靴の響きが聞こえてくる！』

『アジア諸国に不必要な不安を与えかねない！』

と、何やら嫌われ放題、言われ放題だった事は思い出せた。

それはともかくとして、こうしたトラブルを避ける為、夜道を歩く時は常に認識阻害の魔法で見つけにくく……見つけられたとしても「気にされない」様になっているのだが……。

気が抜けていたのだろうか……？

それとも、彼ら三人の誰かが、よほど『勘』の良い人物がいるのか？

そういう人物は時として、運悪く《魔女の結界》の入口を見つけてしまい、自分の方から迷い込んでしまう事が有るのだ。

彼らを「保護」すべきだろうか……？

『こんな時間に、こんな場所で……いったい何をしている？ その制服、君は中学生だな？』

白字で『01』と書かれた紺色の左肩が特徴的な《G3》が、抑揚の少ない声で目敏く質問してくる。

仮面ごしにデジタルライズされた《G3》のくぐもった様な声はさらに機械的で、マミは気圧された。

そこでようやく彼女は、彼らからすれば今の自分こそが「保護」されるべき対象なのだ……と気が付いた。

(「これも職業病っていうかしら……」)

胸中で頭を抱えつつ、マミは言い訳を考える。

「えっと……私、探し物をしていました。だから……」

嘘を吐くのは心苦しいが、態度や口調だけでも真摯な物になるように心掛けて言葉を
選んぴ話すマミ。

『探し物って、なんか落としたの？ 俺達じゃ管轄ちがうけど、悪いようにはしないよ？』

もしかして財布とか家のカギとか？』

『そりゃ大変だ……。俺達、けっこう探し物は得意よ？』

『02』と書かれた赤い左肩の《G3》は、我が事のように気遣わしげな声で心配してくれ、『03』と書かれた緑色の左肩の《G3》は若干軽薄だが優しい声音でマミに語り掛
け領く。

二人の警察官の無償の優しさと気遣いが、マミには仮面ごしにでも確かに伝わって
くる。

魔法少女として……孤独な生き方を強いられ、週に一、二度逢えれば良い所の『友達
』が一人だけの彼女にとっては、涙を流したいくらい嬉しい事だった。

ただし

自分が『嘘』をついていなければの話ではあるが……

「あ、いえ……大した物ではないので！ もう、帰る事にします。お世話をお掛けしました。それでは、失礼いたします……」

『待て……！』

足早に立ち去ろうとするママの背中に、『01』の静かだが鋭い声がかかる。

『君は……その“大した物ではない”物を探す為に、一人で真夜中のビジネス街をうろついていたのか？』

「え？ いえ、その……」

ママの言葉の揚げ足を取る『01』。微塵の容赦も無い。

『01』の巨大な複眼の無表情な視線が、ママを射抜く。

まるで、自分が『ただの15才の女の子』になってしまった様な錯覚をおぼえるママは口籠る。

嘘を吐く事も、誤魔化す事も、慣れているのに……

慣れてしまっているのに……

蜂蜜色の瞳を左右に彷徨わせるママ。

そんな彼女を、無表情に見守っていた『01』は、ため息を一つをついた。

『家まで送ろう……』

『03』の乗るオートバイのサイドカーを後ろ手に指差し、先ほどよりは幾分柔らかく

感情の熱を感じさせる言葉を『01』は呟く。

しかし、それでも十分に有無を言わせない高圧的な雰囲気をもミは感じる。

「あ……ありがとうございます。でも、そんな気を使って頂かなくても大丈夫です。一人でも帰れますから……大丈夫ですから……」

『……勘違いしているな。別に、君を気遣って言っているわけではない。最近、妙な事件も多い。このまま、もし君を一人で帰して、何かがあったなら……俺達の《警察官》としての心証が悪くなる。いいから、乗るんだ……』

「え……？」

ため息をもう一つ吐いた『01』は、ほとんど予備動作も無くミの目の前に移動し立ちほだかった。

「あ……?! あの、私は……きやつ!」

突然襲った浮遊感に、ミは思わず悲鳴を上げてしまう。

『おいおい……。ハツハツハツ』

『03』が、呆れた様に肩を竦めて笑う。

見れば、『01』が自分の両肩を掴み、いやゆる「高い高い」する様に持ち上げているではないか。

『01』は、さほど「重くない」とはいえ……そう、「重くない」とはいえ、成人女性

とあまり変わらない体格の自分を軽々と抱えて歩く。尋常成らざる腕力にも関わらず、両肩に添えられたて掌の力は壊れ物を扱う様に優しく痛みは無い。

ママは幼い頃、父にせがんだ「飛行機」を思い出した。

そして、そのまま『03』のオートバイのサイドカーに、ママは乗せられてしまった。『やあ、いらつしやいませ。プリンセス♪』

『03』は苦笑気味にだが気取った仕草で、ママに微笑み掛けて来るが、『02』は『01』に喰って掛かった。

『おい、アオイ！ 無茶苦茶すんなよな！』

『……無茶？ こんな時間に出歩く子供の言い分を素直に信じる事の方が無茶だな……』

胸倉を掴まん勢いで詰め寄る『02』の剣幕など「どこ吹く風……」とばかりに『01』は微塵も悪びれた様子も無く、心底あきれた様子で肩を竦める。

「あ……あの！ 困ります！ 私は……」

焦って立ち上がるうとするママ。このままでは、魔女退治が出来なくなってしまう。それは、誰かに理不尽な不幸に襲われるということだ。

名前も知らない誰かに、毒を盛られたかの様な理不尽な死が、本人や家族に襲い掛かるのだ。

『……悪いが、本当に困るのは俺達だ。あまり手間をかけさせるな』

有無を言わせない『01』の言葉。しかし、言葉とは裏腹にマミの小さな肩に置かれた硬い大きな手は、優しく彼女を座席に押し戻す。

そして、『01』は拘束する代わりなのか、シートベルトを勝手に絞めてマミの身体を座席に固定してしまう。

『どういふつもりで……君が出歩いているのかは知らないし、知るつもりもない。恨んでくれても一向に構わないが、今は大人しくしていて貰おうか』

『01』は鋼鉄に覆われた指で、マミの少し乱れた蜂蜜色の髪をなだめる様に梳かし撫でると、踵を返して自身のオートバイに颯爽と跨った。

『ゴメンねえ？ コイツら女の子の扱いつてのを知らなくてさあ。だけどね、このお巡りさんは一味違うワケ。俺に任せとけば、つまらない帰り道も楽しいツーリングコースに《大変身》!! つて感じだからさ! ハッハッハッ』

「え? あ、はあ……」

堅牢な仮面とは真逆の柔らかく軽い口調で『03』はマミに笑い掛け、ヘルメットを手渡す。

困惑するマミは、思わず素直に受け取ってしまう。

やり場を無くした剣幕を、どうにか抑え込んだ『02』は視線を『01』から『03』

に移すと、溜め息まじり切り出した。

『て言うかさ……。こら、ミドリ。＼＼ゴイツら＼＼ってなんだよ？　＼＼ら＼＼って？　俺もかよ？』

『焦んなよ。焦ると、凶星を突かれた様に見えるぜ？　それより俺への文句より、彼女への気遣いの言葉を考えた方が、いろいろ建設的だと思うぜ？』

『あ、そ、そうか……。』

おどけた調子で大げさに肩を竦める『03』。そんな同僚に簡単に丸め込まれた『02』は、頭を掻く様な仕草をしつつ、すまなそうにマミに頭を下げる。

『ごめんな。でも、女の子が一人で出歩くのは良くないよ……。こんな夜中に……。』

「いえ、その……。私こそ、ごめんなさい……。」

マミも思わず頭を下げ返してしまう。

彼らは、別に悪意から自分の邪魔をしているわけでは無いのだ。

あくまで、誠実さと親切心から自分を護ってくれ様としているのだ。

感謝の気持ちと歯痒さが、マミの肩身をさらに狭くする。

そんな彼女の複雑な心境を無視する様に、『01』は仮面の右側面を押さえながら抑揚無く呟く。

『《G3—202—01　アオイ》から《Gトレーラー202》へ……。』

へはい、こちら《Gトレジャー202》柳田です！アオイくん、どうでしたか？通信機越しに、幼い少女の様な甲高く朗らかな女性の声が響く。彼らの指揮官なのだろうか？

『中学生の少女 一名をを発見。保護しました。今から、そちらに連れて行きます……』
『01』……アオイは、女性とは正反対に抑揚の無い冷めた声で、機械的に返事をするが……

ふと、マミは無機質な赤い複眼と眼が合った気がした。

『……柳田管理官。年上の同性として伝えるべき言葉と、温かい飲み物の用意を頼む』
やはり抑揚の無い声だが、彼がどういう人物なのかマミには解った気がした。

一言で言い表すなら『不言実行』。

真面目で融通が利かないが、心根は優しい。

しかし、融通が利かないが故に勘違いされて余計な苦勞をするタイプの男性だ。

個人的には好感が持てる。そして、いざと言う時には一番信用の出来るタイプだと思う。

彼なりの、優しさや気遣いを理解出来ないほど、マミは子供では無いつもりだ。

……なのだが、嬉しい気持ちと気恥ずかしい気持ちと共に、年上の人物に気遣われている事に、なんだか解らない違和感をマミは感じてしまっていた。

へはい、インスタントのコーヒーか紅茶しか有りませんが、どっちでも大丈夫な様に用意しておきますねえ。それにしても、アカギ君はやっぱり「良い勘」してますねえ……」

できれば紅茶にして貰いたいのが、この状況で飲み物の注文をつけられるほど、マミは恥知らずでも怖い物知らずでは無かった。

それにしても、やはり彼の中に、自分を見つけれられるだけの「勘」を持った人物がいるらしい。

『今のところ、ガチでヤバイ「現場」とか「シチュエーション」くらいでしか活かされないので、玉に傷なワケだけど……。なっ、アカギ!』

『なんだよおミドリ……。」「現場」は重要だろ? 現に今、助かって生きてるだろ?』
『かもな。ハツハツハツ』

肩を竦める『03』とこミドリは同僚に、おどけた口調で呼び掛ける。

どうやら、「勘」の持ち主は『02』ことアカギらしい。

そして、それぞれの左肩の色が名前になっているのだという事も解った。

恐らくは偽名なのだろうが、あまりの安直さに思わず苦笑していしまうマミ。

その時である。

マミの魔法少女としての「勘」と、彼女の細い左中指の《ソウルジエム》が、不吉な気配を感じとった。

『どうしたの？ 寒い？』

緊張で強張ったマミの顔を、ミドリが心配そうな声で覗き込んでくる。

「い、いえ……」

『なん………だ？ なんか「嫌なカンジ」がする………！ 早くココから離れた方が良い！

アオイ！ ミドリ！』

なんとか誤魔化し彼らを退避させようと考えたマミだったが、彼女が言葉を選び終える前にアカギが叫び、仲間達の顔を仰ぐ。

《G3》達の行動は迅速だった。アカギが言い終わるが早いか各々のマシンを急発進させた。

タイヤが地面に喰らい着き、白煙と砂粒を巻き上げてマシンをさらに加速を促す。

しかし、『G3—Unit』が誇る最高時速300km以上のトライチャイサー、ガードチャイサーをもつてしても、《悪夢》が具現化し、人の世を蝕み、犯し、覆い隠す邪悪な速さからは逃れる事は出来なかった。

色とりどりの鮮やかで美しい絵の具が、空間全体に無秩序に滅裂に、ぶち撒けられ混

じり合おい不気味で無価値な彩に成り下がりにマミと《G3》達を包み込み、《悪夢》の世
界へと引き擦り込んだ。

マシンを急停車させた《G3》達の目の前に、それは唐突に存在していた。

『劇場……か？ どうなっている……』

アオイが、油断無く周囲を警戒しながら呟く。

『ええ……と、そりゃオマエ……。わ、ワープ的な……とか？ アハハハ』

『はい、出た。アカギくんワールド炸裂！ ハッハッハッ……』

アカギの突飛な発言を、何時もの調子で笑い飛ばそうとするミドリだったが、何時も
なら冷静かつ面白みの無い同意をくれるアオイが、黙ったまま頷きもしない事に言葉が
続かない。

『いや、流石に有り得ないって……。え？ 有り得ないよなあ……。？』

『……どうかな？ 少なくとも、俺は完全に否定出来る情報は持ち合わせていないが

……』

『ええー!!』

願いを込めたミドリの言葉を、アオイはバツサリ……と切り捨て、首を横に振った。

話し合う彼らの困惑が、仮面ごしからでもママにも伝わってくる。

無理もない事だ……

彼らにとって当たり前の世界が、突然の悪夢に覆い隠されてしまったのだから。

その上、背後に在るべきはずの道と高いビルの壁は消え失せて、暗闇と悪意、絶望と悲愴が交わり凝り固まったかの様な、蠢く黒い壁が彼らを取り囲んでいるのだ。

(私が、もつとしつかりしていたら……！)

ママは思わず拳を握りしめ、自分の不覚を悔やむ。自分が着いていながら、むぎむぎ無関係の「何の力も無く」「抗う術を知らない」「一般人」を、魔法少女の闘いに巻き込んでしまうなど……

人類の「最後の希望」である魔法少女として失格だ。

果たして、そんな自分に「一般人」を三人も護りながら恐ろしい魔女を倒す事が出来るのだろうか？

倒せずとも、結界から無事に連れ出して上げられるのだろうか？

この結界の主は、それらを許してくれる相手なのだろうか？

知る術の無いママの、疑問と不安は尽きる事を知らない。

ママが一人、魔法少女として思い悩んでいる一方、《G3》達は努めて冷静に現状を把

握しようとしていた。

各々の左前腕の装甲を開け、その裏側に取り付かれた専用情報端末《G—COM》を操作して情報収集を急ぐ。

『《G3—202—02 アカギ》から《Gトレーラー202》へ。……柳田さん？ こちらアカギ！ 《Gトレーラー》！ お願いだ！ 返事してください!! まさか、何か有ったのか……？』

『いやいや、何か有ったのは俺達の方で、トレーラーの方じゃないと思うね、俺は……。GPS情報エラー、現在位置を特定出来ない。衛星を經由……各種通信エラー。ハッハッ……《G3》を管理する為の静止衛星だろ？ ちゃんと仕事してくれよ……』

仲間の身を案じてか焦った様にまくし立てるアカギ。そんな彼とは、対照的に冷静にだが同時に、憂鬱そうに自分達の状況を分析しつつ端末を操作するミドリ。

『どうする？ 手詰りっぽいぜ？』

ミドリは端末を閉じ、もう一人の同僚 アオイへ視線を送る。

『……仕方がない。此処からは、俺達《G3》独自の判断で行動する。残念ながら《G3》に与えられた時間は限られている。あまり呑気には構えてはられない』

《G—COM》を閉じて顔を上げたアオイは、自らの背中を指差し抑揚なく呟く。

彼ら《G3》が背負う形で装着された小型大容量蓄電池ランドバッテリーパックは、各

部パワーアシスト並びに暗視装置を初めとする各種機能のエネルギーを賄っている。

いかに年々改良が進み稼働時間が延長され、そのうえガードチェイサーなどの専用マシンに予備電源を積まれ、跨っている限りしばらくは保つとはいえ、省エネモードであつても装着し稼働させている以上、やはり限度は有る。

『引き返せる道が消えてしまった以上、前に進む他無い……。この「劇場」の探索を提案する』

無機質な視線を「劇場」に……。いや、その奥に待ち受けているであろう「容易ならざる何か」に向けるアオイ。

『「虎穴に入らずんば」ってワケか。コイツは面白く……。は、ならないか……。』

『うんうん、ならない、ならない……。』
おどけた様にも真剣な様な調子でため息をついて、ミドリとアカギも続いて立ち上がった。

ママミとしても彼らの意見に賛成だった。

この場に止まっても、この悪夢の檻からは決して脱出できないのだから。

この世界の主である《魔女》と対決し、これを撃破する他ない。

『どうする？』
「ここは二手に別れるか？」
「ここに残って可憐なプリンセスと二人きりの一時を享受しつつ、この場を確保する「華麗なる俺」と、何が出て来るか解ったもん

じゃない謎の人外魔境を馬車馬の如く駆けずり回る。『泥臭いオマエら』という図式が、俺的にはオススメだが』

『……いや、状況が状況だ。確かな情報が手に入らない今、戦力を分散させるのは危険だ。困難だが……、彼女を護りながら全員で行動すべきだ』

ミドリの冗談に、付き合うそぶりも微塵も見せず、淡々と抑揚無く真面目に返すアオイ。

『うーむ、各個撃破は避けたいよなあ。やつばさ……』

『真面目に答えんなよ……。言葉のキャッチボールがしたいワケ、俺は。もつと。緊張とかそういうのをほぐしたいワケ』

頷くアカギと、肩を竦めて愚痴るミドリ。

『まあ、そういうワケで、ごめんね。楽しいツーリングは、また今度つてコトで。では、お手をどうぞ、プリンセス……』

「え……？ あ、はい、ありがとうございます……？」

ぶつぶつと愚痴りつつも、マミの座るサイドカー側に回ると恭しく一礼してミドリは彼女に手を差し出す。

しかし、そんな『パツと見口ポット』な彼の気取った仕草に、マミは苦笑するしかない。

『俺が呼び止めたばかりに、こんな事になっちゃて本当にゴメン……。君は俺が護る。命に代えても絶対に！』

続いてマシンを降りたアカギは頭を下げたかと思うと、顔を上げてマミを真つ直ぐに見つめて『サムズアップ』を彼女に送る。

『やだカツコイ……。』というか、そこは「俺達が護る」だろ？ 常識的に考えてえ。お前も友達甲斐の無いヤツだなあ、アカギくん！』

実に悲しそうに頭を抱えてミドリは、アカギの肩にしな垂れかかる。

しかし、声は完全に笑っている。

『あ……。いや、悪い。君の事は「俺達」が護る！』

「は……。はい……」

仮面ごしにとはいえ、ここまで真つ直ぐな眼差しで宣言されると、妙に照れくさい物を感じてしまうマミ。

『……。確約できない事を、軽々しく請け負うな。後悔する事になる』

アオイは、抑揚の無い冷めた口調で、同僚の浅慮を嗜める。

『また……。嫌なコト言うヤツだな、お前は。でも安心しろ。俺達は「いざつ」て時には真つ先に矢面に立つ一番頼りになるナイスガイだって解ってんだからな。なあ、アカギ？』

『ああ、そうだ。アオイとミドリがいる！ だから大丈夫。失敗はしない！俺達三人なら！』

しかし、アカギとミドリはアオイの冷たい態度と物言いなど物ともせず、力強い拳を握り朗らかに笑い合う。

場違いにも、なんだか微笑ましい様な、羨ましい様な気分になってしまふマミ。

思わず苦笑してしまう。

『……子供か？ お前らは？ お前達は、今著しく論理性を欠いた発言をしている。うすらトンカチ二名は落ち着け』

アオイは嘆息しつつ『G-COM』を開き操作する。

ふと、マミは彼の赤い複眼がこちらに向いている事に気が付いた。

「あの……」

『うすらトンカチ共と違って……。君は、随分と落ち着いているな。こういう状況には慣れてるのか？』

「えっ……！」

心を見透かされた様な、思いもよらない突然のアオイの言葉に、マミは思わず息を飲む。

自分でも怪しいと思う程に……

『ふっ……冗談だ。笑えない』な』

一言告げただけでアオイは、マミから視線を外す。

『……《G3》専用武装 銃火器使用申請 緊急コードE・指揮車両との交信の途絶』

マミの様子に気付かない振りをして、アオイは作業に戻る。

『G3—Unit』第202小隊 実動班 班長《G3—202—01 アオイ》より申請。《GM—01 スコーピオン》『01』『02』『03』アクティブ……!』

アオイの指令と共に、《G3》達の仮面の内側でHUDヘッドアップディスプレイに、小型自動小銃《GM01》のアイコンと装弾数の『72』、そしてその下に小さく予備弾倉の『72』強化型神経断裂弾を表す『36』が表示される。

《GM—01》の安全装置が解放された事と使用上の諸注意が次々に映し出せると、続いて《GM—01》と《G3》の標準システムがリンクし画面の中央にレティクルサイトが表示される。

これで、右大腿部装甲のアタッチメントに鎮座する鋼鉄の毒蠍は、命令が下されればすぐさま“敵”をその毒針で容赦なく抹殺する恐るべき凶器と変じた……

『はぁーあ……。これは、またしても始末書かぁ……。これじゃ亀有公園前派出所のあの御方だよ、今から憂鬱だねえ……』

『ふん……。余裕だな。それは、この状況から生きて帰ればの話だ』

《GM-01》を撫でながら笑って愚痴るミドリに、アオイの冷徹で酷薄な“突っ込み”が容赦の無く入る。

『嫌なコト言う奴だなあ……。まあ、せいぜい始末書が書く為に頑張ろうぜ！ ハッ
ハッハッ』

『なんか、後ろ向きな決意だな……。でも、そうだよな！ がんばろう！』
『ひとまず、そうするとしよう……。』

三人は示し合わせたかの様に、息びつたり『サムズアップ』を交わし合った。
そして、G3達とマミの闘いが始まった。

e x 5 : ぎごちない3人と1人★歪な劇場

アオイは一人《GM—01》を構え、デッサンの崩れた『劇場』の巨大な門扉に慎重に近付いて行く。

『もうちよい下がろうか。えーと……？　そういや、お互い自己紹介まだだったよね』

マミの両肩を遠慮がちに触れ、アカギは彼女を三台の自分達の専用マシンの後ろに導く。

『俺は《アカギ》。つても、あだ名みたいなモンなんだけどね。ほら！　肩が赤いだろ？

ハハハ』

努めて明るい口調と仕草でアカギは、マミに笑い掛けた。

仮面も笑っている様に見えるから不思議だ。

「あ、えつと……、と……巴。……です」

少しの困惑と少しの焦燥がマミの喉と唇を詰まらせ、彼女の自己紹介を散々な物にしてしまった。

（私って……こんなに口下手だったかなあ……？）

と、マミは後悔とも羞恥とも着かない感傷を覚え、胸の内で盛大にうなだれる事しか出来ない。そして彼女は、自分が教師以外の大人の男性と話す事に慣れていないのだと感じた。また一層先ほどの感傷が増す。

『へえ、『ともえちゃん』かあ、かわいい名前だね。肩の色を見てくれると解っちゃうかもだけど、俺は《ミドリ》。よろしくね』

『よろしくな』ともえちゃん』！ ついでに、あそこの愛想の無いのが《アオイ》って言うだ。肩の色は紺色だけだね』

マミの壊滅的な自己紹介を、特に気にした様子も無く朗らかに名乗るアカギとミドリ。勘違いはしているが……

「あ……の、いえ、すみません。その『巴』は名字で……名前は『マミ』と言います。『巴マミ』です……」

思わず律儀に、愛想笑いで勘違いを訂正するマミだったが、内心では……

（なんで私、身元がバレる様なコト……しゃべってるんだろ？ もしもの時は、この人たちの前で

魔法を使わないといケナイのに……）

と、後悔とも自己嫌悪とも着かない、不可思議で何とも落ち着かない感情に苛まれていた。

『あつ、そうなの？ ごめんな。まあ改めて、よろしくなママちゃん』

『どつちにしても、かわいい名前じゃない。よろしくねママちゃん。ハッハッハッ』

ママの複雑な心境など、当然ながら知る由も無く笑い掛けるアカギとミドリ。

「(いちらん)そ……」

ママは、そんな明るい二人に、自身でも「理不尽だ」と思いつつも、ある種の「苛立ち」を覚えてしまっていた。

そんな自分自身に、彼女が自己嫌悪を覚えたの言うまでもない。

『……楽しんでそうで何よりだが、用意しろ。侵入を開始する』

アオイの冷めた声が、ママを自己嫌悪の淵から引き戻す。

アカギとミドリは、ママの姿勢を低くさせると、無言でそれぞれの右大腿の《GM—01》を引き抜いた。

身を低く扉に張り付く様にしてドアノブに手をかけるアオイ。

ギリギリ……と、僅かに響く痛んだ金属が磨れ合う音。

アオイは、僅かに口を開けた扉の隙間から、《GM—01》の上部に設置されたCCDターゲットスコープのカメラ機能を利用して「劇場」の内部の様子を伺う。

しばらく《GM—01》を上下左右に動かしていたアオイだったが、「ここで待て」とハンドサインを残し、扉を僅かに開けると、なんの躊躇いも無く「劇場」の中に姿を消

した。

『いやあくハツハツ……、相変わらず度胸あんなあ。このシチュエーションで一人が入っていつちやうワケ？ 憧れるよホ・ン・ト。まあ、積極的に真似しようとは思わな
いけど……』

マミの後ろ隣で、ミドリが低い声で笑いながら左腕の《G-COM》を開き操作している。

『うーん。なんか、こんなカンジの“画”。寝起きドツキリで観たなあ。残念ながらバズーカの持ち合わせてないんだよなあ』

マミには見る事が出来ないが、恐らく“劇場”の中のアオイの視界を共有しているのだろう。

それはともかく、何かが起こる前に、彼には早く戻って来てほしい……。

神に祈る様な気持ちで、左手中指に指輪の形で納まるソウルジエムを指で撫でるマミ。

一方、その時……

へアカギ、ミドリ。彼女……巴 マミをどう見る？

アオイからアカギ、ミドリに外部への出力を断ちマミには聞こえない形の音声通信が

届く。

その声は、何時もより数段低く硬い。

〈どう………って？ どういう意味だ？〉

〈鈍いなあ。一人の男として彼女を女性として、どう見ちやうワケ？ ってコトでしょ。常識的に考えて！ もしくは……〉

アオイの言葉の真意を読み取れず疑問符しか浮かべられないアカギを、からかうミドリ。しかし次の瞬間、ミドリの声が口調はそのままにアオイと同じくらい無味簡素な物へと換わり

〈彼女が《未確認生命体》の人間態かどうかって話だろうな……。確かに、こんな状況で、あの落ち着きぶりは、ちよつと異常だよな〉

と、事も無げに苦笑しつつ言った。

〈なっ!!? なに言って……〉

同僚の口から事もなげに吐き出される無感情な言葉と、そんな恐ろしい考えを巡らせながら、彼女に笑い掛けていた事に驚愕し思わず怒鳴り付けようと口を開きかけるが、もう一人の同僚 アオイの冷めた抑揚の無い声で遮られた。

〈言うまでも無く、後者だ。はつきり言って、俺は人を見る眼が無い。怪しい人物は、確証が持てるまで全員犯罪者に見えてしまう。今もそうだ、彼女の一挙手一投足が怪しく

見える」

あくまでも冷徹に恐ろしい考えを取り下げ様子も、悪びれた様子も無く、アオイはさらに続ける。

「……それに、俺はアカギと違って“直接”奴等を見た事はないし、特に“勘が良い”わけでもない。そして、ミドリの様に“人付き合い”が好きではない。だから、お前達二人の意見を聞きたい。彼女は、人類の敵か？ 護るべき者か？ をな……」

弱みを見せるでも、縋るでもなく、ただ事実を事実として伝えた。

「俺は……俺は、彼女は人間だと思う。マミちゃんからは嫌な感じはしない。あの日見た二人とは似ても似つかない！」

「確かに彼女、表情とか視線なんかは“隠し事いっぱい”って感じだけど、なんか悪巧みしてるワケでもないし、未確認でもない俺も思うよ。俺の場合は資料読んで、ナンチャッテ心理学でもって未確認どもの思考や行動のパターンを、それとなく解ってるつもりだけなワケだけ……俺が奴らなら、もつと上手くやるね。それこそ、アオイみたいな底意地の悪い疑り深い奴にも何の疑問も持たれないぐらには……ね♪」

アカギは熱く半ば怒りも込めて感情的に、ミドリは薄笑いを浮かべてつつ冷静に、それぞれのをアオイに話す。

「なるほど、彼女が未確認である可能性は薄いか……。だが、彼女が何か隠し事をしてい

る以上、最低限の警戒は怠るな」

二人の言葉は、頑なな同僚の警戒心をなんとか一段下げる事は出来たようだ。

目の前の異形の警官達が、自分の真横で、自分に聞こえない様に、自分の事で意見を戦わせている事など知るよしも無いマミは、結界に侵入したアオイの安全を思い、一人やきもきしていた。

やはり、もう全て事情を話し「保護させてもらった方がいいんじゃない？」と考えていた。

と、ちょうどその時……

『おっと……、とりあえずホールを慎重に一回りして……。来た道を……』

闇を含み虚ろに口を開けたままの扉の隙間から、アオイが再びマミの前に姿を現した。

『戻って来た……と。そして、キレイなハニーブロンドのお下げが見えてきた。せつかくだから手とか振ってくれない？　かわゆくさ。RECつとくからさ』

ミドリの軽口に、マミはぎこちない苦笑を返す事しか出来ない。

余計な事ばかりしやべる同僚に溜め息を吐きながらアカギは、時々必要な事もしやべらないもう一人の同僚に声をかける。

『中の様子はどうか？ 行けそうか？』

『ああ……とりあえず、ホール内は妙な仕掛けは無い様だ。慎重に行くとしよう』

“劇場”を後ろ手に指差しアオイは頷いた。

“劇場”の玄関ホールは、高い高い天井を宮殿を思わせる太い柱が整然と並び支える立派な造りだった。

全体的に色が悪くすみ、デッサンが歪んで物体の輪郭がことごとくがぼやけていなければだが……

赤い絨毯、入場口にいくつも並ぶ小さな囲い、その内の入場券入れの白い箱
そのどれもにマミは、なんとなく見覚えが有る……

気がした。

思い出すのは、まだ幼かった頃、まだ両親と三人一緒だったあの頃、両親に連れられて観た『不思議の国のアリス』の仮面歌劇。

ちやうど、こんな雰囲気の大きな街の劇場だった。

マミは、何故だか忘れる事の出来ない“家族との大切な思い出”を、汚された気がし

た。

しかし、このホールには魔女や使い魔の気配が無い事には、ひとまず安心した。

《G3》達はマミを庇いつつ、三対の機械の複眼を駆使し、油断なく互いの死角を補い合うよう「劇場」のそこかしこに視線と銃口を巡らす。

『……クリア』

『クリアッ！』

アオイとアカギが小さく叫ぶと、構えた《GM-01》を下ろし引き金から指を外した。

『やあやあ。ゴクロー、ゴクロー』

ミドリは社交パーティーよろしく、マミの手を取って彼女を優雅に恭しくエスコートしながらやって来た。

しかし、彼のおどけた口調と優雅な立ち振る舞いとは裏腹に、歩調と視線には一部の隙も無い。

『……基本方針は単純。出口を探し、発見し、脱出する、この全員……四人でだ』
周囲に気を配りつつ、皆の顔を順に見回すアオイ。

こうして、ベテラン魔法少女 巴 マミをして初の「護って貰いながら結界を進む」

というシチュエーションでの魔女退治が始まった。

《G3》の計器類で感知しているのは、約八割が窒素、後の約二割が酸素……正常な空気がと言える。有毒物質の類は、一切感知されない。

しかし、空間全体に言い知れない違和感と嫌悪感が充満している。息が詰まりそうな程に……

“劇場”の見た目の構造上、まず有り得ない長さや広さ、そして滅裂で無意味に曲がりくねった廊下を進む。

通路を兼ねた展示スペースなのだろうか？

人間大の巨大な糸繰り人形が磔にされる様に

曝されている……

辱められている……

手信号とでも言うのか、《G3》達は身振り手振りのジェスチャーだけで意思疎通を行い、無言のまま互いの死角を流動的かつ三次元的に補い合い、冷静に通路を進んで行く。

しかし、ママに対する気遣いも決して忘れていない。

しかし、ママ自身は気を抜くつもりは微塵も無かった……

無いのだが……

何故だか……

(安心する……)

一人では無いというだけで……

(なんて現金で凶々しんだろ、私……)

彼らとは出会ったばかりで……

本来なら自分が彼らを護らなくてはならない立場なのに……

その時、ママの魔法少女としての“感覚”が、ある気配を捉えた。

それと同時に、先頭を進むアオイが後続のママ達に静止の合図を送り歩みを止めた。アオイは《GM—01》を構え、油断無く周囲の様子を伺っている。

耳に痛い沈黙が続く……

と、その時である。唐突に天井から垂れ下がる糸繰り人形の一つが、ぬるり……とマミ達の目の前に立ちはだかる様に降りてきた。

ぐったり……と、手足を投げ出して床に転がる糸繰り人形が、ぎこちない緩慢で自然な動きで立ち上がった。

マミの身長とさほど変わらない大きさの人形は、無意味にぎよろり……と動く作り物の双眸でマミ達の顔を無遠慮に見回すと、胡桃割り人形を思わせる口を開き笑った。

牙を剥きだしにして、喜色満面に虚ろに笑った。

(使い魔……！)

次の瞬間

人形は耳障りな金切り声を上げ、右腕に括り付けられた粗雑なナタを振り上げてアオイに躍り掛かった。

不自然なほどに侮れない速さで……

だが、マミの反応もまた速やかだった。刹那の瞬間にソウルジェムを指輪から宝玉に換える。

しかし、マミが魔法少女としての姿に変身するよりも

使い魔が顔面を壁に激突し、首から上を多重構造特殊ジュラルミン合金の頑強なブーツに踏み砕かれて、辺りに破片が散乱させる方が、ずっと速かった。アオイが回し蹴り

を放ったのだ。

そして、使い魔の背中に大きなトレンチナイフの様な形をした電磁コンバットナイフ
《GK-06 ユニコーン》が、勢い良く突き立てられた。

「あつれ……ええ？」

『なんだコレ……？　なんだコレ？　なんだコレ?!』

『ハッ……ハッハッ。見りゃ解るだろ？　これは、なんて言うか……そのお……ええと
……こういう……なんか、こういう……こういう物だよ!』

突然の出来事に、三者三様の反応で啞然とする後続の三人。

まず、マミは何のチカラも無い「普通の人」が、使い魔を瞬殺した事に驚き、アカギ
とミドリは、正体不明の「何か」の延髄を冷静に踏み砕き心臓を一突きにする同僚の思
考回路が心配になった。

『……落ち着け。何が起きているのか解らない状況での混乱する事が、一番の危険だ』
冷静なアオイの声。

《GK-06》を引く抜きつつ、立ち上がった彼は続ける。

『……倒す事が出来る相手なら、無闇に恐れる必要は無い。油断しなければ良いだけの
話だ。この先も襲って来る様なら排除する。それだけの事だ。似たようなVR訓練を
散々やらされたらどう?』

《GK-06》の伸縮式の刃を収納し左上腕部アタッチメントに再び納め、マミと同僚二人に向き直った。

『オマツ……、それだけ……って!? 消えたぞ……』

アカギは、アオイの民間人……しかも中学生の少女の目の前での配慮を欠いた冷酷な行動に口調が厳しくする。

が、目の前で“何か”の残骸が、まるでインクが水に滲み溶ける様にぼやけて跡形も無く消え失たため、続きが出てこない。

『ますます何なんだ……? これ……』

『死んだ……、という事か? 殺せる相手なら問題無い』

『ハツハツ……問題無くは無いだろ? 常識的に考えて』

そう、その通り、常識的に考えて有り得ない事だった。

(使い魔を素手で倒すなんて……!)

正確には素手では無いのだが、両親を亡くし一人ぼっちで、魔法少女という事以外は、ごく普通の中学三年生として暮らしているマミの認識では《G3》は

「ただ頑丈そうなヨロイを着たお巡りさん」

であって、あくまで魔法少女の自分が護るべき対象であって、間違っても使い魔と白兵戦を演じる様な存在では無かった。

マミの知らない事だが……

自衛隊では《G3》及び《G4》は『機甲部隊』に配備される。

すなわち、“装甲車両” “戦車” 扱いなのである。

歩兵の柔軟性、装甲車両の防御力と攻撃力を合わせ持った現代最強の兵器の一つ。それが、この第3世代型強化外骨格および強化外筋システム《GENERATION—3 ジェネレーションスリー》こと《G3》システムなのである。

『大丈夫？ 怪我とかしてない？』

『マジでごめん。ガサツな奴でさ。女の子には衝撃映像過ぎだったよね？ おいコラ、アオイ。もつとカワイイ感じで戦えよな』

黙って固まったままのマミに、アカギとミドリ気遣わしげな声がかかる。

「い、いえ、私は大丈夫です……。私の事より、アオイさんが無事で良かったです」

やはり何処か居心地の悪いマミは、それを誤魔化すように早口にアオイに微笑み掛けた。

しかし、当のアオイは無機質の複眼でマミを一瞥するだけで何も答えない。

『なんだ？ 照れてるのか？ どういたしましてくらい言える様になれよな。俺達の口くでもない仕事で、一般の方からの御気遣いと御褒めの御言葉なんて、かなりレアだぜ？』

『……そうかもな。だが、子供に氣遣つて貰わなければならぬほど“ヤワ”じゃないつもりだ』

からかう様なミドロの言葉に頷きつつ、今度は真つ正面からマミの瞳を見つめ返してアオイは続ける。

『巴 マミ……優しいのは大切な事だ。だが今は、君は自分自身の事を考えるのが先だ。利己的になるべき場面だ。少なくとも今はね……』

アオイの冷めた声が、マミの厚意を突き返した上、マミとしては受け入れ難い種の説教までしてきた。

「え……？　でも、そんな……こと……」

思わず何かを言い返そうと口を開きかけたマミの左肩に、そつと優しく硬く大きな手が置かれる。

振り向かば、アカギの装甲に包まれた右手が、マミを諫めるように置かれていた。

『通訳するとね、「君の事は俺達が絶対護るから何も心配しないで」って言いたいんだ。コイツは……口の悪い奴だから……。許してやってよ』

人の好い明るく快活な口調でアカギは仮面ごしに笑う。

『もちろん、俺も同じ気持ちだぜ！　でも、アオイ！　もつと言ひ方考えろよな！』

そして、アオイとマミにとびきりのサムズアップを交互に送る。

仮面に隠れて見えないが、ヘタクソなウインクのおまけ付きである。

『……無駄口は此処までにしよう。行くぞ』

アオイが、アカギの言葉に呆れたのか、照れたのかは、口調からは読み取れないが「もう、話す事はない」と言わんばかりに、マミ達から視線を逸らし深い闇が鎮座する通路の先を睨み付ける。

依然として滅裂な展示通路が続く、有り得ない長さで続いている。

マミの時間の感覚と距離の感覚が麻痺し始めている。

マミとしては慣れっこだが、相変わらず据わりの悪い嫌な感覚。

硬い仮面に隠れて解らないが、恐らく《G3》達も同じ様な感覚を味わっているだろう。

そんな事を考えていると、アオイはマミ達への静止の合図と共に立ち止った。

またしても使い魔だ。

今度は五体の糸繰り人形が天井から降りて来た。

結論から言えば、今度もマミの番はなかった。

アオイは、左大腿部アタッチメントから《ガードアクセラ―》を引き抜き、さらに右大腿部アタッチメントに《GM―01》を納めると左上腕部アタッチメントから《GK―06》を引き抜いた。

『気を付けろよ。アオイ』

アカギもまた《ガードアクセラ―》を構えながら、言った。

『……俺よりも彼女の心配をしろ』

アオイは、同僚の言葉を一蹴すると約3tを誇る脚力と巧みな体重移動を駆使して、一足で糸繰り人形達との間合いを詰めた。

そして、振り下ろされた電磁警棒は、立ち上がりかけた人形の頭部を真つ二つに打ち砕いた。

動かなくなった目の前のガラクタを引き摺り倒し、アオイはその勢いさえ利用して、次なる標的へと疾駆する。

全体重と突進の勢いを乗せた《G K―06》のナックルガードが淀んだ空気を切り裂き、糸繰り人形の胸部を粉碎し、不細工な造作の頭部と鉈の括り付けられた右腕がもげ落とされた。

ぎしぎし……と、耳障りな音を軋ませて各々の手足に乱雑に括り付けられた鉈や鎌を振りかざし、残り三体の人形達がアオイに殺到する。

砕けて転がる人形の右腕……鉈を蹴り上げ《G K―06》を握ったまま、それを掴み取ると、糸繰り人形目掛けて投げつけた。

鉈は、三体の内中央の人形に袈裟がけに深々と突き刺さった。

そのまま前のめりに崩れ落ちる仲間を無視して、左右の二体が同時に鉦を振り下ろしてきた。

不恰な人形とは思えぬ素早い動きだ。しかし、その動きはどちらも大振りで容易に先読みできた。

百戦錬磨の《G3》にとっては止まっているのと同じだった。

アオイは全身に装甲を纏っているとは思えない軽快な脚捌きで、人形達の右脇に踏み込み攻撃を躲し、予測通りの軌道で通過する鉦を見送ると、槍のような蹴りを右の人形の脇腹に見舞った。

胴体がほとんど真つ二つにへし折られた人形は、隣、左の人形に巻き込んで、昏倒した。

左の人形は、仲間の残骸を押し退けて、再びアオイに襲い掛かろうとする。

しかし、高出力電磁パルス振動の刃によって首が胴体から切り離される方が早かった。

“秒殺”

と言つて良いアオイの戦いぶりにマミは舌を巻いた。

純粋な身体能力ならば、勝負するまでもないと言い切れる。

だが、戦士としての“技術”や“経験”それらに裏打ちされた確かな勘働きは勝負す

る事すら恥ずかしいと思う程の差が彼と自分の間には存在していると彼女は思った。

我ながら不毛な……抱かなくとも良い劣等感を抱いていると思う。何故こんな事を考えるのだろうか？ 魔法少女以外の誰かと結界に入ったからだろうか？ どうも調子が狂う。

ママは胸中でかぶりを振り、自分に言い聞かせるように呟く。

彼らは彼らで、自分は自分……巴 マミだ。

自分の倍は生きているだろう彼らと比べる事自体がナンセンスだ。

彼らにできる事を自分ができないからと言って劣等感を感じる必要などない。

自分は、『魔法少女』としてできる事をすれば良いだけの話なのだ。

例えば

魔女を倒し、この結界を破る事だ。

そんな事を考えていた時、

『ママちゃん？ 大丈夫かい？』

アカギが気遣わしげに声を掛けてきた。

消えゆく人形の残骸を、黙って凝視しているママを心配した様だった。

「はい、大丈夫です。アオイさんがスゴク強くて、ビックリしていただけですから……」

ママは、(険しい顔になっていなかっただろうか?)と考えながら、控えめに微笑んだ。

『子供が下らないおべんちやらを言うな。こんな事は、いくら上手くても自慢にはならない。不愉快だ……』

当のアオイは抑揚のない声で、自分への賛辞をあつさり切り捨てる。

「えっ……？」

『お前は、またあ！ そんな言い方ないだろ！ ゴメンなあ、ママちゃん。こんな言い方しかできない奴でさあ』

アカギが申し訳なそうに頭を下げた。

その隣に立つミドリは

『うくん。実はねえ、俺達《G3》の間じゃ、戦う事や戦う力に誇りを持つとかダサッ（笑）”って風潮があるワケ。つーか、オマエ、女の子相手に何マジになったんだよ、思春期かよ？』

苦笑しながら、同僚の態度の意味を説明しつつ、アオイをからかった。

『……いいから行くぞ。』

アオイはもう話す事はないと言うように、ママ達から視線を逸らした。

『おーおー。照れとる、照れとる』

『ミドオリイ。お前もさ、あいつの事あんまからかうなよな。真面目な奴なんだから

さあ』

先程は、同僚の言葉を批判したアカギだったが、アオイを気遣うような事を口にする。『はっはっはっ、愛し合ってるねえ。女房役のアカギ君の顔を立てて、しばらく話し掛けないよ』

それを聞いたミドリは肩をすくめて笑った。

『まあ、マミちゃんとお喋りしちゃうから良いもんね。疲れてない？ オンブしようか？ それともダツコ？ おっと、こりやセクハラだったかな？』

「い、いえ……大丈夫です。そんなに疲れていません、ありがとうございます。」

『頼もしく〜！』

そんな益体の無い会話をしながらも、周囲への警戒を怠らず《G3》達は奥へと進んでいく。

そして、悪意すら感じるほど長く続いていた通路が唐突に終わりが見えた。

そこには豪邸の門扉のような立派な扉が、マミ達の行く手に立ちはだかつていた。

その時《G3》達は、マミには聞こえぬように外部マイクをカットして、通信機ごしに囁きあう。

へクソツ、スゲエ嫌な感じがする。この向こう、ぜったい何かいるぞ……

へああ、そういうのにニブい俺でも分かるわ。いかにもな扉じゃん。それに動体反応も感知してる。結構な数があるみたいだぜ。微弱で正確な数までは分からんが……

〈…しかし、行くしかない。アカギ、彼女を下がらせる。ミドリ、援護を頼む〉

アオイとミドリが《GMOI》を構えて、扉の両脇に素早く張り付いた。

『ちよつと下がろうか。二人が危なくないか調べるからさー!』

努めて柔らかい口調で、マミの肩を優しく抱くと、彼女を物影へ導く。

『はっ、はい』

その時、マミも魔法少女としての感覚で複数の使い魔の気配を感じ取っていた。彼女の顔は緊張に強張っていた。

『心配しないで。これでも俺達、けっこー鍛えてますから! なんてね。だから大丈夫!』

アカギはそんな彼女の顔を見て、怯えているのだと思っておどけた調子で頼もしい《サムズアップ》と共に笑い掛けた。

そして、マミを後ろ手に庇いつつ《GMOI》を再び構えた。

〈1、2、3、で扉を開ける……〉

〈あゝ、待つて待つて。俺のタイミングで行かせてくんない?〉

〈好きにしろ。ただし、ふざけるなよ?〉

〈わかっている、俺は空気は空気読める奴だよ。普段あえて読まないだけでなっ〉

通信で軽口を叩き合いながら、同時に身構えるアオイとミドリ。

そして、ミドリは《G K O 6》の刀身を扉にあてがう。

〈イチ、ニイのお、さあ……ありや!〉

扉の留め金を破壊し様とした瞬間

突如として、扉が勢いよく開いた。

素早い身ごなしで、物影に身を隠すアオイとミドリ。

〈二人とも、大丈夫か! 罨か?!〉

〈問題ない〉

〈罨じゃないが……、待っていてはくれたみたいだぜ〉

見れば、そこは舞台ホールだった。

場違いなほど明るいスポットライトが巨大な舞台が照らされている。

その舞台を無数の客席が扇形に囲んでいる。そして、客席に虚ろに鎮座……いや、客席と一体化している観客役なのだろう使い魔達。

カツカツカツ……

カタカタカタ……

ガチガチガチ……

ガタガタガタ……

耳障りな騒音……ではなく、観客からの盛大な拍手が場内に響き満たされる。

その拍手に応える様に内幕がゆっくりと上がる、スポットライトによつてくすんだ彩りの舞台を闇に浮き彫りにしている。

そして不協和音のファンファーレが鳴り響き、闇の中の誰の目にも触れる事の無い人形による人形のための人形劇劇場の今夜の演目が始まった。

にごせ★サンじゅうロ

いよおうつ、皆の衆！ 今日も元気に『生きている心地のしない同じ事の繰り返しの日』という名の戦場で、戦ってつか？ 生き残ってるか？ 一度でも何かと戦った事あるヤロウは皆、俺の兄弟だ!!

俺様こと、みんな大好き『サンじゅうロ』のおつちゃん、もう飲んだくれてるぜ！ 生理食塩水（ポ〇リ）って美味くいよな！ 寒い季節は、お湯割りに限るぜえ!!

ココでは、俺の自慢の兄弟達の紹介をしちゃうぜえ。……という名目で、俺が定番を増やしつたダラダラとテキトーに遊ぶという企画だ!!

☆仮面少年《中沢★クウガ 格闘体》

俺の兄弟 中沢 元国が、俺が渡した霊石《アマダム》の力によって変身した黒鉄色の戦士だ。

外見的には、頭に金色の釘抜きっぽい物を一本生やして、各所の生体装甲が黒鉄色でやや厳ついクウガだ。

ぶっちゃけると“ニセガドル”だ！ くははは!!

左右パンチ力：約6・1トン

キック力：通常約13・5トン

ジャンプ力：ひと跳び19メートル

最大速度：100メートルを5・3秒で走る

必殺キック：約32トン

硬度・防御力：7

全体的に、本物の《赤のクウガ》の上回り、《金色のアギト》に迫るスペックを持つている。

つつても、数値の上でっただけで《十四年前のクウガ》より強ええかどうかは、また別の話よ。

《アマダム》は“便利な必勝アイテム”でもなけりや“正義のヒーローになる為のアイテム”なんかじゃねえんだかな……。まあ、後は元国のヤロウ次第ってヤツよ！
くははは!!

そして、全体的に数値が地味にキリが悪いのは、中沢くんだから仕方がないと思ってくれれば間違いないぜ！

☆スパイダーロード《アラン・ネア・ピスカートル》

蜘蛛に似た《超越生命体アンノウン》つまり《マラーク天使》だぜ。

仮面ライダーの最初の相手は、蜘蛛怪人ってお約束が昔からあってだなあ……

それはともかく、この兄弟は狙った獲物を、自分の吐いた糸で作った『巨大な網』で『漁場』に追い込み逃げ場を塞いで捕らえ、極細の糸で寸刻みで輪切りにするとう……なかなかの準備魔だ。宴会だなんだのゴタゴタは、こいつに全部任せておきやあ安心だぜ！

《漁をする蜘蛛》って名前は伊達じゃねえってわけよ。

そして、いざ戦いとなりやあ傲慢の怪力と、頭上に浮かぶ光環から取り出す鉤爪《狂乱の角手》で敵をねじ切り、捻り潰す、という愉快なヤロウだぜえ！ くははは!!

※サンじゅう口氏の偏見や思い込みが多分に含まれた見解です。

☆金色の戦士《仮面ライダーアギト》

暁美 ほむらの前に現れた、凄まじいまでに“エエかつこしい”の謎の戦士だぜ。

妙にケレン味たっぷり……要するに“ヒーローらしい戦い方”が異様に上手し、ちゃんとバイクにも乗っている。おまけに武器を使う時は基本的に二刀流らしい。

そんな、中二病みてえな戦い方するくせに、なかなか強ええ面白れえヤロウだ！ くははは!!

左右パンチ力：約7トン

キック力：約15トン

ジャンプ力：ひと跳び30メートル

最大速度：100メートルを5秒で走る

必殺キック：30トン

硬度・防御力：6

☆ジャガーロード《パンテラス・ルテウス》

プロジェクト〇〇挑戦者たち〇〇のナレーションでお馴染みの豹に似た《マラーク》

……ウソだよ。

ハサミっぽい形の雌雄一对の《渴望の短剣》を使う、ケンカ早いが義理人情に篤い斬り込み役だぜ。

※サンじゅう口氏の偏見や思い込みが多分に含まれた見解です。

《パンテラス・トリステイス》

チーム・ジャガーロードの次鋒で黒豹に似た《マラーク》で、鋼鉄をも貫く《貪欲の槍》を自在に操る頼もしいヤロウだ。

性格は、その名の通りオタ……求道者的で、己を磨き揚げる事に余念がない。マンガ

みたいな稽古ばっかりしてる “痛い奴” だぜ!

※サンじゅう口氏の偏見や思い込みが多分に含まれた見解です。

《パンテラス・アルビュス》

雪豹に似た《マラーク》で、《傲慢の弓》を使う。弓の腕だけなら、兄弟の中じゃ上から数えた方が速い、かなりの遣い手だぜ。

チームの殿しんがりを務めるだけあつて、冷静沈着で思慮深いが……思慮深いが故に、他の二人よりも慈悲深い所がある。それで、くたばり損なつた小娘に足下を掬われるんだから世話ねえぜ。

まあ、ガキのお守りで三つ裂きにされた俺が言えた義理でもねえけどよお……くははは！

※サンじゅう口氏の偏見や思い込みが多分に含まれています。

まどか「あれ、サンじゅう口さん？ 何してるんですか？ こんなトコで……」

いよう、まどかじゃねえか。俺は、ほら、あれよ……濁してんだよ。お茶を！ まどか、お前は俺みたいな大人になんなよ。絶対な！

まどか「サンじゅう口さんって……大人……なんですか？」

人ではねえけど、精神的にはおっさんだ。それはともかく、おつかいか？ まったく

お前って奴は、今どき珍しい奇特なガキだなあ！

まどか「これはお手伝いとゆうーより、お買ひものは好きなだけですし。えへへ……」
そうかそうか、まあ感心なのは変わりねえぜ♪ よおしよし、そんな感心なお前に、皆
とつても大好きサンじゅう口のおつちやんが、ご褒美をやるおー。

ジャジャドゴオアアン!! 小中学生垂涎の一品！ ツイン○アミコンだ!! なんと、
コイツはカセットだけじゃなくディスクも遊べるんだぜえ!! マ○オ2のワープ箇所
のメモもやるよ！

まどか「えっ……？ なんですか？ その形容しがたいファンファーレ……。あ、い
え、その、すいません！ そ、そんな高価（？）なモノもらえませんか！ パパとママ
に叱られちゃいますし！」

なくんでえ、俺様のフア○コンが貰えねえってかあ!? ますます感心なクソガキだな
！ ああ、まったくムカつくぜ。まあ、オヤジさんとおふくろさんの言う事も、もつと
もだぜえ。無理強いはいしねえよ。

それじゃ、俺は元国とコイツでエ○サイトバ○クのデザインモードで遊ぶかな。どつ
ちが、どんだけ無意味で悪辣なコースを作るか勝負すんだよ。まあ、あのヤロウは全く
その才能は無いがな！ 毎回、俺の圧勝よお！ 約束なんかしてねえけど元国の予定な
んぞ知ったこつちやねえよ。くははは!!

まどか「あ、あの……。ソレ、中沢くんも持つてるんですか？」

ああ、中古で買ったソフトだけだなあ。あいつ男のくせに、今時ファミ○ンの本体も持つてねえんだぜ！ 笑っちまうよなっ！！ 愕然としたね、流星のサンじゅう口さんも！

まどか「え……。とお……。や、やっぱりください、ソレ！！」

え？ いいけど……。？ ほれ、もってけえい！ くははは！！

く、く、く、くはははは……。まんまと乗せられやがつてえ……

まああつたく……。これだからガキの相手は嫌なんだよっ！！らしくもねえ、老婆心を抱いちまう。

みんなもゲームもパソコンは、一日一時間、部屋を明るくして画面に近付き過ぎないで遊ぼうな！ うんじゃ、まったなあ〜！！

やっば、ツイン○アミコンは勿体なかったかああ……。？

参考文献：てれびくんデラックス 仮面ライダークウガ超全集 小学館刊

同上

仮面ライダーアギト超全集 同上